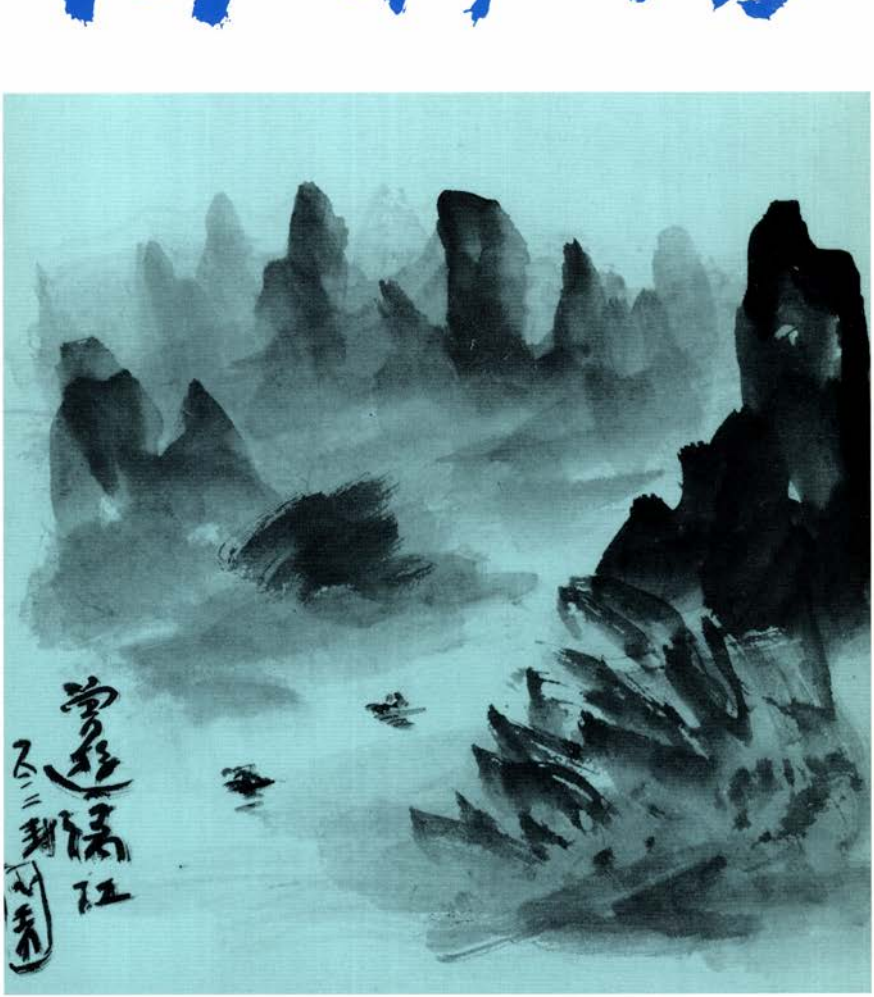
川柳塔

平成十七年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九三六号



No. 936

五月号

日川協加盟

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個　人　一口1/9頁　二、〇〇〇円
　　1/6頁　三、〇〇〇円
　（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団　体　次の四種といたします。
①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円
②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　5月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
TEL06-6629-6914
川柳塔社

田中正坊　川柳句文集

赤えんぴつ

序文――岩井三窓
B6判・二五四頁・上製
頒価二、〇〇〇円（送料共）

赤えんぴつ・川柳こぼれ話・閑人閑話・レモネードの四章に分けて『川柳塔』誌などに掲載されたエッセイ六十六編を収録。
一九九九年以降の川柳作品二〇四句を「続ペンシル」として収めるとともに、既刊の川柳句文集『ペンシル』の全句を「ペンシル（再録）」として巻末に加えた。

◎御注文は左記の著者宅へ

〒561-0826
豊中市島江町一丁目三―五―八〇一
田中正坊

発行所　川柳塔社

うれしい事

河内天笑

ことし一月八日、堺川柳会の新年句会の事である。出句〆切約10分前に次男と彼の経営する居酒屋で手伝っている若い娘さんが、ひょいと会場に現れて出席名簿に記名し、会費を払っている。びっくりしたのは私で「どないしたん」「川柳つくりに来たんやけど」。二人共平然としていて「どこに座ったらええのん」。すると後ろの方で二人分の席をつくって下さった。出句〆切前だったので特別に15分ほどのばして貰うことにした。36歳と27歳が加わった事でとても若やいだ空気が会場を支配して、おまけに二人とも各二句ずつ入選、私も胸を撫で下ろした。

実は次男の店にいつも堺の句報を何部か置いていたのを、この娘さん（川西真澄）が興味を示して「ほないこか」という事になったらしい。いずれにせよ突然のことだが、びっくりと共に嬉しさ一杯ではなまるの句会となった。

そして二月十二日も会場の都合で土曜日の句会となった。するとまた先月の二人と、この日は三男まで現れた。席題「急ぐ」で

急いでるけれどよそ見はやめられぬ　康浩（二男）
救急車呼んで痛みはどこへやら　健造（三男）

折り句「み・ず・な」で

見てしもたずれたカツラを直したい　健造
身を寄せてずっと一緒に泣き笑い　真澄

カルチャー教室にも来てないのに、ちゃんと川柳の何であるかを掴んでいる。四月の会には真澄さんは出席出来ず投句で、

真夜中のトイレで陽気な歌うたう　真澄
襲われぬよう夜はガニ股で歩く　真澄

が抜けていて思わず膝をたたいた。

四月も土曜日だったせいで、山本三郎氏紹介の小堀清次氏（堺市在住27歳）も出席、思いがけなく若人参入の句会になり事のほかよろこんでいる。

なお、リクルートの旅雑誌へ早速のご投句ありがとうございます。寄せられた中にはハワイ旅行の作品もありましたが『おとなのいい旅』は関西じゃらんの名の通り「関西の温泉地」での作品を募集しています。ハガキに三句以内、随時何枚でも送っていただいて結構です。隔月発行ですが毎号私の選評が載りますので、楽しみにしてください。

投句先…四月号巻頭言参照

◆

自選句

脳みそを揺さぶるきつい酒すこし　天笑
ていねいに仕舞った事は覚えてる　〃
あまり腹減ってないのにご飯です　〃
生ゴミを生命線にするカラス　〃
危機管理いつも問われているトップ　〃

座右の句
人恋し人煩わし波の音　（栞）
私の句
振り出しに戻れば見えてくる明日　録沢風花

川柳塔　五月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　うれしい事……河内天笑…（1）
終戦六十年と憲法……田中正坊…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
川柳塔の川柳讃歌（5）……木津川計…（53）
自選集……奥田みつ子選…（58）
水煙抄……波多野五楽庵選…（79）
愛染帖……政岡日枝子選…（82）
誹風柳多留二四篇研究　78……山崎君子選…（84）
茴香の花「葉」……門脇晶子選…（86）
一路集「放す」「アルファ」……藤村亜成選…（87）

終戦六十年と憲法

田中正坊

お月さま残念ながら負けました

今年は、終戦六十年になる。一九四五（昭和二十年）八月十五日、天皇のラジオ放送によって日本の敗戦が発表されてから六十年目にあたる。はじめに揚げた句は、川柳作家の須崎豆秋が敗戦の日を詠んだ作品で、当時における国民の思いを率直に表現している。

表題の「終戦」という言葉は、退却を「転進」、全滅を「玉砕」と言ったように、敗戦という事実をごまかす表現ともいわれた。しかし、戦争が終ったという事実よりも、この日を期して戦争を終らせるというように解釈すれば、より積極的な意味を持つことになる。詩人の長田弘は、この六十年間、日本は一度も戦争をしなかったということから「不戦六十年」という表現を提唱している。

この六十年は、終戦の年に生れた人が、人生における大きな節目である還暦、つまり六十歳となり、徴兵適齢の二十歳であった青年が八十歳を迎えるという年月である。ちなみに私自身は当時、関東地方の本土防衛部隊に属する二十二歳の兵士で、兵舎の前庭に整列して天皇の放送を聞いたのを記憶している。

初歩教室「謝　る」……三宅保州…(88)
秀句鑑賞┌同人吟……宮崎シマ子…(90)
　　└水煙抄……倉益一瑤…(92)
■句集紹介　田中正坊句文集『赤えんぴつ』……奥田みつ子…(93)
四月本社句会……(94)
■エッセー「詠史川柳」
「来た。見た。走った。」……井上桂作…(98)
小池しげおさんを悼む……木本朱夏…(99)
盟友工藤吟笑氏の長逝を悼む……都倉求芽…(100)
各地柳壇（佳句地十選／市丸晴翠）……木村あきら…(101)
柳界展望……(103)
五月各地句会案内……(119)
■編集後記……(120)
……楓楽・朱夏…(122)

座右の句
立ち直れそうな五月の風の中　（智　子）

私の句
白い花溢れるほどの夢を持ち　小泉ひさ乃

敗戦日われ人生を二つ生き

これは橘高薫風氏の句で、明治維新を経験した福沢諭吉の「一身にして二生を経るがごとし」という言葉をふまえた作品である。私も八十年以上も生きてきた間、さまざまな事があったが、この昭和二十年は、軍隊という組織から解放され、生きながらえて一市民に戻ったということから、正に画期的な年であった。そして日本も、いっさいの軍備をなくした平和な国として再出発しており、この決意は昭和二十一年に公布、同二十二年五月三日に施行された日本国憲法の戦争放棄をうたった第九条となって結実した。

九条のむかしの光いまいずこ

「朝日川柳」に掲載された現在の政治状況を詠んだ句だが、この憲法を改めようとする動きが、かつてない規模で強まっている。おそらく改憲を企む勢力は、憲法施行六十年目である二〇〇七年を目途に、彼らの意図を実現しようとしていると思われる。

こういう情勢に対する危機感から昨年、作家の澤地久枝さんら九名の人たちによって、「九条の会」アピールが発表され、今、これに賛同する動きが全国的に広がり、『朝日新聞』によれば一〇〇〇団体を越えたという。

この終戦六十年の歴史を検証し、日本が再び戦争をする国にならないよう、政治的立場を越えて九条を守り抜くことを訴えたい。

河内天笑選

ほどほどの喫水線で余生の譜
公と私のけじめが違う民と官
だらだらと自己陶酔のお説教
核心に触れると回る風車
凛として未練断ち切る落ち椿
表装は地味に抑える自信作

河内長野市　山岡冨美子

飄々と野花をかざす群れにいる
ぱっと開く十指の中にある気力
楚々として洒落た空間あるお部屋
舞い落ちるわが分身をての平に
先客の靴を揃えて靴を脱ぐ
琴線に触れる優しい友と逢う

米子市　林瑞枝

嘘ついた目から光が失せている
用心を臆病者とそしられる
代名詞だけで話が通じ合い
骨のある男だまって受けて立つ
入れこんだ気合に体ついてこぬ
早道は自分の頭切りかえる

八尾市　山本宏至

母さんに包まれたくて里帰り
オブラートに包んだ苦言届かない
スマッシュが弱いところを突いてくる
ウォーキング思案まとまるまで歩く
きらきらの明日を信じている新芽
完走へスタミナ溜める冬ごもり

鳥取県　細田裕花

来年はどうあれ花の種を蒔く
身に付いていれば何時でも取り出せる
大穴を当てて男は風になる
呑みなさい踊りなさいと桜咲く
石橋を叩き時流に放っとかれ
松枯れて様がわりした瀬戸の島

東かがわ市　神保坊太郎

竹原市　正畑半覚

医師は神ナースは女神妻はバラ（友手術より）
目覚めると全てがすんでいた手術
わからないままに命を助けられ
リハビリの一歩一歩にあるいのち
ゆっくりと生きて行こうとバラが言う
人間に生まれよかったなと思う

松山市　宮尾みのり

介護する方が逝ったと寒の冷え
仲間から離れる自我の旅立ちだ
預金通帳もう何年も利子が無い
鼻の差という現実のあるゴール
スマートな上に十センチのヒール
有り難うの言葉を惜しみなく使う

和歌山市　榎原公子

飛蚊症余計なものはモザイクに
嗅覚が失せてあなたが透明に
八〇二〇きっと入れ歯の数だろう
アナログで手堅くご飯食べている
さみどりを食卓に乗せ若返る
児を抱けばだんだん満ちてくる血潮

大阪狭山市　矢野梓

発表がすんで神様忘れられ
春風がみどりの衣かけて行く
大股に一歩踏み出す春スーツ
木の芽あえ春の香りでもてなされ
カーテンを替えてリビング春にする
一呼吸入れて言葉が丸くなり

堺市　志田千代

ガーデニング仏壇の花育てる
野仏に花ドロボーの自首をする
師を仰ぐ歌はうたわずいざさらば
お喋りは大好きなのに人見知り
何やかやすることのあるお婆さん
泣きボクロ皺が隠してくれました

佐倉市　岡井やすお

池の鯉消えても空に鯉のぼり
早い者勝ちじゃと海の底を掘る
首都のこと国やらぬなら都でやろう
杖折れて頭真っ白足よろろ（妻死す　3句）
さり気なく駒動かした名伴侶
結婚還暦あと三年が待てなんだ

吹田市　瀬戸まさよ

春よこい菜の花を和え口ずさむ
いい言葉もったいないが文化とは
いつの世も言います昔よかったと
昔とは幼い頃の昭和です
新旧の争い頑固そうな顔
夜景だけ百万ドルの土地に住み

東かがわ市　成重放任

選手よりエキサイトするサポーター
古時計きざむ一秒長そうだ
冠雪に映える紅梅 山椿
百均も千円並の仕事する
万人の頼みに神も苦悩する
神頼み神は心の中に棲む

竹原市　森井菁居

才気より根気と胸に刻むべし
失敗も授業料ならそれも良し
ピンチでは開き直ってこそ男
急ぐならテクテク歩く方が良い
雲は何故落ちて来ないか考える
ほら吹いた報い重荷を背負わされ

弘前市　髙瀬霜石

月曜日いちばん軽い靴を履く
詫び状を書いてるうちが華である
お互いに手酌ほどよい車間距離
前例がいつでもでかい顔をする
ワル同士声の大きい方が勝つ
天寿全う恩人のいい笑顔

堺市　石堂潤子

有りがとう何度言うてもちびらない
弾かれて踏まれて葦は強くなる
年金カット誰も持たないプラカード
指定席おばさま族と乗る不運
それ取って言うから夫にそれ渡す
糖尿と言わず焼酎党と言う

京都市　高島啓子

白鳥にならなくてよいカラスの子
遠まわりでしたチャールズ皇太子
あの猫も洋種の混じるまだら縞
たんぽぽの綿毛それぞれむこうみず
風鎮の夫であれば書物読む
終点の来るまで乗ってゆく電車

吹田市　太田昭

軽くなった名刺を二枚持ち歩く
怨念を隠す仮面が疲れ出す
心配を貰いまだまだ惚けられず
寂しさを鬼の電話に癒される
捨て切れぬ夢がときどき目を覚ます
屋根裏に子供の野心おいてある

広島県　藤解静風

思い切り砂を吐きたい貝である
誰も居ない時には縦に歩く蟹
おふくろの動きに合わす父が居る
ターニングポイントにする八十歳
遺された帽子が殻のようにある
わが影に労られたりせんように

生きている夢のかけらを繋ぎつつ
平成の風雲児かな若さかな
梅林を俄か詩人の顔をして
何色に染めてわたしを売り込もう
轟音を立ててわたしの流れ星
少年の闇に明かりを灯したい

西宮市　西口いわゑ

津軽弁のめんこいガイドさんだった（みちのく紀行）
何度来ても乙女の像の前で撮る
八幡平　霧のヴェールに迎えられ
白神山地さもありなんの神隠し
もののけ姫がそこに居そうなブナ林
混浴も経験ですと言う酸ヶ湯

海南市　三宅保州

カルチャーで女に磨きかけている
腕くんでゆっくり歩く春の宵
丹精に菜園萌えて裏切らず
鎮魂歌顔一杯の口ならぶ
忘れたいこと何時までも偲んでる
続ければ何時か実ると興じてる

西宮市　井上松煙

花筏蟻一匹が客となる
春弥生パンタグラフが弛緩する
ほろほろと甘納豆のティータイム

豊中市　水野黒兎

菜の花の百万燭光野を照らす
鉛筆がうまく削れて字が走る
嫁した娘の部屋に残った影法師

鳥取市　有沢せつ子

転校日もう仲良しになってくる
親離れ子離れさせる春の駅
ユーモアが好きな講義で目が冴える
雑談が尽きず一バス遅らせる
椅子席の本堂寺も洒落てきた
また元の位置まで戻る物忘れ

大阪市　榎本日の出

恋の唄賞味期限は気にしない
友人と無駄でなかった無駄話
太陽が花ドロボーを見つめてる
汚れてる地球みんなで大掃除
聞く耳があれば色々もらう知恵
ない袖も振らねばならぬお付合い

藤井寺市　楠昭子

きびしさの批判をバネに立ち上がり
手おくれの前に信号あったはず
物指しは自分の都合で伸び縮み
笑わせているがきびしい裏の顔
告白を伝える前の深呼吸
最高の菩薩は妻と気がつかぬ

大津市　中　宗　明

目的のオモチャ売場へまっしぐら
今年こそ天下泰平祈願する
卒寿でもグランドゴルフエースの座
カラオケのエースをねらい励む妻
ずっといる孫が邪魔する昼寝どき

京都市　都　倉　求　芽

ヤミ手当なんでもありの赤字かな
落とし蓋して脳をチンしょうか
無重力なら膝痛も腰痛も
集中力衛星アンテナほどあれば
申告も投句も三月十五日

京都府　丹後屋　肇

二つ折れ伸ばして蝋梅を仰ぐ
もの言わぬ二人饒舌する背中
オーデコロン振りかけて老人臭を消す
百均の指輪で好きな人と逢う
有頂天真っ逆さまのドーピング

亀山市　井　上　森　生

降り懸る不平不満も元は僕
変わり目の風に気付かぬ人ばかり
粛々と本気でやると言うて見る
あり得るか酒の上なら僕だって
不真面目な奴はどこにも自然界

大阪市　西　出　楓　楽

百均で買って壊れて納得す
種蒔きもせずに発芽を待っている
シンプルな服でセンスを見せている
子離れの次に待つのは孫離れ
譲れない線まっすぐと限らない

大阪市　川　原　章　久

金で済む話ばかりやおまへんで
大声で笑える今朝がうれしいなあ
まだ蕾桜いじめる春の雪
風邪薬の代りに潜る縄のれん
菜の花を花瓶に入れて春にする

大阪市　前　たもつ

お見舞の師から気力を貰い受け
人住まぬ生家の庭に春が来る
ターゲットは妻で生涯越えられぬ
小百合みて定食食べる食いだおれ
伸びる芽を摘んでいたかも元教師

大阪市　鶴　田　遠　野

履歴書を垣間見せてる男の背
ポーカーフェース懐にある隠し玉
故郷を食べたくなって墓参り
愛ふたつ境界線が揺れている
ホワイトデー妻に内緒を二つ買う

大阪市　古今堂　蕉子

不器量は形と配置悪いだけ
にこやかに握手した手はなんだっけ
ホッチキスで止めても少し暮しましょ
清く正しく美しく生きた人いるやろか
卒業式仰ぐ師もなく歌替わる

大阪市　板東　倫子

五人囃子が一人足りない古い雛
魂を売った男の千鳥足
生意気で一寸可愛いホリエモン
ゼロコンマ以下の数字で競う利子
抵抗の最後に残す黙秘権

大阪市　神夏磯　典子

実物よりきれいで困る写真なり
結局は何の用事で来やはった
お灸電気マッサージが至福なり
仏さんの扉を閉めて内緒ごと
嫌いだと知りつつ酢の物を添える

大阪市　川久保　睦子

キッチンで妻のレシピが歌ってる
玉手箱やっぱりお開けになったのネ
淡い恋揺れたあの日のイヤリング
あの時に転んだ傷がまだ癒えぬ
母の掌は楽ではなかった千の皺

大阪市　清水　絹子

いつか止む晴れに備えて窓磨く
お見舞いの空のベッドにひと安心
妹の吉日せめて始発駅
姉誘う下見の梅の三分咲き
唐突に断りもなし永久の旅

大阪市　町田　達子

春は良し次次花が出番待つ
公園の桜の蕾見てこよう
犬までがゆったり主と散歩する
噴水も客を呼んでる高く伸び
負けておれない小雀の元気さに

大阪市　小糸　昭子

ベッカムもヨン様ももう旬が過ぎ
でこぽんの名付け上手いね美味しいね
鬼嫁は何処にでもいる　またなれる
淋しさを顔に出せない女です
シクラメンどうして水が嫌いなの

大阪市　安達　はじめ

ほくほくの妻の笑顔に心癒え
人間は生きてる限り動いてる
子を信じ何も言わずに母がまつ
子の成長　節目節目に夫婦もめ
一杯の酒でほやほやする私

大阪市　小谷集一

告白は神様だけにしておこう
この恋も微熱程度で終わりそう
孫からの電話で起きる朝寝坊
野良着にもファッションがある腕まくり
故郷の水マイルドな味で湧く

大阪市　津村志華子

過疎の里　人恋うように丸ポスト
おだやかな心いただく花の寺
悩みごとみんなとばした春の風
風雪にもめげず羅漢のとぼけ顔
健康という財産を持っている

大阪市　伊藤博仁

二分咲きの梅を咲かせたコップ酒
焼け跡で年始あいさつして別れ
祝い鯛跳ねて早めのサクラサク
旅に出て迷わぬように目を治す
猫舌の横でフウフウ一人鍋

大阪市　西川更紗

失敗の数だけチャンスやって来る
夕闇の奥から細い二日月
慕われてうれしいような花あかり
主婦という肩書はずす事もなく
良い目覚め一気にジャンプしたくなる

大阪市　星野きらり

人を選る術をも知らず自動ドア
デパ地下で味見したのが膳の上
年齢を書く欄あればやめにする
平凡で居れば臆する事もない
独りもの賞味期限と睨めっこ

大阪市　熊代菜月

カルチャーで心開いた友が出来
有り難う素直に言えず釘をうつ
喜寿近しまだ捨てられぬ夢抱いて
リーダーになれぬ私の甘えぐせ
口紅を赤く浮き浮きカルチャーへ

大阪市　榎本舞夢

あげる人ないのにケーキ作ってる
一言が重い空気を和ませる
帰るなり仏壇の菓子狙う孫
ライバルに心の傷を覗かれる
備前焼　梅一枝のおもてなし

大阪市　井丸昌紀

褒め上げてさてと上司の怖い顔
さてと腰上げた途端にさて何を
牛乳はビンのまま飲むのが作法
裏表ないのが彼は玉に瑕
正論は赤ちょうちんで話そうか

大阪市　岡本久峰

鶯を鳴かせたこともある嫗
喝采を浴びるヒントを考える
初恋の思い出よぎる霊柩車
大阪城一回りして美味い飯
豊満な熟女に貰うチョコレート

大阪市　岩崎公誠

他人の倍面白いことして生きる
手放しで喜んだ日に蹴躓く
話下手たった一人が騙せない
発車ベル女の涙すぐとまり
何回も奇手妙手では勝てまへん

大阪市　川端一歩

二人ならどこでもよいと花の月
大阪の好きな一つに橋の数
九条の署名嬉しい高校生
三月も大空襲のつらい月
言わぬ手もあったと悔いる帰り道

大阪市　中村叡子

小学生塾にせかれて寒の空
自販機にお茶の銘柄ばかり増え
辛い金取る税務署へこちらから
色々と新手の詐欺に身構える
若者の背なを押したい春の乱

大阪市　大川桃花

目が合って肉を魚に変えた鍋
仏壇に私の好きな菓子供え
母はもう怒っていないドアの音
下山する耳にやさしい水の音
脳味噌を起こすよいしょと声かける

大阪市　小泉ひさ乃

春めいて胸の鼓動が高くなる
雨だれにひとりゆっくりカプチーノ
見送られ子に言うようにあれやこれ
嘘少し混ぜて要領よく生きる
チョコ上げる人いないのも淋しいね

大阪市　奥村五月

山ほどの薬嫌がる腹の虫
同窓会少し自慢も言って来る
定年後ランクを下げた夜の酒
言えぬ過去あの世へ一つ持って行く
ライバルが俺をここまでしてくれた

大阪市　津守柳伸

向こう意気強いお方も風邪で寝る
流感と風邪で異なる処方箋
満杯の休日プラン花暦
無料パス老人控除削られる
啓蟄へうずうず疼く旅ごころ

大阪市　松尾　柳右子

ああ言えばこう言う少年ヘソ曲がり
道教え曲がり角まで見届ける
曲げられぬ役所の規定歯が立たぬ
雑草の緑に勇気もらう朝
薫風に踊り出したかスニーカー

大阪市　津守　なぎさ

風呂上りモデルのポーズまねてみる
バリアフリー完備油断はせぬように
天仰ぐ雪にめげない菊の花
梅林の甘い香りをもち帰る
淡路島水仙の里のぼり降り

大阪市　玉置　英子

今日の無事朝に祈って夜感謝
兎さんアリガト襟巻あたたかい
補聴器に眼鏡入れ歯で恙無く
春一番なんと嬉しいひびきだろう
忘れぬようすぐにメモしてメモは何所

大阪市　近藤　正

根を下ろす土さえ奪う不況風
駅弁を売りにしている百貨店
消費税値上げが本音自公民
改革を唱えていれば支持が増え
サマワでは水も油も売ってます

大阪市　渡部　さと美

講演の先生だんだん若がえり
春場所へ煮干しの頭とりながら
祈るほど世間は丸くまるく見え
梅の枝向きでやさしいしだれ梅
ええかっこう拡げてつじつまを忘れ

池田市　栗田　久子

バッハよりモーツァルトで酌むお酒
菜の花の果てへと落ちてゆく夕日
かりそめの恋さざ波が立っている
まだ一つ手元に残る安全パイ
人の手を介し届いた一番茶

和泉市　西岡　洛酔

遅々進む余生大事に冬炬燵
カレンダーの赤丸生きる糧を見る
悲しみを引きずり流る冬の雲
老いの城守った今日を無事に越し
B面の男の顔が派手に住む

和泉市　中川　楓

ばあちゃんのもったいないは国際語
古雛と昔話をしています
卵酒のむ口実の風邪らしい
どの家の灯も温かく見えている
草餅も亡母の味には及ばない

アンテナが長く雑音多過ぎる
同期会遠い記憶の手を握る
再犯の子に保護司の背が痛む
ヒラでした再就職が楽でした
名文の弔辞に拍手したくなる

和泉市　横山捷也

改革元年今年義理チョコ友チョコへ
札束で社長が首を叩かれる
アチラ語で言う乗っ取りのかっこよさ
センセイに痴漢増殖注意報
高齢化笑い袋の常備薬

泉佐野市　山本蛙城

屋上で妻の買い物待つ子守
悔しいが酒に溶かしている主張
釣り堀に弁当がくる嫁と孫
言葉より涙が先に出てしまい
裸婦像にうっとり妻に背を押され

茨木市　藤井正雄

空襲から六十年生きている
今一度命みつめて生きていく
喜びを隠していても声跳ねる
良心へ言訳をして無駄遣い
脱皮するチャンスは春と決めて待つ

柏原市　永浜加津子

背を曲げて妻の暴風域に居る
ああ夫婦同じめまいの薬飲む
老眼に見えない髭の剃り残し
今にして思えばあれが花の日々
健康でいるのがまずは大仕事

交野市　山川日出子

伝説の交野へ貴族鷹狩りに
民謡は土地の情けか里の味
フジテレビとにらみ合ってるホリエモン
とおりゃんせの遊びが消えた園児たち
空とべる魔法の靴をさがしてる

交野市　森本弘風

悪魔から風邪贈られた誕生日
城南宮梅に見とれて風邪貰う
妻からは誕生祝い風邪薬
食欲を風邪に盗られてダイエット
缶ビール一つで酔った病み上り

河内長野市　植村喜代

戦争の生き残り友が減って来る
生きるとは辛いことです　みのもんた
早くても遅くても文句になる食事
人の手で嘘をつかせた花の彩
何もない頃もよかったなあ今思う

交野市　田岡九好

河内長野市　井上喜酔

昭和から親子三代トラファン
妻が行く散歩コースを犬は知り
カラオケの音へ馴染めぬ古時計
呼び出しに便利なケイタイ老いの供
開発へ自然が欲しい鳥の群れ

河内長野市　水谷正子

年寄りが切ない恋の歌うたう
ハンドルの遊びくらいの呆け具合
勘三郎　隅から隅へお茶の間も
ホリエモン株の不思議を植えてくれ
上等の風邪主治医から貰てくる

河内長野市　村上直樹

御堂筋さても変らぬ懐かしさ
後輩と飲めばマグマが溢れ出す
ガン検査羽ばたく春の運試し
年金の試算余命が行き詰まる
どこまでもお慕いします諭吉さま

岸和田市　岩佐ダン吉

下戸混じり恐ろしいほど食べている
引き際のけじめトップが計られる
勝組になれと調子の良い総理
九条を守るひとりの風になる
辛酸を嘗めて私の道になる

岸和田市　亀井皎月

弁当に御馳走包む家族愛
読み書きも算盤も出来赤字出す
万札を砕けば三日持たぬ釣り
願いごと多過ぎ神がうろたえる
築四十まだかまだかの修繕屋

岸和田市　雪本珠子

お隣に明かりがつくとほっとする
わたし今顔より心磨いてる
さりげなく別れたけれど悔い残り
悲しみを風はマジシャン消してくれ
人はみな悲しみ背負い生きている

岸和田市　井伊東吉

スイトピー　パステル調が春を呼ぶ
藍　愛が日本の花と咲きほこる
年金の一元化への道険し
国債の依存体質抜けやらず
米牛肉安全徹せよ農水省

岸和田市　長谷川呂万

だんじりとお城の街にある文化
ダンディーな彼に男の色気あり
世の流れ今浦島になる傘寿
定年へ仕事の鬼も去ってゆく
嫁のことぼやいた後の孫自慢

和洋中仏伊グルメで糖尿病
大食いと激辛テレビやめてくれ
自爆テロ神の名を背に罪重ね
デッチ上げ底に流れる悪だくみ
力づく押せば押すほど嫌われる

岸和田市　中島寿海

負け犬も目的果たし良い笑顔
ありがとう言えば言うほど幸せに
亡母恋しいつもこの頃豆ご飯
また一つ病名増えた花粉症
恐い事件多発しすぎて麻痺してる

岸和田市　土橋房枝

その気性昔のままと友笑う
いい夢が見たくて毛布替えてみる
避難所の毛布に絆固め合う
ユーモアを磨くピエロの紅い鼻
台所磨いて母は満ち足りる

岸和田市　原さよ子

好き嫌い言わぬが旨いとも言わず
B面の詩に憧れて口ずさむ
ライバルのミス心中はほくそ笑み
車間距離上手にとって仲が良い
真っすぐな道を歩めて悔いがない

堺市　村上玄也

ガラス戸をピカピカにして春を待つ
うちの孫この春保育所デビューです
お雛さま飾り娘とワイン飲む
なるようになるので無理はしたくない
春の靴買いに行きましょいい日和

堺市　河内月子

冬銀河　異国にありて身に沁みる
ゆっくりと自分見直す雪しんしん
仮の世を芝居上手に生きている
少うしラフにくだけてみよう年だから
寒明けだマツケンサンバ踊ろうよ

堺市　神原文

食卓に夫の好きな春野菜
自信ないけれど人生振り向かぬ
真っすぐに生きてきたのが取柄です
二人きり相槌だけはしてくれる
生かされているのに愚痴が出てしまう

堺市　齋藤さくら

ふるさとに黒光りした福の神
小鳥たちが思い出させたラブコール
土人形と旅の話をして飽きず
お洒落して出掛けるケーキバイキング
下戸だった人に供える桜もち

堺市　山本半銭

晶子様道を説く人減りました
ペットさえ思案顔して午後の二時
うつくしい嘘だ真面目に聴いてやる
あほかいなで終る漫才羨まし
花粉症のつらさで句会盛り上がる

堺市　柿花和夫

気がつけば五月ひとりは欲しい孫
涙もろいと思わせておく花粉症
ダイヤでは女心は動かない
妻ふまん夫期待の子の彼女
予想どおり馬は走ってくれません

堺市　加島由一

新しい背広制服ターミナル
開業と転勤　主治医去って行く
法善寺高歯の音も消えて行く
つくづくとスープの冷めぬ距離おもう
お口よりあんよは上手一歳児

堺市　源田八千代

不登校母の信じる目が支え
双方の親へのけじめ式挙げる
雲掴むような話も酒の席
誠意にも賞味期限がありました
無意識にポスト拝んでしまう癖

堺市　矢倉五月

金の鯱お待ちしてます地球博
もう許せん空残業が税を食う
野心捨て猛者ものたりと春の海
いさぎよい桜吹雪に負ける薔薇
的つかれ声震え出す隠し事

堺市　西村りつえ

朝やけへ白いカーテンそまりゆく
あけがたの咳をミルクになだめられ
咳きこめばカーテンの白まぶしいな
つつがなき夫のひらく鏡餅
風邪の眼にま昼の雲が笑いかけ

堺市　近藤豊子

信心の主はこころの中にある
ほおばってみたら貪欲さにめざめ
なぐさめの言葉なおさら疵にふれ
微笑を絶やさなければみな美人
迷路なら出られないのであたりまえ

堺市　和田つづや

ご自慢の肩書き会社ごと消える
ほどほどの逃げ腰で打つ鏡割り
鼻欠けたクレオパトラを描いてみる
閻魔にも口を割らない覚悟した
青テント風の便りに耐えている

四條畷市　吉岡修

吹田市　山本希久子

キティちゃんと眠って母は二度童子
エプロンが似合う男の余生なり
旬を食べる少うしずつでいいのです
もう恐いもの何もなし古希の坂
キッチンの鎖私を放さない

吹田市　岩屋美明

目の合った日からおんなじバスに乗り
男にも男の泣ける場所がある
人知れず涙で吹いたハーモニカ
友達になりたく波をたててみる
来世では夫婦交替するつもり

吹田市　穴吹尚士

嬉しいが少し淋しい子の巣立ち
あばら家になってローンがやっと済み
いつだって悪い予感は外れない
今はもう戦友のよう妻と居る
洒落た店ひょいと見つけた迷い道

吹田市　大谷篤子

月明かり次元の違う孫と居る
車座のハンカチ落しセピア色
傷心に体温もとに戻らない
振り向けばひな人形も古希近し
前向きに今日のページを生きている

吹田市　木下敏子

阿呆になるこつもおぼえて年の功
失敗が薬になった花の彩
予定表野にも山にも古希の春
ぶらんこの揺れに青春よみがえる
内視鏡に腹さぐられている不安

吹田市　早川棲世

大阪弁の人大阪の顔でくる
寝るだけの町で見知らぬ顔へ票
出世では負けたが女房はうちが上
こんな世に男は馬鹿だから娶る
同窓会恩師いまだに努力説く

吹田市　野下之男

王様も裸にされて徒(ただ)の人
大変だ我が師の恩が消されてる
楽しみはマツケンサンバ良い日本
焼酎と蘇州夜曲で春の夜
初恋が物を言うてる桜色

吹田市　須磨活恵

蓬つむ私へ春の陽がこぼれ
惜別の季節がめぐる沈丁花
息災で今年も作ったよもぎ餅
観音様守る形で座禅草
お互いに空気になってゆく夫婦

大東市　南原正和

梅の花咲いた咲いたと妻を呼ぶ
風邪で伏せ流れる雲を窓に見る
序破急の御陣乗太鼓音高し
人が死ぬテレビ見ながら朝御飯
乗り遅れ電車睨んで駅に立つ

大東市　児玉蛙

物忘れ年のせいだとあっけらかん
年金に見守られてる老いの日々
エプロンがしっかり母の顔にする
ころんだら手を貸す人がたんと居る
おとぼけに嘘も真も読まれてる

高石市　浅野房子

全快の祈り空しく逝き給う（小池しげお様）
葬式に訃報一切おことわり
エンドレスぬかるみつづくこの世なり
それからの話は何れそのうちに
わたくしが目の上のたんこぶだった

高槻市　生田義一

神社より露店が目当て天神さん
春一番浪速の町にふれ太鼓
走っても勝てぬ迷馬が名を残し
街角でばったり君もふけたなあ
ホリエモン一人で紙面飾り立て

高槻市　執行稲子

目立つのが好きで失敗ばかりする
マツケンサンバ老いのステップ千鳥足
キャンドルを灯す花嫁の頬も燃え
わてに早よ恋くれやっしゃ青い鳥
柏手は倍ほど絵馬に運託す

高槻市　瀧本きよし

天国へはホップステップジャンプする
運動は嫌いよく食べ二段腹
スイミングクラブ人魚もいるがトドもいる
教育にゆとり導入国枯れる
なんぼ要る五百万なら貸したるで

高槻市　西谷治三郎

目玉入れその後はよく寝る議員さん
窓際の風よさよならデスク去る
風呂わかしお帰り待ってた頃ありき
電気ガス経費苦になる温暖化
トンボリの大きなたこ焼き口踊る

高槻市　江原秀夫

神の声聞きたい耳が遠くなる
余生には余生の定め花吹雪
雰囲気に押され意見は水に書く
やれば出来る錯覚杖に八十路坂
大声の議論にセンス流される

条件つきで緩めてくれた妻の箍
お宝本求めて今日も古書漁る
西陣の歴史をつづる機の音
茶柱はなんだったんだ日が暮れる
嘘つかぬ友の世渡りぎこちなく

高槻市　傍島克治

美容院　鏡の女どちらさま
草萌えてはねまわりたい輝いて
交渉は通らず値札通り買う
嫁ぐ日がきまって父が笑わない
以心伝心　虫が好かない者同士

高槻市　井上照子

ゆったりと威厳具えている無口
通販で買う手軽さがくせになり
失敗を肥やしに太い幹になる
お義理でも嬉しいバレンタインチョコ
お持ち帰り特価と書いたごつい家具

高槻市　左右田泰雄

公約を消しゆく語尾の荒削り
年金へ言いたい個所が大部分
遠足の列を乱して岩魚かな
サスマタが校長室で番を張る
税申告バッチリ合って花吹雪

高槻市　富田美義

老体を励ます行事目白押し
猥褻なる行為　政治家葬られ
気心が通じて猫も膝へ来る
よそ様の事は知らない私流
シンプルな暮らし年金板につく

高槻市　乙倉武史

白いもの降って来ましたお大事に
二十日月私の耳鳴りだけ聞え
阪神をよろしく神サンほとけサン
春一番髪吹き乱し戸を鳴らし
場の空気読んで笑いを引っ込める

豊中市　安藤寿美子

反応の鈍さもあって好好爺
今なんでおかしかったか訊いている
おばちゃんはさすがさすがの値切りよう
お芝居でないコンバット見るテレビ
やっぱりとまさかで噂出来上る

豊中市　江見見清

名残り雪はげしく舞った梅の花
誕生日梅酒で酔うて笑い合い
亡き母もきつかったろう今我が身
春一番二番三番杉おどる
お偉いさん奈落の底を見る羽目に

豊中市　山門タミ

家事仕事趣味天秤に八十路坂
八十路坂自営隠居はままならず
八十路坂今日の予定を画く朝
八十路坂いつまで続く貧乏性
現役は続行八十路年取らず

豊中市　岸田知香子

二度お辞儀してもまばらなアンコール
親と子の懸け橋となる読み聞かせ
あの人のようにも見えた流れ星
涙ぐむ人がぽつんと居る葬儀
二千円札のお顔は拗ねたまま

豊中市　藤井則彦

六十年網膜にある焼夷弾
泥沼の地球へせめて月の冴え
答出ぬまま手さぐりで生きている
思惑と違う自画像出来上る
春の陽に生きとし生きるもの光る

豊中市　吉田あずき

脱ぎ捨てた仮面涙のあとがある
再会の約束果たす炎を抱いて
やわらかい風が私を惑わせる
薄氷を踏んだ記憶のある背中
ハンドルの遊びに鬼を休ませる

富田林市　大橋鐘造

潮時が来て耐震に建て替える
覚悟して娘家族とひとつ屋根
奥さんの愚痴を言ったらモテません
信じるしかなし介護保険も国債も
雅子さま本音聞かせて下さいな

富田林市　藤田泰子

住み慣れた町で待ってる春の音
三日月夜　指絡ませて回り道
追伸を透かして愛を確める
幸せに慣れて貧しい語彙ばかり
傾いた門扉に私の挽歌

富田林市　中井アキ

手洗いで必死に香るラベンダー
押し返す鬼千匹を盾にして
糠床をかき混ぜながら朽ちる指
ゆっくりと春を溜めてる福寿草
わたくしが香るあなたのてのひらで

富田林市　池森子

定退日しっかり走り抜けた笑み
再会へ煤けた夢がはじけだす
中開き飲みすぎた手がトチッてる
借金の揉み手がやがて捨て台詞
卒業も諭吉ひと役担がされ

富田林市　稲川惠勇

富田林市　片岡智恵子

花粉症風邪ほど案じてはくれず
失敗とうまく付き合う昨日今日
肩書きでなく生き方を見せた亡父
得意より好きな事だけして生きる
大器晩成そろそろ期限切れになり

富田林市　中崎深雪

赤飯が待ってくれてた定退日
厨房から夫いちいち指示仰ぐ
もし産まれ変われるならばやはりヒト
新緑を描く絵の具が作れない
見てごらん笑うてはるわ春の山

寝屋川市　籠島恵子

尊厳死の話夫婦で話しあう
割り勘の事でもめてるお人好し
身の置きどころ知っているよう寒椿
いい人もいつか化石となるさだめ
さくらからさくらに渡る橋がある

寝屋川市　森茜

やさしさを評価にしない通信簿
内緒ごと聞く耳先を尖らせる
買わせたくあんじょう練ってあるプラン
骨密度歳相応で喜べぬ
緊張に弱い空咳でてしまう

寝屋川市　江口度

般若心経となえる魔法にかからない
マスクしても眉間のしわに杉花粉
かくし過ぎてとうとう紛失することも
真ん中にみな自国ある世界地図
灯油値上げ納得させるような冷え

寝屋川市　平松かすみ

楽しみのひとつ母方従兄弟会
半世紀振りの出合いへ指を折り
カタカナ語こんなに並べ説明書
全身を映し健康チェックする
子供等の心を乱すヘリの音

寝屋川市　太田とし子

賞金を拝む家族がいるクイズ
ステップの鈴が鳴ってるランドセル
七変化の空に悩みをぶっつける
八十半ば鼻水おちてくるピンチ
腰痛い足が難儀と閑がない

寝屋川市　冨山ルイ子

初対面深いえにしの予感する
さまざまな夢を仲間と頒ち合い
お見舞いに行けばよかったあとのまつり
黒枠の温顔涙あふれ出す
泣き虫にちょっぴりなったなと思う

寝屋川市　坂上髙栄

春一番西から黄砂のお客様
お水取り歴史の重さ垣間見る
吹き荒ぶ春一番のやんちゃ姫
物溢れ心の底が干涸びる
日本語の深さ子供に教えねば

羽曳野市　酒井一壺

長生きも仕事と思い生きている
へそまがり長いものにも巻かれない
めくるめくあっと言う間の九十歳
どう見ても人の長たる器ではない
妻の声やさしくなって要注意

羽曳野市　三好専平

無愛想な顔で落語家笑わせる
ジュンちゃんを捨ててヨン様追いかける
九条に未来の知恵がつまってる
新四字熟語いやな世相をあぶり出し
トンネルを抜けるとそこは雪どまり

羽曳野市　安芸田泰子

美辞麗句並べた後の肩の凝り
味方だと自分勝手の思い込み
頬杖をついて見ている蝶の羽化
同い年で若さを競うクラス会
ひとときを少女に還すクラス会

羽曳野市　吉川寿美

呑み込んだ恥がじんわり疼き出す
気負ってはみてもおんなの力コブ
もの忘れ物みな芽ぶく春なのに
親友の訃へ丁寧に書く御霊前
月の暈友はこの世の人でなし

羽曳野市　徳山みつこ

ヘソ出しルックへ腹巻きをあげようか
ヨン様ケン様とおばちゃん忙しい
四月までロング出演うちの雛
アナログの脳パソコンに見限られ
一面がとんと九条語らない

阪南市　森村美花

安心で安全　愛もプラスの手弁当
冬の旅温泉がいい雪もいい
ひと言が残り気持が熱くなる
不意に出た言葉繕うすべがない
階段の下り気になる歳になる

東大阪市　安永春

キャンドルサービス握手の嵐吹いて春
カチャカチャと階段急ぐ派手な靴
蛇が卵を呑むように拉致されたまま
病室の煙草はすぐに見つけられ
別荘と思って堪える白い部屋

東大阪市　中岡　妙

善人が集い行先決まらない
秘密だと聞いて楽しくなる噂
せっかちな人には道を譲ります
もう無理とこむら返りで返事する
面影を子等に残して友が逝く

東大阪市　笠井欣子

老いて今　年相応の物忘れ
生きている幸きっちりと三度食べ
ブランドを買いに学生イタリアへ
母と娘のペダルが弾む夕茜
趣味多彩浅く学んでかすみ草

東大阪市　北村賢子

手放しで抱き合っているサクラサク
何も無い暮らしに愛が溢れてた
生き下手でうまく仮面をかぶれない
葉を縫って射す木漏れ日がやわらかい
時折は自分殺して生きている

東大阪市　指宿千枝子

日本の梅にはメジロ　ワンダフル
ずんぐりむっくりの梅の名は楊貴妃
誕生日だったと気づく日記帳
耳のせいにしてゆっくりと返事する
ガン予防言うて何でも食べている

東大阪市　谷口義

新聞をたたんで桜見に出掛け
することはあるが桜が咲いている
夜桜に一人で行ったとは言わず
夜桜に別れた人とすれ違い
さくらさくら家庭医学の本を読む

枚方市　安達忠央

ことばより嬉し涙が先に出る
いらっしゃい威勢の良さも味のうち
酔うほどにマル秘まで言うなめらかさ
臆面もなく生き甲斐は妻という
栄転も左遷もなくて引越さず

枚方市　森本節子

春一番訪れたのに雪ちらつく
折角の梅見寒さに断り状
ヒヤシンス去年の床から顔もたげ
コンビニが近くで重宝不精者
三月は法事二つに孫の進学

枚方市　荘司弘之

穏やかな顔で見ている福寿草
ホルモンの匂いに足が向いている
枡酒の皿に吸い寄せられている
クラス会病気の話にぎやかに
ゆっくりとステレオ聴ける妻の留守

枚方市　宮川珠笑

ガン取って七年余命がまだ続く
介護連れあまり長生きせんとこな
老いるほど脱皮不足の業が出る
一日で孫を笑わすネタが切れ
さあ今日も本心かくす紅をさす

枚方市　二宮山久

ボケ封じ始めた六十歳の弦
妻の愚痴きいてまた飲むコップ酒
三月も半ば花見の準備する
吟声にようやくなったと三十年
手枕の添い寝の妻は元気もの

枚方市　海老池洋

時どきは弾き合うてる夫婦独楽
張り切りの過ぎた私の空回り
五百羅漢なかに苦手な顔もいる
良心へ良心を売る無人店
右向け右　許してならぬ第九条

枚方市　寺川弘一

自由を捨てる君と結婚したいから
正確に痛いところを突く歯医者
神さまが優しく突いた子のえくぼ
お墓より自分史一冊遺したい
定年後売りたい自由だけがある

藤井寺市　髙田美代子

春燦々木の温もりを信じよう
キャベツ畑の上を蝶々が通る
淋しそう雛人形が終われる
御用済み左遷の椅子が待っていた
春一番　人事異動の季節だな

藤井寺市　中島志洋

五月雨に歓声あげる雨蛙
飛ぶ鳥を落したボスも塀の中
人生のゲームにもある運不運
下がるから人は見上げる藤の花
仲直りしたい男の咳払い

藤井寺市　太田扶美代

楽しくてどこか淋しいバス旅行
自分史に関わりのない恋をする
散り際を決めかねている梅の花
嬉しい日悲しい時も日本の茶
冬眠のあいだも歳をとっていた

藤井寺市　若松雅枝

百歳を目指しジョギングやめられぬ
揉め事を丸く治める母の知恵
子の相談お金のかかる事ばかり
老姉妹節目ふし目にある絆
ライバルに後ろ姿は見せられぬ

さてさてと想いを馳せて眠られぬ
斜の雨に出窓の花も目を覚ます
図書館のわたし全く似合わない
太い字の手紙は太い字で返事
お祈りは夜まで続く鶴を折る

藤井寺市　鴨谷瑠美子

いくつになっても子の将来が気にかかる
手も金もかかる男を飼っている
傷つけたくなくてケンカが苦手です
夫婦だけだと作り甲斐ない料理
子の笑顔活力源にして生きる

箕面市　出口セツ子

さりげなく沈む夕日に手を合わせ
思い違い聞き違いでは済まされず
文句いうくせはなかなか治らない
もう一度たしかめながらメガネ拭く
植民地歴史をネタにゆする国

守口市　井上桂作

工事中標識目立つ年度末
怖いのはテロに報復する正義
世間体なんて言うから無理をする
挨拶の名刺代わりが高くつき
バスツアーぽつりぽつりと居る男

守口市　石森利昭

いい匂い独りの糧が炊きあがる
適任といわれていやな役当り
土いじり出来る幸せ憂さも晴れ
ニート族ふらふらと歩く癖
まだそこに主いそうな杖がある

八尾市　生嶋ますみ

子規の句を実感してる春彼岸
命日に合わせてすみれ咲いてくれ
節約という字知ってるのだけれど
つじつまの合わないことに慣れてくる
これからも面影抱いて生きていく

八尾市　村上ミツ子

疑いは期待に添わぬやせ薬
灯を消すと愁いの顔になる女雛
髪形を変えても妻は同じ顔
菜の花の春をゆっくり蝶が吸い
あの笑顔しこり流してないらしい

八尾市　宮﨑シマ子

栞忌やみどりの風と微笑みと
花粉症癒ればあげたいノーベル賞
喘息が小康　花の種買いに
妻の忌や白い芍薬欲しかろう
陽があれば電波時計のいのち永久

八尾市　内海幸生

待春やぽっくり寺へ長寿バス
朝市に農婦荷を解く春の霜
藁を着て厨子の姿や寒牡丹
藁苞に冬陽集めて牡丹の焔
餅並ぶ亡父のつくりし餅箱に

八尾市　長谷川　春蘭

耳鳴りの奥で祭りの笛踊る
反骨の父で金では動かない
リズムいい歩幅崩さず八十路ゆく
あれもこれもやりたい呆けてなど居れぬ
雪解けて雨樋歌ういいリズム

八尾市　吉村一風

はりつめた我慢もいつか燃える日々
北国のドラマ優しいひとばかり
腐葉土がうまくなじんでねぎ育つ
刻々と進む時計に叩かれる
般若心経ひとりてくてく古寺めぐり

八尾市　宮西弥生

火を抱いて登りつめたい道がある
捨てられた矛盾だらけのゴミの山
喝采の主役にあった裏の顔
踏み込めぬ境界線を妻が引く
命あるかぎりはかない夢を追う

八尾市　井尻民

くぎ煮が届く来年も予約する
振替休日大正を馬鹿にする
細木数子に共感テレビ追っかける
要介護該当しない春帽子
けじめです老女たりとも朝化粧

八尾市　高杉千歩

ひじ鉄で荷崩れおこす僕の貨車
カレンダーの丸に約束教えられ
仲直りしようお腹が減ってきた
変り身の早さ信用されてない
万年床あげて気持を切り替える

大阪府　澤田和重

母さんに抱かれたような沈丁花
おたやんでラッキー今も飽きられず
金銭感覚鈍る女の化粧品
七掛けの若さ鏡に言い聞かす
シンプルに生きて迷わぬことにする

大阪府　米澤俶子

子離れができて毎日自分の日
足腰の痛さに肥満追って来る
借りたこと覚えてあがらないうだつ
大相撲裾野支える日本勢
外人を退けなくば綱見えぬ

大阪府　野田栄呼

草萌える私も燃える夢探し
農耕の民を治めた法話聴く
血を分けた身贔屓論に苦笑する
古希過ぎて言葉あそびの辞書を繰る
落日のニュース永遠無いと知る

大阪府　前田ゆい

牛丼に一日だけの主婦放棄
卒業の詰衿を割る喉仏
風が風生んで猛らす野火の彩
天守から桜見ている果報者
葉の裏に魂つなぐ蝶の昼

大阪府　桑田ゆきの

春一番すこしやさしくなれそうだ
樹齢百歳衰え知らぬ咲きっぷり
生誕に希望の国を選べない
保険料払って介護お断り
振出しに戻ると先が見えてくる

大阪府　籾山隆盛

お喋りを遺影笑顔できいている
勿体ないと食べてそーっと体重計
赤い服が白髪に似合うというお世辞
段々と呆ける自信がついて来た
花粉情報お布団干せぬ日が続く

神戸市　山口美穂

立読みで妻の病気をメモしてる
リハビリの妻が歩幅を確かめる
改革のレール身内が曲げている
カラ残業黒い鼠が税齧る
ペイオフに縁があるほど財はない

神戸市　伊勢田毅

即かず離れず自分の色で咲いている
高音に低音添えて夫婦仲
鈍臭い生き様だけど嘘がない
貧乏の味が築いた強い芯
熱帯魚色鮮やかに自己主張

神戸市　山口光久

梅干しとおかゆがうまい風邪の舌
ステーキをやこうかしらと病みぬける
我が町の花の暦を繰る散歩
好物も苦手も同じ母と娘と
毎日を忙しくする探し物

神戸市　木村貴代子

昨日今日変りなきこと良しとする
写真みて今の自分を教えられ
いつ終り来ても悔いない仕度する
待たされる身になり約束守ってる
なんとかなるなんとかなると先送り

神戸市　池田善守

相生市　中塚礎石

活断層忘れたようにビルが建ち
割り勘へ踏ん張っている飲めぬ猪口
ネクタイの無い毎日が素晴らしい
飲むなとは言いにくそうな診断書
放せない八十路の眠りそば枕

芦屋市　黒田能子

こっそりとしていた努力あればこそ
つまずいた小石黙っていてくれる
ここだけの話を月が聞いている
大ごとにならずに済んだ水たまり
たまたまのミスだろう見て見ない振り

伊丹市　山崎君子

打ち上げ成功ブーゲンビリア燃ゆる島
すれ違い梅のカンザシ春告げる
アルバムに中折れ帽子若い亡父
シクラメン友の横顔そのままに
老いて子に訓えしらさる今日のこと

尼崎市　田辺鹿太

どこまでも男でいたいコップ酒
降って湧くように佳い事悪い事
心意気だけで身体がついて来ん
凡人はごくありふれた夢をみる
ファッションもいいけど脳も磨いてね

尼崎市　春城年代

不揃いの皿に愛着絶ち難く
深なさけ重い荷物を持て余す
雛飾り旧暦にするお詫びして
壺いっぱいに水仙入れて背を伸ばす
なんだかんだと待つことがあるしあわせよ

尼崎市　春城武庫坊

市町村合併由緒ある地名消えてゆき
薬の代り歩く歩幅を広くする
うっかりが重なり自分呆れはて
余生とやまだまだ続く坂登る
一人前の悪事にはやる高校生

尼崎市　林昭三

ありふれた祝辞となった四人目で
万物の霊長達が殺し合う
母さんもまさかの時に少し貯め
下校路の孫と子猫の巡り合い
手荒さも派手さもないが淡い恋

尼崎市　軸丸勝巳

雛壇に並び見上げた孫嫁ぐ
啓蟄に地虫も震えまた戻る
OB会寒波が一人また攫う
置物のよう青鷺は沢に立つ
足の冷え医者も及ばぬ万歩計

うちの娘も芽生え始めて花支度
まだ花を咲かす気もある万歩計
平凡だがその平凡が有り難い
似たもの夫婦で偏差値あまり高くない
赤提灯点ると癒しの路地になる

尼崎市　松下比ろ志

空洞を埋めるBGMを響かせる
射抜く瞳の女と揺れるバスの中
また一つ秘密ふえたよお月さま
右左こころが迷う戻り寒
ちどり足見送る不安つのる駅

尼崎市　長浜美籠

ええことがあった涙はピンク色
ならずもの国家が核をちらつかす
数字には拒絶反応するあたま
五人目の孫の知らせを仏壇へ
髭面がショートケーキを食べている

川西市　西内朋月

冬枯れの庭にも春が芽吹き出す
想い出を手繰りつつ編む毛糸玉
八十路来て膝が突然怒り出す
孫巣立ち何か空しい春をゆく
ITで世論を沸かす時の人

川西市　米原雪子

携帯がかからぬ自慢する秘湯
お遍路も花と紅葉の頃ピーク
あの人が転んだとこに居たわたし
物言わぬ仏大きい耳をされ
腹で聞く鬼太鼓補聴器などいらぬ

三田市　北野哲男

大木が枯れる虚像も崩れ出す
回転椅子まわり具合の運不運
生欠伸殺して今日も妻でいる
向き合って夫婦の会話続かない
出合いから温め続けている縁

三田市　久保田千代

対等ではなしが出来る五年生
草を引く何かはじまる声がする
活字との出会いがあって引く傍線
もうすこし話したそうな月に会う
にごり酒春まだ浅い雛の家

西宮市　牧渕富喜子

車窓より富士晴ればれと良い予感
武芸者のかまえイチローヒット打つ
苺ほどには大きくなれぬサクランボ
冷えた手を包んでくれた大きな掌
ホットミルクやさしい夢で眠りたし

西宮市　亀岡哲子

青空を食べているようなにぎり飯
御前様に拗ねていた頃なつかしい
あほやなあいうて傷口拭いてくれ
へそくりで家計の赤字補わぬ
啓蟄や出るに出られぬ杉花粉

西宮市　緒方美津子

たずちゃんの声もう聞けぬ花柩（しげおさんに）
この人も淋しいひとだ長電話
親切にされて一入老いを知る
残り日よ今日の布団に陽が匂う
誰が弾くピアノか遠いノスタルジア

西宮市　坪井孝一

根性があるなし決まる勝ちと負け
正直者どれが損かは知らぬまま
良き友に育てられたり蹴られたり
酔う量が同じ友とは許し合い
とろろ芋擂ってとにかく酒終る

西宮市　山本義子

お医者さんとつかず離れずの距離で
ナースさんと街で会えばママの顔
本籍地　島にあるけど泳げない
天然自然ご先祖思い出す苺
腹式呼吸竹踏みこれは出来そうだ

寄せ植えの梅の古木に亡父の影
傘寿なお亡きちちははにすがる夢
未だ出来る白くはためくお洗濯
中くらいが安心私によく似合う
平凡なジョークも笑って差上げる

西宮市　秋元てる

枯草の中にすみれの花を見る
杉花粉シュクシュク泣いて春が来る
身の回りきれいに年はゆるゆると
人生は回り舞台だ焦るまい
雨に散る花のあわれをふと思う

西宮市　菊池トミヱ

卒業を寿ぐ校舎梅開く
寒天の出来が自慢の冬将軍
豪雪がラッセル車まで持上げる
焼いもの香りが寒さふっ飛ばす
ビーフカレー褒めて今夜はカツカレー

姫路市　古川奮水

ポッケから若い気を吐くホリエモン
利息ゼロ銀行ついに貸金庫
百マスの計算してる老いふたり
教育のレベル低下へうろたえる
寝たきりの母の窓辺へ金魚鉢

奈良県　渡辺富子

卒園式恋の芽生えを抱いたまま
切ないね　ただ握手しただけの仲
赴任地で何度も読んだ仮名の文
ライバルの隅には置けぬ噂聞く
頑固親父がモデルになった紙おむつ

奈良市　米田恭昌

自己主張強くて雲にまじわれず
武士の美学泉岳寺に香絶えず
浮き草に私の年金おいてあり
ナナカマド駆け込み寺に赤すぎる
突然に水掛不動に会いとなり

奈良市　天正千梢

母の歳越えた命のまる儲け
年金がちょぼちょぼだから仲がいい
これしきのことで泣かない冬薔薇
花達が手招きをする途中下車
町内の役に走ってまだ元気

香芝市　大内朝子

じっくりと本を読ませぬ花暦
ショートステイ自由時間をありがとう
真っ直ぐな青い意見にある未来
深入りはすまい斜めに向かい合う
字足らずの言い訳吐いているファクス

橿原市　安土理恵

良い家だ礼儀正しい犬がいる
犬の服縫って貰っている時給
夫婦ではないな男がよく笑う
ケータイを買ったのあなたに会ってから
幸せになるために要る金の高

橿原市　居谷真理子

いいことがあったね活が出るえくぼ
定年を過ぎて夫婦の真価でる
几帳面あなたが映る筆運び
高い鼻昔の贅をひけらかす
初めてのようににっこり話聴く

生駒市　飛永ふりこ

菜種梅雨窓辺の金魚ウワサ好き
素晴らしい初夏の誘いの初鰹
スローライフ夫唱婦随の昼ごはん
葉桜のポリシー眩しい吉野山
晩酌は欠かさぬ僕のエネルギー

大和郡山市　坊農柳弘

あたたかいエール北から南から（句集発刊）
こんないい陽射しに窓は閉じたまま
珈琲の好きなほとけとペアカップ
薔薇もすみれも好きな男が揺れている
仏壇の父母に詫びねばならぬこと

和歌山市　木本朱夏

和歌山市　牛尾緑良

夢希望乱反射する春の風
卒寿まだ余力を残す師の背骨
敗者にも春の日差しはあたたかい
病床で哲学などに憧れる
ブランコを揺する思い出を揺する

和歌山市　玉置当代

生かされている一番の有り難さ
切なくも我が身に辛い涙そうそう
前向きに日々乗り越えて行く予定
雪雲に暗いニュースの続く日々
春うらら　のたり私の脳細胞

和歌山市　古久保和子

軟弱なおとこが育つマヨネーズ
赤鉛筆持つとチェックがしたくなる
チョコレート一つ夫は有頂天
お返しは妻が選んでくれました
散髪の首筋寒い春の雪

和歌山市　桜井千秀

知ったかぶりでいつも孤独な影法師
屁理屈が刺さった辺りから疼く
無関心でいよう私の噂など
別れ際のうすら笑いが謎掛ける
本当だから作り話にしておこう

和歌山市　田中みね

自己陶酔　水もしたたるいい女
男清原今年やらんでどないする
御自慢のありったけ聞く御招待
お裾分けできぬ肩凝り持て余す
亡母への孝きょうだい仲がいとよろし

和歌山市　福本英子

天気晴朗宝くじでも買うてみる
年寄りは厭と献血断わられ
お茶碗を軽くしたのにまだだるい
三センチ半も縮んだ骨粗しょう
歳とらぬサザエさんとは同い年

和歌山市　武本碧

二回目の見合で出来た鍋の蓋
国民は二の次ですか総理殿
これからは愛と妥協の二重奏
二拍子で弾む球児の大舞台
二枚目の看板降ろすスキャンダル

和歌山市　松尾和香

雪月花僕の人生自然体
慕われて家族の役に立つゆとり
環境を守る人間いる遺産
法要に沙汰詫び帰る里の家
各停で真っ正面に生きている

春だから噂話も満開に
風呂敷の穴からおもしろい話
群れて咲く笑い転げるように咲く
行列に並ぶとファイト湧いてくる
花が咲くように天ぷら揚げましょう

和歌山市　楠見章子

ふるさとで浦島太郎だよ私
レシートをきっちりチェックする財布
奥さんを亡くしてこびりつく茶渋
身におぼえあるから辛い一場面
ハンディに非情の多い街あかり

和歌山市　堀畑靖子

うれしいね明るい話次々と
空港出来世界も近く便利なり
若者の学校巣立つ晴れ姿
故郷も時勢の波に消えていく
可笑しすぎ最近世相解らない

和歌山市　宮本三喜夫

人を恋うなんて素敵な刻だろう
全身で訴えてくる一歳児
私の恋も朧ろに春銀河
思いきり汗を流せば無になれる
記憶力過ぎると子等に疎まれる

海南市　堂上泰女

歳のせいなのか諦め腹立たぬ
年寄りが増え過ぎている少子国
億の金積める汚職の保釈金
バーゲンを漁る女の怖い顔
手の内を読んで逆の手打って行く

海南市　谷口義男

どちらにも転ぶ男のまるい鼻
雑談の中へ織りこむ頼みごと
うっかりと口滑らせた尻ぬぐい
足留めを食う宅配の着く報せ
交友のはかなさを知る退職後

和歌山県　中後清史

父と母仲がいいかを子は見てる
死んでから親の言ってた意味分かる
認め合い感謝忘れず夫婦です
家族でもおくさず言おうありがとう
多忙でも家へ必ずメールする

鳥取市　春木圭一郎

みたされぬ心に春の雪積る
遠い目をした人間の群れにいる
冬の桜に焼酎を飲み交わす
お隣の家のばあちゃん阿部マリア
雨上がりひとりぼっちになっていた

鳥取市　上田俊路

鳥取市　林　露杖

ふんわりと地蔵の膝に春の雪
風邪一つひかず越冬春の風
朝飯がうまい春雪音もなく
気持ではあれもこれもと炬燵抱き
のこされたいのちおまけにしたくない

鳥取市　下田茂登子

浅学な私も夢は海ほどに
ボロボロになった夫婦だ繕えぬ
喜寿だ喜寿だ叫んでみても一人です
どん底で迷信ばかり信じてる
今年こそうれしい顔に変えてみる

鳥取市　西村黙光

片付けが親の躾をさらけ出す
片付けヘビックリ箱のゴミの山
片付けへゴミが驚く大掃除
数え唄リズムへはずむお片付け
片付けて久しぶりだよ広い居間

鳥取市　倉益一瑶

福は内どかりと妻が座っとる
福耳に穴をあけてはいけません
恋をする風船玉になっている
今日よりも確実に脳軽くなる
パトロンにされていないかニッポンよ

鳥取市　近藤春恵

幸せを入れる袋が破れ出す
妻リードついて行くから続く仲
つまずいて転んでドラマ始まった
あれこれと眼鏡をかえて世相見る
あの時の父の涙が今わかる

鳥取市　近藤佳子

小康を倖せとする余生です
生かされるよろこび花の季が巡る
ぼけかけた友とのんびり長電話
仏壇の母が護ってくれている
芽吹くころ農夫の父の忌が巡る

鳥取市　植田一京

愛してるなどと言われた遠い日よ
くしゃみ三回今日は早寝にしておこう
きっかけは席を譲ってあげただけ
この世とはレッスンどおりゆかぬとこ
たっぷりと愚痴聞いていた偉い人

鳥取市　加藤茶人

人のため死ねますか火の粉は払う
それ二階逃げろブツブツ台所
知識では解けぬ難問それ女
引き算が得意主張も主義も捨て
ノーと言う勇気ないまま宮仕え

鳥取市　土橋睦子

一桁はノスタルジアの傷ばかり
春風に丸い蕾がほころびる
言い訳は実力者には似合わない
傑作をカバンに詰めて妻が出る
幸せを比べて見ればきりがない

鳥取市　田中憧子

神さまが祈願に序列決めている
東京も雪絵手紙がにじんでる
しりとりで脳の音聞く父と母
うっかりのせいにしているチャッカリや
書き忘れ追って二枚目出すハガキ

鳥取市　夏目一粋

春めきて胃薬のんで酒のんで
Oという血液型で尽くしてる
着膨れて雪の降る街唄ってる
皺を隠す母の手愛おしい
縄のれんくぐる勇気も失せる歳

鳥取市　田村邦昭

それぞれの皿に詰まった亡母思う
おふくろの脇役だけの皿でいる
逃げ道をみつけてやっと安堵する
雑草と言われる群もまた楽し
いい酒が突如鬼に変化する

鳥取市　垰寛子

バストMウエストスリーLの老春
小枝にも蕾むらがり梅見ごろ
年金庁に変えて年金ねらい打つ
春吹雪くネット心中こんな日か
オレオレを返り討ちした武勇伝

鳥取市　録沢風花

いま老母の歩いた道にさしかかる
きらきらのこの世に未練まだ少し
無意識に明るい方へ足が向く
疲れたらひとり宇宙でベール脱ぐ
朗報がひと足早い春にする

鳥取市　冨山檳榔樹

やんわりとブレーキ掛ける母小言
合併に田舎の良さが浮き上がる
裸婦像にわくわくしてる独り者
知ってても知らぬで通る田舎人
オールドボーイ　ネクタイの色気に掛ける

鳥取市　福西茶子

家計簿の赤信号が変らない
人さまの役に立ちたい釘が出る
連凧の中ほどに居て風を避け
チチンプイ母の魔法が効いてくる
干支五つ回りピンクの服を着る

鳥取市　宮脇道子

無駄遣いせめて此の世の我が儘と
人生の最終駅に一人立つ
老いの捩子捲き過ぎたのか惚け進む
愚痴言って帰る友の背軽く見え
悟りました笑って暮らすことにした

鳥取市　武田帆雀

ストレッチ体操してる梅の窓
使途不明あって責めない妻の愛
海岸に古い噂が浮いている
みかんむく棋士勝算を読んでいる
日課表すき間に女と逢う日なり

鳥取市　山本益子

春風の花粉コンビに立ち向かう
息吹きの黄砂に出合う花便り
暮し向きほのぼの風に任せてる
甘え声の味知った子に操られ
人生はのんびり風と握手する

鳥取市　杉本孝男

悪口も露骨な方がよく響く
戦争はいやだと高く手をあげる
悪い癖やっぱり出たよ言い逃れ
悪役を黙って受けたご長男
円い輪に主役は要らぬ仲間うち

鳥取市　岸本孝子

着ぶくれて春の陽差しに笑われる
ふきのとうひとつ見つけて春を食べ
難問が解けてコーヒー倍の味
朝巻いたネジをゆるめて床につく
学力が落ちたと焦る五日制

鳥取市　岸本宏章

後押しの機関車がいる僕がいる
水涸れの脳がコーヒー所望する
きっちりと飲んだ薬がまた余り
健康に良くないものが欲しくなる
金がない言ってる人の無駄遣い

鳥取市　西川和子

先輩の背からもらっている元気
ほどほどにしよう孫へのお節介
へそくりが貯まりうふふの記念日に
ライバルの背中にやっとついて行く
ほどほどに使い分けする知恵袋

鳥取市　美田旋風

偽温泉でも思い出の旅の宿
青い鳥探してみよう酉年だ
やっとこさ入れ歯ができて生きのびる
賞味期限切れたか地金出る夫婦
少子高齢盛り上がらない町内会

黒星も性善説を信じ切る
砂の塔夕陽に長い影をひく
北帰行　鳥にもつらい旅が待つ
戦争が羽より軽い生命にする
新鮮な出合い夢みる赤い毬

鳥取市　奥谷彩子

大自然すごいと思う朝の露
学校も火の輪の中であえいでる
初恋をずっと引きずる身も哀れ
卒業へ夢を育てた自負がある
ロケットも神社を変えて拝んでる

鳥取市　中村金祥

合格の孫が年金風邪ひかす
脱皮するたびに値が張るまつば蟹
スニーカー春だはるだとかしましい
何事も激しく動く水面下
一目ぼれ恋に時間はかからない

鳥取市　永原昌鼓

父母の写真おまもり戦った
傘させば忘れるものが多くなり
ショーケース軽い財布は覗くだけ
口喧嘩さめて寂しい秋の風
琴の音覗いてみたい塀の内

鳥取市　鈴木一弘

帰ったら手を洗おうと孫が言う
爺さまがゆっくりスルメ噛みしめる
壜の口うふふとみんな上向いて
酒のんだ時だけ冴える駄目おとこ
騒々しく飲んでこの世をごまかそう

鳥取市　土橋はるお

人間は進化したのか憎み合う
私とは思えぬ爺さまが写る
よろよろとする背を妻に見られていた
お隣は元気鉋の音がする
船と陸にはさまれている造船所

倉吉市　牧野芳光

お疲れを見せてはならぬ独裁者
独裁者言えぬ悩みもあるだろう
一日の捻子お湯割りにほぐされる
鳶が舞うにんげんさまを見下ろして
図書館でひかる源氏のまんが本

倉吉市　松本よしえ

損得を秤にかけて日々を生き
親の老いに噛んで砕いてヒマかかり
春一番に冬眠ハート目覚め出す
チョットだけ幸せ気分ピン札よ
画面では不和など見えぬ皇室だ

倉吉市　猪川由美子

突然の睡魔が襲う事故現場
潮満ちてやがて少女も脱皮する
長生きはしたくないけど薬飲む
黙々と妻のあとから市場籠
腹の子もセットで娘いらんかな

倉吉市　米田幸子

敬いを繋げた先は愛となる
敬っている神様に罰貰う
当たったらうふふ狸の皮算用
清水の舞台飛ぶ気で赤を着る
老醜を隠すピンクに嗤われる

倉吉市　最上和枝

現代っ子のメカの強さに舌を巻く
出不精も誘い出される五月晴れ
気の向くまんま生きて独身貴族とか
おふくろさん何度呼んでも呼び足りぬ
おふくろの七癖みんな頂いた

倉吉市　野口節子

春よ来い涙こらえる花粉症
中心は先祖大事の合掌で
病む夫を一人ぼっちにゃさせられぬ
若づくりしても嫁にはかなわない
わくわくとひやひやで脳まさつする

倉吉市　山中康子

泣き上戸笑い上戸にするお酒
超キモイ短縮しちゃう日本語
詰め込まれ身悶えている冷蔵庫
文机を窓辺によせて日向ぼこ
吹き溜り四方山話果てしない

倉吉市　山本玲子

深爪がやっと治って春謳う
さわやかな挨拶を受けふっ切れる
これからに開き直ってゴールまで
仁王様にらみが過ぎて笑えない
話上手いつかペースに巻きこまれ

米子市　木村春枝

土笑い土筆すっかり春の顔
にらみのきいた主がおって平和です
さわやかな色ウインドーも衣がえ
雪に耐え椿蕾の力瘤
瀧の水無限の音符かなでてる

米子市　門脇晶子

臨終にみんな許して美しい
お通夜に顔覗きこむ亡弟の
説法のあとは素直がよぎりだす
美しい風車の電気売って過疎
梅が咲き桃ほころんで家まばら

米子市　白根ふみ

米子市　青戸田鶴

この道で逢えそう友を待っている
道端でいち番早いいぬふぐり
道草をしてストレスを消している
大きな手をかりたくなった日暮道
力つきるまではこの道歩かねば

米子市　中井ゆき

わがままな人間地球おこるはず
春よこい恋人よりも待っている
湯豆腐もおどり出したらお終いだ
福もこい鬼もおいでよ淋しいよ
湯のぬくさああ幸せと足のばす

米子市　政岡日枝子

さわやかにめくり桜の章を出す
人のよさ伝わってくる握手する
みな同じ父の子なのににらみ合う
善人ぶっているけど芯でにらみ合う
ポツリポツリと手術の跡が語りだす

米子市　光井玲子

さからわず素直すなおでくらしている
子や孫に会えるのは年一回だ
チョコ一杯老父の口元ほころびる
しっかりと今でも思う亡母の背
世界の合い言葉になるもったいない

米子市　野坂なみ

さわやかな巫女の金鈴（すず）から福もらう
車座になってすっかり打ち解ける
堤王国まさかの土手がついに切れ
よもや偽札神はすっかり人嫌い
余力まだどこまでこの手伸ばそうか

米子市　永井三津子

合格の二文字に春の幕が開く
損得を秤にかけていがみ合う
子がためと残した金に子が揉める
感動が眠る勇気を揺り起こす
残り火はしっかり使いきって逝く

鳥取県　竹信照彦

暇な日に釣りに行くとも言えぬ空
書きかけの手紙思案が没にする
嫁の友来てご隠居は消えるだけ
玄関を出てから煙草吸う特技
同級の友が二人も逝って春

鳥取県　山宮愛恵

今さらを吉日として習い事
七十で始め卒寿でものにする
泣きそうな時にもできる笑い皺
盗人よ魂入っておりまする
盗まれた花が瞼を去来する

雪解けの小川きらきら春の詩
最敬礼上手になって幹部の座
六十代晩成開花捨てぬ夢
ファッションは家計助ける黒を選る
笑顔美人腹の黒さは分からない

鳥取県　吉田弘子

うまいこと年金使って棚田守る
目印は鯉のぼりよと電話切れ
ブレーキが利き過ぎ友が寄り付かぬ
指切りの思い忘れぬこの小指
どんな場も軍歌オンリー八十歳

鳥取県　深田倶久

大切な顔ですずっとつかいます
産声をあげて我が家にエース来た
遺言状喧嘩するなと書いておく
キッチンは私の天下弾んでる
ドッコイショ自分にエールおくってる

鳥取県　山下節子

ヒナたちも三羽になると騒がしい
机にも膳にも化けたミカン箱
遅刻して廊下磨きの人夫なり
天国と地獄を演ず金多芸
腹ペコで鬼の顔する空財布

鳥取県　谷口次男

目溢しの亀が遅れを取り戻す
居直りの土へやる気が湧いてくる
寂聴の笑いたなびく説法論
足が地について地団太一安心
愚図る壺なだめ浮世を生きている

鳥取県　平尾菜美

曽孫産む電話万里の彼方から
コーヒー店素通りできぬ夫に添い
新しくカーテン替えて風入れる
たゆみなく月日も人も去って行く
急用の駅へラッシュの波を漕ぐ

鳥取県　鳥羽玲子

コーヒーで夜長を生かし語り合う
歳の功やりくりしては生きてゆく
不思議だな一本道に迷ってる
感動の涙はいつも美しい
寺の門くぐればこころ広くなる

鳥取県　鳥羽直市

人間のエゴに地球が激怒する
百点の春陽に踊るランドセル
明日の来る保証はないが夢はある
へそくりが居心地わるく移転する
厚化粧に溜息ついている鏡

鳥取県　盛田夢路

春霞あすの誘いに賭けてみる
呑んで寝て老いても恋をする元気
夜なきする犬が近所にいて困る
生きている証ことしも花植える
伯耆路もそよ風ふいて桜咲く

鳥取県　山本正光

可も不可もない平凡な冬だった
根っ子でも枝でも喧嘩している木
他人事のように肝障害進む
貴賓室の中は知らない知りたくない
腰の線あたりに歳があらわれる

鳥取県　新家完司

雪だるま春にバトンを渡し切る
日銀も偽のお札にびっくりだ
惚けぬ間に激しい恋がして見たい
ときめきが激しいはずだ春が来る
偽札に諭吉の両目腫れ上がる

鳥取県　蔵本悦子

杏子の実熟れてきました仏さま
万象の芽吹きみごとな花の笑み
方言丸出し鬼の心を解きほぐす
寺の雨もりすぐに檀家へたれてくる
最後のベル涙のおちる音がする（元同僚の死）

鳥取県　佐伯やえ

鷲峰に雪の着物がよく似合う
少しずつ着物姿が似合う孫
柳の芽そっと外界をのぞいてる
散る桜うす桃色でつぼみ濃く
散る桜一ひら毎にある風情

鳥取県　国森武子

水切りの冬菜きらきら眩しくて
神仏に縋り迷信にも頼り
ユニークな人柄が浮く賜り物
五欲とのいくさに負けてばかりいる
歳月が似合う夫婦にしてくれた

鳥取県　石谷美恵子

口笛を吹いて男の洗濯日
罪ひとつ消しに鎮守の杜へゆく
行間に辛いつらいと娘の手紙
身勝手な耳遠くなり近くなり
マネキンのドレスを脱がす母娘連れ

松江市　三島淞丘

旅かばん春のプランで動き出す
珍らしいハーブを育て共に春
抱きしめて育った子供は優しくて
病葉がぱらりつくしが顔出した
クリスマスローズ見つけた雪の下

松江市　佐野木みえ

雛さまを飾りゆかしさとり戻す
作り手に似て人形のつぶらな目

松江市　松本知恵子

百年を待ってた酒の孤独きく
いろいろとありライバルの肩をもつ
春の風吹いて名案浮かびだす

松江市　安食友子

タッチする相手もいない風来坊
仮初のラブではなくて良かったね
スムーズに行き過ぎるから転けるのよ
道行きを遅らせている雪女郎
ギャンブルは楽しからずやすってんてん

松江市　小川注湖

勢いを種は大地で温める
話しかけると逃げる構えの小学生
児の操る殺しゲームのある怖さ
ここ一番アクセル踏んで物申す
入社式自慢するもの一つ持て

松江市　川本畔

すっくと立って若いと思うことにする
目を閉じて此処は一気に駈け抜ける
人間に生まれかすかな哀を持つ
煩悩の裏から鬼の息づかい
ちっぽけな不幸を掬い泣いている

松江市　銭山昌枝

一日が二十四時間では足らぬ
節約も散財もする年金日
薬もくれず注射もしない医者へ行く
がたがたの体に活を入れる酒
お節介素直に礼を言っておく

出雲市　吉岡きみえ

一日がたのしかったらそれでいい
応援歌わたしのために唄ってる
あの山で春は足ぶみばかりする
梢には春を唄いに鳥がくる
いい鬼になって涙が脆くなる

出雲市　富田蘭水

老けぬよう孫としきりに園ばなし
無計画だんだん飯がうまくなる
桃うえてあれこれ思いふくらませ
春の音木の芽と私たしかめる
北へ去る鳥に心の餞別を

出雲市　小豆澤歌子

辛い夢蓋しておこう忘れよう
淋しくて枕をぱっと裏返す
浪人の孫に待ってたさくら咲く
春うらら気ままな犬の万歩計
塩ふって今日のドラマに幕降ろす

出雲市　青山久子

あなたへの鶴を今でも折っている
目を洗う月が歪に見えたから
欠けガラスひとつひとつに虹の色
パンの耳言いたいことがたんとある
縄のれん淋しがり屋の鬼ばかり

出雲市　石倉芙佐子

涙腺が少うし弛んできたらしい
時々は弱音吐いてる鬼瓦
あいうえお声のレッスンしています
年波に勝てずに漫画本を読む
刃こぼれのまんまでしてる通せんぼ

出雲市　城多喜

ひとときの安らぎくれる黄水仙
ふり返る道蹟いた跡がある
あなただけ見ていた首が回らない
一匹の弱虫胸に飼っている
あやふやなものが頭に絡みだす

出雲市　伊藤玲子

ひとりでは勿体ないね湖の夕陽
これからに夢を無くした菓子禁止
髪染めて　も少し翔んでみるつもり
些細なこと忘れなさいと辛夷咲く
時どきは私を刻み検査する

出雲市　小玉満江

ホリエモン私は若さへ応援す
雪おんな別れをつげる蕗のとう
ころんだら駄目よと老母を送り出す
背も丸く心も丸くチューリップ
気まぐれで行ったり来たり花筏

出雲市　岡あきら

戦時中の話生徒の眼が光る
憶測の二人揃ってやって来る
見付かった手頃な品はチャイナ製
春の香が山下りて来た蕗のとう
晴れた日の畑に戻った笑い声

出雲市　岸桂子

噛み終えたガムと改札口を出る
キッパリと駄目美しい楷書だな
一字だけ訂正すれば晴れてくる
風向きで老いと言う字を使いわけ
この川を汚した奴を見た蛙

出雲市　園山多賀子

老いらくの炎えない恋がいじらしい
自惚れて明日に賭ける夢を見る
蹟いてまた辞書を繰る春炬燵
ポケットに溢れる恩が返せない
返し縫い老母は何時でも念を押す

出雲市　佐藤治代

ケーキ屋の憎い企てホワイトデー
戦争で亡くした兄を想う春
風邪ひいて喜んだのは体重計
それなりの女に変る美容院
燃えるよな恋がしたいとまだ思う

出雲市　小白金房子

菜園を手がける農婦の土づくり
大社駅面影偲ぶ赤ポスト
大鳥居潜って神の声を聞く
牛飼って心やすめるこたつ酒
一年の味がしみこむ老母の鍋

出雲市　多久和敬子

こだわりを捨てたいちごが赤く熟れ
裏口に漬物石が眠っている
主婦の椅子気まぐれラッパ吹いている
春を待つ心は沈む花粉症
子の匂い染み込んでいる辞書を引く

出雲市　久谷まこと

真っ直ぐに歩くと棒によく当たる
浮かれてる足下三三七拍子
忘れたと言えば年寄り見のがされ
補聴器を外しいさかい聞きのがす
おだやかな物腰だから敵が無い

雲南市　毛利幸

人生のひずみなかなか直せない
にこにこと湯気の向こうで手で招く
ふくよかな豆が私を元気づけ
春が来て別れの涙こみ上げる
どうしてかきれいな声に耳が向く

島根県　持田多輝子

我が胸で魔性仏性向かいあう
プラモデル子供の夢を組立てる
夫婦でも味覚の違う味グルメ
ささやかな幸せ明日へつなぐ春
ミスもなくリストラもなく農に生き

島根県　伊藤寿美

夕凪や話し相手が欲しくなる
目くじらを立てず輪から出ずに居る
あの日にはもう戻れない春の雷
菜の花の海に出会った途中下車
分け合って嬉しさ倍にする家族

島根県　多々納テル子

命日に故人の好きな酒供え
丁寧に掃除したのに誰も来ず
ご近所へ黙っているがみやげ買う
窓枠の中で絵になる雪景色
焦らずに春まで待とう縺れ糸

島根県　森　茂美

増税の紙面にぎやか昨日今日
雪を踏み娘は出勤の午前五時
雪空へなにを求める山鴉
モンゴルの旗が立つかも国技館
花便り聴く当方は雪が降る

岡山市　井上柳五郎

改正に年金は減り税はふえ
税制の改正老いが槍玉に
新しい年を占う福袋
再会を信じさよなら軽く言い
枯芝生へ雑草緑目立ち生え

倉敷市　小野克枝

山ひとつ越えて煩悩目を覚ます
少年の涙信じた鬼刑事
本心が作り笑いの底にある
それからの話は聞かぬ思いやり
忙中の閑を探して春を呼ぶ

倉敷市　井上富子

仕事柄スーツに縁のない蛙
フリーノートにちょっと気になる句読点
深夜電力夜盗虫になる私
型崩れしてもスーツの意地がある
愛児護るように病夫を看る私

美作市　小林妻子

市になって税金だけは高くなる
鶯が棚田で呼んでいる声だ
冬籠りの炬燵片付けられている
包丁を研いでる父は杵柄だ
花粉症大の男を泣かせてる

岡山県　山本玉恵

添いとげて指輪少うしゆるくなる
かくしたい過去をのぞいて二日月
あきらめの中で賽子振り直す
夢は巡るその日その日の風立ちぬ
助走路のまっ只中の青春譜

岡山県　国米きくゑ

これしきと思えど口惜し手のしびれ
囲む鍋湯気にかすんだ庭の梅
浮かぶ瀬もあろうと細い命抱く
魔法の杖森に探しに行ったきり
伴走者いない私は風と行く

岡山県　福原悦子

身を晒す山坂越えて七十路
顔が言う隠す嬉しさこぼれおち
遍路宿気さくな女将温かい
遠花火面影偲ぶ亡父が居る
善を積む仏の貌も近くなり

岡山県　大石　あすなろ

携帯を持たぬわたしは希少価値
家事渋滞ゲートボールのせいにする
いい着想電話が鳴ってフイになる
二つ目の山へ密かに策を練る
万歩計きのうと同じ道を行く

岡山県　福嶋　智恵子

南北の訛り一つになる市制
合併になっても過疎に変わりない
黄砂つれ春一番がやって来た
手造りの人形飾り雛祭り
故郷の濁り酒酌みひな祝う

竹原市　小島　蘭幸

まだ僕のどこかに芽吹くものがあり
免許更新私はもう若くない
万華鏡の中にも春の雪が降る
青鬼赤鬼亡父と一回だけ飲んだ
恋ひとつホワイトデーが雪になる

竹原市　宮本　笑子

友達のその友達の死であるが
ガードした身体にサツマ芋出され
息長くはき出し現実取りもどす
焦点も合わぬが五十年夫婦
ダイエット宣言猫といっしょにがんばろう

竹原市　時広　一路

表札も我が家に似合う色となる
掛けた額越える年金頂いて
平均寿命越しているのはおまけかな
電話しか掛けぬ携帯持っている
善は善呼んでいい人との出合い

竹原市　石原　淑子

誕生日シャンパンに酔う愛に酔う
五十九　風にまかせて風にのる
花筵薫りに噎せるダンゴ虫
花筏チームワークは今一つ
サイホンのコーヒー怒ってるおこってる

宇部市　平田　実男

金持ちが金の奴隷になっている
軍隊へ守られている自衛隊
副作用あります人にも薬にも
メンバーでこんなに違う酒の味
わたしには万能薬のワンカップ

美祢市　安平次　弘道

魂が錆びたか涙乾かない
愚痴はもう言うまい地獄から帰り
蟻一匹輪廻転生かも知れぬ
善し悪しは別に脱皮を繰り返し
ミニスカートで降りたは螺旋階段だ

熊本市　永田俊子

仰げば尊しみな仰がなくなった
恥じらいもときめきも捨てたローヒール
お歳ですからね　さりげなく医者が言う
口下手のハンディ私につきまとう
負けるのもいい薬だよ明日がある

熊本県　髙野宵草

古希すぎて毎年冬が寒くなる
一生をいい歯車でしたねと叙勲
親が子を子が親殺すおらが国
いい気候なぜに短い春と秋
忘れもの妻も人並み老いてきた

熊本県　岩切康子

約束に来ぬ人探し気が急ける
心配かけるハイキングなら中止する
よく聞けば見掛けによらぬ苦労性
鳶の群れ海の岩場で競う恋
画像視て外国見直す懐しさ

唐津市　久保正剣

数は力政治も金もテポドンも
誤診とは書かぬカルテのドイツ文字
何時の日か同行二人黄泉の杖
傷口を拡げるボトル干している
不整脈たばこ逆さに火をつける

唐津市　坂本蜂朗

引出しで初恋セピアに変りはて
コンサイスの押し花古稀の血が騒ぐ
どうみても良妻である客の前
妻が操縦するままに飛んでいる
巣立ちの日父は黙って腕を組む

唐津市　井上勝視

同行の気も新たなり霊山寺
生かされて掌を合わせてる花の酒
気楽だが今日を追われた頃を恋い
細々と死語懐かしみ生きている
銘柄は一つ馴染んだ酎の味

唐津市　山口高明

昨日まで良い子ぶってた殺人鬼
フォークが嫌いな僕は和食党
春を呼ぶカルスト大地野火疾る
五線紙に踊るわたしの愛の歌
良いとこを見せる心算の勇み足

唐津市　宗水笑

解説をされて納得する名句
子の世話にならぬと拗ねる天邪鬼
子は遠くうらの春を老い二人
葬儀屋の司会に向かぬ恵比須顔
赤鬼と河童仲良く梯子酒

唐津市　市丸晴翠

躓いた石が教える歩き方
税申告演技は効かぬ電算機
春風にはしゃぎ過ぎだね杉花粉
睡眠の儀式腹式深呼吸
症状を比べ合ってる路線バス

唐津市　樋口輝夫

売り声の活気にエビも跳ねて見せ
弁慶がマツケンサンバで踊り出す
本物の骨と言い張る北の国
うららかとばかりは言えぬ花粉症
這い這いのゴールは母の丸い膝

高知市　小川てるみ

怖いもの知らずの孫の言う未来
明日という風が吹くから生きられる
汗の味知らぬニートの増す不安
仲直りさすかのように雪が降る
輪の中で探す私の現在地

高知市　北川竹萌

九時に寝て六時目覚めのよい眠り
いち早く寝床をあげて掃除して
体調を測る手や足弾ませて
朝朝を体力保持の散歩から
九十路の年金暮し気もかろく

高知県　小澤幸泉

白杖ゆれて車いす泣く怒り雨
貧乏という器用さをつれてくる
切れぎれに妻の話に耳をかす
それぞれの歴史を刻む深い皺
埋めてなお余白が多い予定表

高知県　赤川菊野

一人でもお節にお屠蘇初春の膳
台風が我が家の歴史根こそぎに
その内に地球爆発するだろう
仮の世は一寸より道してるだけ
望郷の耳に故郷のわらべうた

東かがわ市　清川玲子

いい出会い固い蕾も開き出す
母として充実してる授乳室
センバツの校庭夜も球の音
どぶ川に捨てる金なら何故盗む
いらいらで刺されたのではうかばれぬ

東かがわ市　川崎ひかり

六十五歳年金額がアップした
納豆を好きになろうと日日努力
湯タンポのようなお人と四十年
魂を入れれば仏に変わる石
新しい家族が増える畳替え

東かがわ市　池内かおり

ケイタイを操り脳を活性化
イチローとゴジラと朝のうまいめし
新札の一葉どこへかくれんぼ
傷口に塩すり込みにくる他人
腕まくらなんて無理無理五十肩

東かがわ市　原賢

義理という心の糸で縛られる
負けん気がくすぶっている力瘤
繕った言葉に本音透けて見え
見栄捨てて気張らず明日の絵を描こう
清貧の心を癒す青畳

東かがわ市　伊勢八重子

言い合った昨日は見せぬ今朝の顔
土壇場に来て神様にすがりつく
産院の廊下命の声を待つ
前向きに生きて過去は眠らせる
まといつく胸の炎を持て余す

松山市　古手川光

合併へわが道を行く明日香村
二人ですると素うどんでも美味い
公僕の意味を忘れた公務員
常識をからかうようにコマーシャル
美しい星を見てるかテロリスト

松山市　髙橋宏臣

最初はグウ意思統一はこれ限り
どこまでも味方と影がついてくる
平凡は偉大だと言うひどい嘘
どの膝も安住せずと猫の去る
念仏もさわりの箇所は節をつけ

松山市　丹下美津子

今日も留守妻には羽根が生えたよう
おやおやまあこんな所にこぼれ種
偉い人いないが寄るといい仲間
新妻へ婿の尻尾を掴むコツ
ありがとう姑の一言胸が晴れ

大洲市　中居善信

五人しか知らないはずが漏れている
みそ汁の具はあいうえおかきくけこ
深呼吸くらいはしたら妻が言う
ギャラでなら動く男の計算機
すれ違うこころを一つ屋根の下

西予市　黒田茂代

ふんわりといる春風のようなひと
雪解水ちろちろ生きてゆこうかな
自然発火しそうな胸を抱いている
若い気を春の鏡がたしなめる
まっさらなニュース電光板走る

旅帰り蛇口の唄にホッとする
落丁を埋める言葉を考える
運のない手でかき回す壷の水
補聴器を入れても聞こえ戻らない
砂時計砂が笑っているようだ

砂川市　大橋政良

北国の冬に演歌が吹き溜まる
活造り鯉の目玉に直視され
貯金箱お金を抜いてばかりいる
樟脳の香りも混じる衣替え
平凡に生きてしあわせ咀嚼する

弘前市　福士慕情

豪雪から抜けるほどよい春の雨
長いトンネル抜けてようやく山が見え
うたた寝も読書も好きな春炬燵
マージャンもやれるようにとこたつ板
南から春が来たきた初燕

弘前市　今愁女

面白い話題も深い雪の中
体重は冬期の酒の皮下脂肪
雨音を消してる厚い屋根の雪
雪道を理由に欠席繰り返す
風動くまでは我慢の椅子になり

弘前市　相馬銀波

憧れの都家賃につぶされる
徹夜でもしっかり守るメ切日
向こうから来たからゆっくり長電話
誕生日孫の笑顔を買いに行く
腐っても鯛ボスをつとめるホームレス

弘前市　須郷井蛙

豪雪も天恵と受け雪室に
こころの眼開けと揺する春の風
春の兆しやっぱり笑い多くなる
春野菜の生気いただき活力に
種を播くささくれ指のいのる夢

弘前市　岡本花匠

豪雪も緩み出しますひな祭り
除排雪のトラブル続きあと少し
長電話雪の話に終始する
もう待てぬ雪割草のコールです
少しずつ陽差しは春に伸びている

弘前市　宮崎ヒサ子

ああ津軽吹雪の底で芽吹き出す
高齢化の窓を塞ぎに来る吹雪
吹雪く日の会話とぎれてばかりいる
一呼吸おくと自分の非に気付く
この土地の情けにすがるこぼれ種子

弘前市　高橋岳水

藪から棒に土地が出てきて仰天す
こつこつと二人で藪を切り開く
健気にも鋸と鋏の藪の中
開拓に百キロなんて厭わない
年月が藪に山荘生みました

弘前市　櫻庭順風

恋愛に飽きて見合いで的を射る
淑やかにお点前をするおちょぼ口
モンローを真似てアヒルの貌になる
ネクタイの裏に浮世絵しのばせる
愛情があるから妻はよく怒鳴る

黒石市　相馬一花

何時までも美しくありたい女の願い
渡る世は坂道ばかり苦労する
亡妻に逢いに行きます恐山
心をつなぎ暮らしを守る老夫婦
どの子らもほめて育てるいい先生

十和田市　阿部進

人生の真ん中へんで立往生
指先に飛んで来るのは運不運
にっこりが欲しい私は美の鏡
ただいまとお帰り欲しい愛無口
三回のコールで電話切る男

青森県　小寺花峯

春の雪予報へ義理のように降り
春雪に逆戻りして衣更え
啓蟄も炬燵から出ぬ老いの虫
婆様の雛壇孫が飾りつけ
三月の声に富士山靄に消え

さいたま市　八田敏

時を止め瞑想三昧夜の底
枯木立小枝も春を信じてる
ただ今元気長持しそうどうしまひょ
おおきにとハイで我家は春の風
駅弁でちょっと嬉しい旅気分

武蔵野市　亀井円女

ワープロが打てぬ手書きをほめられる
オバアチャンは勉強ばかりしています
悪口は言えない奢られてばかり
先頭を代ってくれる人がない
マツケンサンバ宗教に近くなる

八王子市　播本充子

待望の雨に新芽も深呼吸
青空を見るまで歩幅崩さない
くしゃくしゃのメモ初めてのお買い物
古地図の道が消された開発地
春の絵を描けば鉛筆止まらない

東京都　清原悦子

東京都　岸野あやめ

韓国に儒教が生きる冬ソナタ
五百羅漢どれにも似ない父と母
老姉妹似てますなあと言う他人
不用品置き場で拾うよい字引
娘婿さえ定年だほんとだよ

横浜市　小野句多留

生涯を現役めざす長寿村
ガンバレというから手術こわくなる
手術後は物体となり寝ています
病床の耳に過敏な多事雑多
牛丼に善人達の阿波踊り

横浜市　菊地政勝

妻と手を組むと勇気が倍になる
ゴミ出しの男はしない立ち話
近道ではなしの好きな人に会い
定年に見過ぎた夢が消去され
フランスの水でスコッチ割って飲み

静岡市　安本晃授

日曜の朝市野菜旬の味
朝市にこっそり地酒の顔も見え
豊作の米が泣かせる農の父
シナリオに無い地図ばかり母は描く
掌に宿るものひとつあり詩書の彩

静岡県　薗田獏沓

冬晴間だから満艦飾に干す
五十肩忘れヨン様追っかける
ミレーの絵そんな形で芋植える
絵手紙で御地の風がわかります
残り火を燃やす女のうす化粧

富山市　島ひかる

此の世から彼岸へ送る花便り
花吹雪今年は違う人と観る
ほたる烏賊春の音符で打ち上がる
落ち込んだ悲鳴だれにも届かない
嫁からの心遣いを亡母に見せ

愛知県　早川盛夫

寄せ集めだけどおでんの温かみ
酒飲んで笑って握手して別れ
片足で立って靴下まだ脱げる
白銀に恋も芽生えるペアリフト
よう吠える犬が隣にいて困り

可児市　板山まみ子

味噌汁と御飯だけでも家の味
退院の妻にやさしさぎこちなく
パンチーズワインが好きな皮下脂肪
親に似た鏡の顔に出る吐息
天才と思った二歳ただの人

川柳塔の川柳讃歌 ⑤

木津川　計

表があれば裏があるのです。「裏には裏がある」とも言いますから一筋縄ではいかない、どころか「裏の裏を行く」敵ながら天晴、感嘆舌を巻く人物もいます。そこまで複雑な慮りは不用にしても、対象を相対立する二面で眺めると、局面は俄然面白くなってきます。

見せられぬ写真きれいに撮れている

鴨谷　瑠美子

女性にも結構秘密はあるのです。「アルバムに貼れない人と逢っている」（とし子）ひとのように瑠美子さんも食わせ者で、見せられぬ写真を撮ったのです。きれいに写ってるだけに見せてやりたい気もするけど……。瑠美子さん、いいですよ、秘密の一つや二つがあったとて。僕は黙っていますから。

ああ夫婦　鎖ではない絆です

酒井　一壺

鎖でつなぐと言い、絆で結ぶと申しています。ですから「結納」をかわすと言い、「鎖納」なる言葉を生み出さなかったのは漢字メーカーのさすがであります。

さりながら一壺さんの深謀です。「嗚呼」でなく「ああ」と書かれたばかりに慨嘆でもあり、喜びでもある句になりました。が、ここは川柳です。絆である麗わしさというより鎖でつながれた犬みたいな、いや、やっぱり絆と言います、か…。

痛む歯があっていいねと言われたり

浅野　房子

若い頃、老人の嘆きを聞きました。「お前らみたいに沢庵をパリパリ噛んで食べたいなあ」。その嘆きを実感するようになって僕は知ります。歯は痛んで幸せなのです。入れ歯や差し歯は死んだ歯故、痛むことがありません。願わくは僕の歯も生き返り、歯痛になって夜通し難儀したい、と。

弱気と強気　棒立ちと仁王立ち

海老池　洋

そうか、立ち方に二種類があったのですね。びっくりしたり、恐怖におののいたりしたとき、人は棒立ちになります。即ち、弱気の然らしむるポーズですが、仁王のようにどっしりと勢いこんだ強気な立ち方もあるのです。そう言えば、弱気な座り方もあれば、強気な居座り方もありますね。

光ってる方をしんどいなと思う

青戸田　鶴

人間を二種類に分けたら、光る少数派と光らない多数派です。光り続けるために、有名人は忘れられないためのせめぎ合いをいたしているのです。しんどいなあ。それに比べたら、光らない僕や、失礼ながら田鶴さんは気楽で幸せです。本当に偉い方は、せめぎ合わなくとも光っておいでなのですが。

仮面などいらぬ場末で酌み交わし

安平次　弘道

人間を英語でperson（パースン）と申します。語源はラテン語のpersona（ペルソナ）でして、仮面という意味です。人間は何枚もの仮面をかぶった動物で、幾通りもの演技に憂き身をやつしているのです。場末でなければ仮面をはずせぬ人生、弘道さん、男はつらいよですねえ。

一日が終る時間を無駄にして

早川　盛夫

盛夫さん、時間を無駄に費やした一日のなんと豪奢なことでしょう。あくせくが身につくと品性が下がります。悠然と参りましょう。

（立命館大学教授・『上方芸能』誌代表）

自選集

五月待つ花橘の香をかげば

雪月花ただよいながら生かされて
掌のわが魂の色かたち
白鳥のごとくに孫に春がきた
古里はアノネの姉が餅を焼く
流連に雪見の酒は迎え酒

橘高薫風

明日逢える約束だった男下駄
道端の花が教えてくれた道
さりげなくこの道行けば逢えるかも
この道は母と歩いたおぼろ月
どうしても逢わねばならぬ細い道

板尾岳人

春の耳いいことばかり聞きたがる
こだわりを笑う　星座のおおらかさ
仰ぐ空失くした鳥の失語症
そのままの姿受け入れるのも愛
広辞苑　言葉の散歩果てもなし

奥田みつ子

風はらみ元気に泳げ初幟
梅漬ける手解き受けた亡母想う
ここ一番勝敗賭ける意外性
なまじっか持った過信が見る憂き目
定年帰農　夫婦で決めた青写真

河井庸佑

性分という厄介をもてあます
徒花の色香に迷いけつまずく
ああ長男思えば損な役回り
下手でいいから文章も世渡りも
プライドを捨てて老いの荷軽くする

川島諷云児

満腹の幟が跳ねる五月空
無人駅菖蒲一輪活けてある
白寿へと高いハードル越えてゆく（九十翁）
充電をしてエンジンをフル回転
街路樹も悲鳴をあげる排気ガス

木村あきら

各駅停車ノンビリとゆく翁（九十四翁）
我が国の明日を背負う鯉のぼり
ヘルパーの手を借り今日も生きてゆく
晴れた日は一日かかり寺詣で
舗装路が切れ此処までは政治力

(故)工藤吟笑

友の死を聞く病室の窓明かり
病院で寝てても税金またとられ
外出が許され窓の明るさよ
内緒だとくれるうまいにぎりめし
重患の悲鳴夜中の病室で

黒川紫香

黄砂降る昔の戦地思い出す
木偶だとて燃える炎を抱く時もある
励んでもまだ学歴の厚い壁
先代の重さを知った葱坊主
春一番近所の埃降ってきた

小西雄々

就職も決まってねむいねむい春
浅い春寒のもどりが狂わせる
うっかりのミスへお灸が熱かった
ごぶさたのめっきり白い髭に会う
こんなにもよく似るものか瓜ふたつ

小林由多香

やるだけはやったと敗者いい笑顔
約束を守る優しい子の瞳
コマーシャル上手になったりんご達
神木の杉からもらう花粉症
太陽っていいな青い菜をくれる

斉藤劦

六十年 終戦の日を忘れまじ
六十年 戦なき世をわれら生き
六十年 束の間なりきあの日より
六十年 不戦つらぬき通しけり
六十年 九条守り生き抜かん

田中正坊

ノータイで仮面をつけたことがない
冬木立私に凛の気をくれる
ピリオドはまだまだ早いスニーカー
歳ですと言わないお医者さんが好き
大正の生まれで足るを知っている

玉置重人

幸せがここにもあった箸二膳
はじまったどうしょうもない愚痴話
カラー舗装へ顔出す草のしたたかさ
耳よりな話へ膝が寄ってくる
好きな者同士話題は酒になる

恒松叮紅

この花が咲く頃この蝶脱皮する
騙されなやと携帯を持たされる
下駄箱にあるジョギングの指定席
戻り寒蝿一匹が動かない
にんげんが危ない母が子を殺す

遠山可住

大きな声で麗かになることば
人の世に祭り文化の笛を吹く
道をちがえて途中から折り返し
生きているただそれだけで丸儲け
携帯で呼んだ彼岸のお友だち

土橋　螢

ぜいたくの錆とでも言え消費税
ぜいたくの基準論じる社長会
ぜいたくに庭の焚火が例とされ
ぜいたくは敵が標語であった頃
ぜいたくは平均寿命を待って死ぬ

仁部四郎

作業着のデブを拉致して夢覚める
拉致された親の身になる不眠症
作業着のデブよお前は人間か
地雷仕かけて作業着のデブを待ち
作業着のデブに食らわそ両ビンタ

野村太茂津

ハーモニカ父の影絵が夢に出る
みちのくに流刑の人の鬼薊
母の忌がふたたびめぐる春もみじ
町並みのどこかでジャズの低い音
とても真面目でピエロの音楽隊

波多野五楽庵

紅白の梅に照れてる二人連れ
白梅がお茶の香りを引き立てる
いろいろの梅の名札にある誇り
紅白の彩に酔ってる梅見客
紅梅の下で酔ってるコーヒー味

芳地狸村

酒好きで風邪も引かずに冬を越し
幸せは肝臓酒に負けてない
観光のコース酒蔵あないされ
酒蔵でおいしい酒をのまされる
うまい酒だった土産に買っている

宮口笛生

神仏へ愚痴をこぼして老いひとり
若い日の蹟き外す卑怯者
アホくさい話も意地を見せられる
後一杯詫びて飲んでる縄のれん
曼珠沙華これより先は秋の風

森下愛論

蘇鉄もみごとに冬を脱ぎ棄てましたねえ
痒かったでしょうね清々しましたね
蛇だってすっぽり蘞を脱ぎました
首から下は春になりたくない私
腹だけは春になろうと巻いておく

八木千代

八十田　洞庵

火宅の隅でケラケラ嗤うひとが居る
あさはかとも言える誤算は美田売る
海鳴りよあれは友の雄叫びだ
枯野残照　影絵のように生き延びる
返り血は覚悟反旗を翻す

両川　洋々

影法師今日からお前自立しろ
春なのに心の冬が出て行かぬ
人質も日本の民じゃないのかい
深追いはするな女はたんと居る
自爆テロ君にも家族あるだろう

阿萬　萬的

軽い嘘思わぬ方へ行くこわさ
残り火を掻き立て頼りないファイト
キャリアはもう通じないＩＴ化
米寿です夢もしぼんだ曇り空
風邪気味へ妻が少うし小うるさい

石川　侃流洞

蛇に似た縄におびえて石を投げ
助け合いましょう大正枯すすき
留守ですとオームに出足くじかれる
女もう露出度上げる春の風
言いたくてたまらぬ秘密耳を借り

全国の河童達よ遠野に集合せよ！

第２回「河童」川柳誌上全国大会

応募期間　受付開始　５月１日
締　　切　９月30日(消印有効)

課　題　「河童」2句(新作・新鮮な河童を)

選　者（敬称略）

札幌川柳社（北海道）斎藤　大雄
おかじょうき川柳社（青　森）北野　岸柳
川柳人社（岩　手）佐藤　岳俊
明日香川柳社（埼　玉）てじま晩秋
川柳研究社（東　京）西来　みわ
ＮＨＫ学園（神奈川）大木　俊秀
川柳えんぴつ社（富　山）脇坂　正夢
川柳塔社（大　阪）西出　楓楽
光川柳会（山　口）早川　双鳥
戸畑あやめ川柳会（福　岡）藤井　北灯

投句料　1000円（小為替）便箋たて書き

発　表　11月３日

賞　総合25位まで(盾その他・発表誌呈)

投句先　〒028-0516 遠野市穀町6―17
鈴木南水　TEL 0198-62-4843

第50回「全国川柳作家年鑑」参加作品応募要領

1．**句　稿**　応募用紙あり（申し付けて下さい）　作品７句新旧可

2．**応募費**　3,000円
定額小為替か振替口座

3．**刊　行**　平成17年９月下旬予定
(参加者に年鑑一冊送付)

4．**締　切**　**６月20日（月）**消印有効

5．**投句送金先**　〒654-0151 神戸市須磨区
北落合4-28-12　長島敏子
TEL 078-793-3641

6．**郵便振替**　00960-4-61516
全国川柳作家年鑑　長島敏子

7．**応募資格**　どなたでも可、ジュニアも歓迎

8．**その他**　カット（ハガキ大以内）
（８の採用は一任の事）

ふあうすと川柳社　主幹　泉　比呂史
全国川柳作家年鑑刊行委員
刊行責任者　福島直球

奥田みつ子選

泉佐野市　備後　三代子

傘寿までたどり着けたとお灯明
曽孫まで揃い傘寿の祝い膳
穏やかな高砂の笑み春の彩
次の季も会いたいものよ　しだれ梅
慈しみいっぱい受けた嬰の笑み
時よ止れかたい握手のエアポート

奈良県　(故)江波正純

喝采は浴びる事ない妻の席
にこやかな顔でバシッと釘ささ れ
蕗のとう思い出たどり野に遊ぶ
九条を抱いて歩いた半世紀
いくさ好きいつも戦に行かぬ人
国のツケ庶民の財布だけ狙う

大洲市　花岡順子

支えあう糸が家族の色を出す
ご近所の噂へ相槌など打てぬ
一つずつ飾りを捨てて向かう老い
平行線の辛さを君は知ってるか
心だけは結ばれてると信じたい
赤い靴履いて踊りを止められぬ

大阪市　三浦千津子

天気晴朗疑うことは止めにする
算盤は抜きの味方がいてくれる
一日一善心に積んでゆく貯金
古い殻捨てる余生の青写真
脇役の誇り謙虚に生きている
未練など残さぬ美学落ち椿

藤井寺市　西村栄一

春うらら陽気な夢を売りに来る
この陽気　女の癖がふきこぼれ
立たされた窓にトンボがいた母校
望み高く沈む夕陽を見ていたい
弱いとこ見せたら楽になりました

日立市　加藤権悟

耐えているこの足裏に恩がある
保護色を嫌う男の一本気
無冠だが父の足跡から学ぶ
居酒屋のすみに本音がころげ落ち
葉ざくらをだれも振り向いてはくれぬ

今治市　塩路よしみ

光る道つけて野心のかたつむり
托鉢は絵になる京の侘びと寂び
うれしい日ぴったり合った春帽子
赤裸々な笑顔眩しい少年よ
行雲流水　風のさだめに逆らわず

岐阜市　平野あずま

千切れ雲海の彼方へ旅誘う
大波小波見つめ無心の旅衣
月天心夜の海原果てしなく
島巡りのバスで蛇皮線弾くガイド
長途終えわが家の姿見て安堵

羽曳野市　森下一知

俎の音に漂う低気圧
家具の位置替えて追い出すすきま風
雑学を拾い集めて回り道
O型の所為でしょっちゅう空財布
悪友と毒薬飲んで達者です

堺市　藤井一二三

大盃と梅に銘あり酒どころ（伊丹にて）
喋り過ぎ気付いて戻す間の悪さ
咲かぬまま萎んだ過去を嗤う酒
一坪の庭に咲かせる種を蒔く
羽織脱ぐしぐさ一つに光る芸

東京都　小川賀世子

春一番神木騒ぐ建長寺
雛人形母の願いと娘の思い
人形にも夜叉にも恋の七変化
春はる春　心のボタン開け放つ
有情無情今年も同じ桜咲く

大阪市　伏見雅明

猫を飼いおんな独りの化粧する
ふところに過去を消し去るキーを持つ
ふと見るとついて来るのは妻ひとり
だんだんと許容範囲が狭くなる
いつからか読めなくなった子の心

相生市　村木信子

利休忌へ濃茶はんなり飲み干して
子が巣立ちたった二人の春炬燵
年金が夫婦の命抱いてくれ
あるがままのわたしで居たい意見吐く
季語知らぬ苺威張っているケーキ

札幌市　三浦強一

王様は裸と言って左遷され
仁王さま仰ぎ男の気を貰う
どっしりと構えているが策はない
北風は父　太陽は母の愛
掌中の珠はさっさと親離れ

三田市　堀　正和

なるようになるさ今年も桜咲く
和服着て少し優しい妻になる
へそくりの味を覚えた定年後
前置きの割りに中身のない話
百均の軍手でコメは作れまい

枚方市　二宮紫鳳

孫の声疲れふき飛ぶ魔法薬
沈丁花今年も忘れず春を呼ぶ
合格の君へ梅の香祝福す
ホトトギス鳴いてまどろむ縁の母
花の中夢いっぱいの園児バス

草加市　飯土井健翁

残る日を大事に登る百の道
初夢に活気溢れる槌の音
血がたぎる明日への夢に挑む日々
反骨があるから老いを寄せつけず
動くから汗もかきます血も踊る

堺市　大久保伸子

よくしゃべりよく食べ女旅が好き
年金を集めポックリ寺栄え
悩むなよ朝のこない夜はない
好きな服買って行きたいとこが増え
桜咲く幼なじみはもういない

奈良市　乾　春雄

童唄　風のタクトに流れ出る
故郷捨てても訛は捨てられず
大相撲剃らない髭に棲む女神
友情がつづく友との車間距離
古本の紙魚に明治が生きている

佐渡市　髙野不二

犬好きの犬同士まで仲がいい
今日の事反省してる日記帳
三人でテレビが三つある暮し
ごみにしてからの経費が高くつく
年金で納める酒税消費税

和歌山市　柏原夕胡

頑張らなくていいよと風の声がする
君の声聞くとこころは晴れになる
人間の数だけ愛が咲いている
そばにいてあげる涙が乾くまで
泣き虫なこころをそっと裏返す

高知県　桑名孝雄

労農に遠慮会釈のない五月
害虫に布告ニイタカヤマノボレ
雑草の出鼻を叩く持久戦
無農薬ままごとごっこなら出来る
出来秋はどうせ徒労と知る戦果

宇部市　高山清子

告知せず笑顔で看護辛き日々
健康食　寿命に勝てぬものと知り
終焉に感謝の言葉くれた夫
ハキハキと言えば正論らしくなり
表現のうまさ言葉に味がある

京都市　清水英旺

杉花粉春一番で目を覚ます
梅林の香りうらめしマスク族
青春を謳歌した日の走馬灯
芽ぶく枝に寒の戻りは容赦なし
面映ゆくチョコ一つ買うホワイトデー

和歌山市　土屋起世子

何時の間にか夫の声も丸くなり
権力を見せたがってるでかい声
甘い声でお酒注がれて午前様
受話器から私の財布狙う声
近道を行くこと知らぬ母だった

大阪府　神野千恵子

名工の目の輝きに見る若さ
人形振りなぜかどきどきしてしまう
足がつる双葉マークの助手席で
出世魚わたしも名前変えてみよ
それからと聞かれてみてもケセラセラ

今治市　野村清美

これでいい自問自答を繰り返す
音立てて未練がましい静電気
思いきり悩んで明日のいい笑顔
ひらめきを拾いに杖と散歩する
明日のため充電してる日向ぼこ

府中市　馬場利子

ボロボロの命をつなぐ脈の音
花の傷深くて嘆く花鋏
わが人生こんなものかとあきらめる
風さやか翔べないひよこ風と舞う
忍の字を抱いて女の夢描く

神戸市　両川無限

いつからか素顔さらして生きている
きっかけがあれば乗りたい雲がある
簡単に見せぬ女の裏表
終着も明日は始発の駅になる
簡単に性善説は裏切られ

日高市　根岸方子

酉年の所為にしている忘れ物
ここだけの話いつしかムチになる
多数派になびく打算が透けて見え
ライバルの吐息がもれる雨の午後
ライバルの位置へ目線を変えて見る

昭島市　野口忠

嫁姑男はどちら向けばいい
夫婦でも虚虚実実が顔を出す
他人の目で自分を見詰めハッとする
生きるとは片道切符だけの旅
上弦の月は夢乗せ浮かぶ舟

浜松市　杉浦えむ

君は犬をひろう　わたしを捨てた日に
きれいだねほめられたのは前歯だけ
君の名を静かに呼んでいる白紙
ハッピーエンド家に明かりが点いている
石ころをわらうあなたは贋ダイヤ

犬山市　金子美千代

紙雛を飾り一人のひな祭り
白梅の清清しさになお寂し
駆り立てるものの無い日の春炬燵
進歩とは何だろ地球が尖ってる
強盗のいでたちで出る花粉症

犬山市　関本かつ子

親は看て子には頼らぬ世代生き
頭数かぞえてつづくバスの旅
媚売らぬ梅一輪に道しるべ
それなりに時間をかけて自然治癒
誤字脱字孫の手紙は皆許し

尾張旭市　三浦きぬ

お釈迦様年齢順に願います
まだらぼけ老いと若さが住みついて
ぜいたくにほど遠いまま幕引きか
寝乱れの頭そのままファッションよ
星一つ瞬きしぶる街の空

愛知県　河合ますみ

こだわった靴の先から春が来る
怖い夜靴も乱歩の音で鳴り
かっとして目が点になるとき図星
言い返す言葉のみ込む胃の手前
やっと来た祖母の思いに気付く歳

長岡京市　山田葉子

手帳から小さな秘密パラリ落ち
義理チョコを妻も配っているらしい
浪費家でないが元気もないようだ
若さだけで跳びこえてきた川だろう
午前0時夢で会いたいひとがいる

京都市　三宅満子

群れて良し一輪も良し梅の花
年金でブレーキかける遊びグセ
時々は電池を抜いて休んどく
心には開けない鍵も持っている
家計簿の都合は聞かぬ慶弔費

大阪市　升成好

わだかまり捨てたら旨い酒になり
僕を見て突然やめた立ち話
子に残す下絵は白と決めている
とり敢えずビールでつなぐ不意の客
二つ三つ夢書き添えて新日記

大阪市　池上清治

税金を平気で食べる大阪市
飾り雛並べる妻が若返る
ワンミスに妻の小言は機関銃
いろんな事おましたなあと金婚日
フィクションのドラマ涙腺すぐゆるみ

池田市　北出北朗

しなやかな嘘を抱いて娘は二十歳
仮の世を桜笑えば人笑う
たんぽぽを挿頭しアタチはお姫ちゃま
げんげ田で大の字になりおーい雲
通学路ビンタを貰うネギ坊主

泉佐野市　稲葉洋

高齢化儂もよたよたして加担
青筋を立てず我慢が出来る歳
舌打ちをして溜飲を少し下げ
ねえ聞いて頷くだけでいいからさ
余所は余所なのにあれこれ糺される

柏原市　伴洋子

友と行く肩の凝らないディナーショー
怖いほど私の影を娘にうつす
やりかけの夢へ五十路の再起動
わがままを方程式にかけてみる
原因究明すれば火の粉が飛んでくる

河内長野市　坂上淳司

震災十年神戸黙祷して通過
イスラムのブルカが欲しい花粉症
花粉症鞍馬天狗にサングラス
いい介護されてる人のいい笑顔
暗証番号変えて忘れてああ無残

河内長野市　木太久正一

ひな祭り夫婦ふたりの握り鮨
ブリ大根　男のメニューひとつ増え
おめでとうファックス孫の誕生日
聞えない妻の悲しみ如何ならん
血によらず愛の絆のあるホーム

恐くないホラー映画も歳のせい
お目当てがあって念入り化粧する
早々と雛壇しまう親心
借りることばかり教えるコマーシャル
老醜が消える鏡はないものか

岸和田市　堤　楢代

大学で相撲が強くなれたのか
揉めた分おもしろそうなパシフィック
ポール際一瞬凍る五万人
決勝のゴール歓喜のシャツを投げ
女子ゴルフ　フェイス　スタイルそれと腕

堺市　奥　時雄

目標に命の限り進むだけ
入院で知ったお酒のない暮し
一人去り二人去っても同じ床
心配で上る血圧聞いてまた
目標を忘れぬように頭刈る

堺市　河盛龍三

出かけよう誘いのかかるうちが華
枯山水その心境へまだ遠く
後ろからじっと見守る眼が温い
携帯がストレスになる外回り
取扱い注意と表示粗大ごみ

堺市　羽田野洋介

私をぼやっと見ている昼の月
受け皿に少うしぐちを溜めている
かごめの輪　塾に行く子が抜けて行く
里の花押し花にして姉の文
昨日着ぶくれ今日軽やかに万歩計

吹田市　二宮栄子

もう少し生きるつもりの竹を踏む
鬼の面忘れて帰る縄のれん
じいちゃんが孫に手品を試される
いたずらな風に噂が乗りたがる
達筆の賀状に元気見届ける

高槻市　佐甲昭二

さん付けで妻に感謝の定年日
歯車の僕にことさら夕陽燃え
爆弾のように初孫抱いている
生き急ぎすぎて魂置き忘れ
酔うほどにお国訛りが吐く本音

羽曳野市　吉村久仁雄

人並にペイオフ語る預金帳
恥晒し少し肩の荷おろしてる
オーイお茶何処で呼んだか亡夫の声
飼猫もクシャンクシャンと杉花粉
梅一輪一輪ほどの恋をする

藤井寺市　増井ヨシ枝

下駄あずけ座り直すと出る自信
断ち切れぬ思いひとつが浮き沈む
愛という衣は時を抱きしめる
ストレスの直球うけて胃が踊る
安堵する友の声聞き安堵する

八尾市　脇　俊子

にこやかな父の遺影と老い語る
抱き癖がつくと娘に叱られる
養生はできぬが長寿祈ってる
休肝日飴に饅頭チョコレート
子にポスト抜かれて一人祝い酒

八尾市　田邊浩三

カルチャーの梯子余生の潤骨油
得る物と失うものとある決意
世渡りは話上手に聞き上手
切りかえが早くストレスたまらない
方向を少し変えると出口見え

八尾市　松葉君江

ご主人のそばなら吠える卑怯者
アンケート歳の記入は止めたまま
社内より社外で情報先に聞き
舞妓はん春を振り撒き古都の路地
肩で風切ってはいるが薬漬け

八尾市　笹倉ひろし

梅の香を抱く春風と散歩する
赤信号　子に教えてる若いママ
にこやかな家庭が好きと福の神
深酒を叱る親父の二日酔い
四十年今あらためてプロポーズ

八尾市　西川義明

レールから外れてもいいそれもいい
ポケットに飴玉ひとつある安堵
ウォーキング向い風ならなおうれし
御仏は一対一で会うが良い
梅一輪台所にも春が来る

神戸市　田中章子

やっぱりな　つい口を出し火傷する
土壇場でポンと見抜いた落し穴
易の灯へ冷えた心をのぞかれる
インタビュアープライバシーをうまく聞き
下積みの苦労を生かす二度の職

伊丹市　延寿庵野鶴

花月前たこ焼きの香も春となる
薄情な人にも春の風が吹く
軽音楽のせた新車の初デート
花盛って亡夫と花の話する
税納め三時の和菓子我慢する

篠山市　谷田多美子

道草を食ってやさしい人に会う
眼が治り夫はもとの本の虫
この町の鯨に似てる山が好き
楚楚としたすみれ見たさに後戻り
文明の利器を持たないのが自慢

三田市　石原歳子

乾杯の前置き長く泡消える
散歩道花芽さがして歩を延ばす
知恵の輪が解けないままでおばあちゃん
どうしょう孫より可愛い座敷犬
定年後夫婦の食事時間差に

三田市　辻　開子

妻が逝くきっと私も駄目だろう
春だから弾んでみたい気もあるが
陽気にはさせてくれない過去の傷
あいまいに問われ曖昧に答える
淋しさを隠して歌う北酒場

西宮市　片山　忠

薩摩育ち男の無口板に付く
胸に棲む鬼が時々目を覚ます
真ん中より隅っこが好き酒の席
春の風温さ寒さが交叉する
農鳥が見えて富士にも春便り

奈良市　矢野良一

大津波忘れたような青い海
好奇心幼子の目を輝かす
高額の差し歯白めにしてもらう
レトルトへせめて器は凝ってみる
枯れるのを恐れる勿れ野の芒

橿原市　藤永実千代

雛人形そっと抱き上げ子に還る
姉よりも弟はしゃぐ雛祭り
慌てん坊自業自得で詐欺に遭う
皺くちゃの母の両手に包まれる
土筆摘む孫とわたしの秘密基地

和歌山市　根田よしこ

思いやり説いて犠牲に腰を引く
踏み込んだ線の分だけ荷を背負い
冗談で済まぬ例えを出してくる
どちらでもよい事だから生返事
結果論ばかり自分にない意見

和歌山市　喜田准一

散歩道ガーデニングの出来不出来
君子蘭の蕾発見五つある
働いてれば長生きしてもいいですか
人知れず咲いて白梅過疎の村
とまり木で一服愚痴を捨てて来る

和歌山県　森下順子

和歌山県　村中悦男

さようなら言って別れた友いずこ
はっきりとルーペの下で文字が生き
居酒屋の隅に孤独の席がある
見抜かれたらしい　にやりとしてる妻
言いわけがすぎるところにある不信

鳥取市　森　美智代

原風景にふれて川から桃拾う
太陽を浴びて消えますそんなうつ
苦かった薬がやっと効いてきた
戻らない記憶のままで笑っている
青年に負け戦などない自信

鳥取市　山口千代子

子が巣立ち夫婦の絆強くなり
カルタ取り保育の孫に負けとおし
大根の葉を捨てる人拾う人
良い言葉忘れぬうちにメモをとる
母恋し一人淋しい日暮れどき

米子市　猪森スミヱ

信号の赤をにらんでああ遅刻
さわやかな言葉明日へつなぐ糸
乾杯ですっかり流すわだかまり
猛犬と書いてチワワを飼っている
長生きをしたネゲートル巻いた脛

松江市　山根邦代

雪解けて背中おされる風が吹く
草花の新芽ドキドキしてしまう
春の彩着たくて探す花の精
啓蟄の虫に負けないウォーキング
記憶とは好い加減なり風の声

松江市　松浦登志子

ときめいて修二会の闇で手をつなぐ
ヨン様にきよし　マツケン　ロマンかな
春の陽がホコリホコリとやかましい
あなたとも三寒四温続いてる
出席を決めてから来た明細書

出雲市　荒木英子

不景気の歪に泣いて過疎の町
背伸びして花咲かせたい老いの坂
リフォームで落書の跡子を偲ぶ
明日知れぬ命を夢に托しつつ
春なのに突然の雪足奪う

安来市　原　煩悩児

故郷の赤い夕日にある仏心
ロボットが使い続ける人の知恵
憧憬の母が可愛く笑み給う
補聴器からも逃げた虫の音鳥の声
山野草たっぷり摘んで老い達者

今聞いて脳の隙間でもう洩れる
若者に交じれば歳を忘れさせ
寝たきりへふとんの重み気にかかる
わだかまり解けて蕾もほころびる
薬害を説いてる人も飲んで居り

島根県　武島ちよえ

敬老の日似顔絵若く描いてくれ
整形の妻にパパ似の子で平和
職ひいて狭い厨が新天地
もう一度恋してみたい春キャベツ
美人薄命白寿の母に感謝する

倉敷市　撰喜子

ふきのとう昔ばなしの味がする
グルメより湯がごちそうと宿の下駄
たっぷりの湯の中にあるおらが春
三月の陽気にちょっと気を許す
たかが風邪熱はなくてもされど風邪

府中市　藤岡ヒデコ

振り向けば女の視線横に外れ
何となく来て何か買う植木市
アクションが大好きという人間味
躓いた石に会釈をするゆとり
癖の良い字だとは褒めてくれたのか

今治市　渡邊伊津志

長い坂夫婦が登る峠道
四万十の鮎塩振りで土佐を売り
許すから帰れと父は兜脱ぎ
新妻の笑顔茶の間に春を呼び
温暖化地球の未来どうなるの

高知県　近森功

抱きしめてくれた祝辞は忘れない
貯えは未練残らぬほどがよい
気がつけば亡母そっくりの顔になり
お互いに賞味期限は切れ夫婦
迷子札親につけてる手がふるえ

高知県　百田幸

小鳥好きすずめ目白を呼び寄せる
猫柳うぶげやさしく春を呼ぶ
雨もよい降るかも知れぬ辞書を繰る
手伝えば当り前よと女房殿
丸の内息子の職場どのあたり

唐津市　岩崎實

銃向けて悪の根断つと言う驕り
名誉とか金よりやはり温い家
いつの世も昔良かった思うらし
お帰りなさいませと手をつく猫が待つ
今最高わたし取り合う孫がいて

シドニー　坂上のり子

藤井寺市　伊藤アヤ子

物騒な世だ後ろにも眼をつける
この人に三歩下ってついてゆく
お帰りとお茶一杯を夫がつぐ
やる気ならまだ燃えている古希の坂

横浜市　長島亜希子

刺股のある教室で学ぶ子ら
バーチャルで奈良の都の人となる（唐招提寺展）
老いたなと他人のことはよく見える
病んだ世に若者のメス期待する

東京都　井上つよし

人生のジグソパズル穴だらけ
公約の大風呂敷が結べない
TPO次善の策で生き延びる
清貧にオレオレ詐欺も寄っつかず

横浜市　巖田かず枝

愛知博まずはしゃちほこ磨きから
韓流に置いてけぼりの亭主達
良薬は笑いだそうな落語聞く
リューマチに食器洗い機贈られて

鳥取県　橋谷静江

野の花をわくわくさせる春の風
つぼみある花へわくわく期待する
老いる日へブレーキかけてすごしたい
歳重ね趣味の友達ふえてきた

兵庫県　黒崎美紗子

席ゆずる優しいしぐさいい女
税申告並ぶまじめな顔ばかり
嘘でしょと鏡と話す皺の数
寒に咲くタンポポのよう負けず生き

ニューオリンズ　阿良喜玲

唱歌隊いたずらっ子も天使様
初雪だ庭に飛び出す孫とポチ
息子より上手な孫の箸使い
腹立ちも義理の笑顔で流してる

鳥取市　山岡紀子

ストレスの隣に住んでよく食べる
よく喋る母でストレス溜めぬ主義
方言でキラッと光る喜寿傘寿
過疎の村赤ちゃんだけが光ってる

高知市　伊野部和江

婚礼の知らせに弾むカレンダー
義理チョコに妻が感謝のホワイトデー
恥じろうて行きつ戻りつ春が来る
今日の風はんすうしてる終い風呂

河内長野市　印藤智子

この歳で私のための雛祭り
味見する母は華やぎ妻の顔
すべての縁すてて身軽になった夢
ペン持って閨秀作家のポーズする

横浜市　金森徳三

不摂生なのにオマケの喜寿の年
居酒屋で愚痴って明日はごまをすり
止めようといつも思って吸っている
悔いの無い人生でした建前は

大阪府　小栢こずえ

事故を見て明日の自分をだぶらせる
乗せてもらい運転よりも肩こらせ
わかり良い子供ニュースを見ています
話湧き寝不足楽し旅の宿

和歌山県　辻内次根

何処からも話が来ない寒い席
竹光で妄想叩き切っている
気持ちよく暗示にかかる春の道
三行で終わって今日も無事でいる

八尾市　寺川はじむ

大根の白さ通している頑固
友来ると味に張り出る妻の腕
うっとりとピカソを観てる仕草する
今朝もまた矛盾の記事が紙面盛る

米子市　小塩智加恵

気楽だろ一人暮しを夢に見る
女でも役が付いたら敵七人
葬儀社に葬儀代を聞いておく
一病も三つの嘘も抱いている

和歌山市　山田侃太

先頭でこけていたのは私です
テレビ見る部屋は違うが家族です
春風に吹かれいいことありそうや
焼き鳥に嘘はつけないコップ酒

八尾市　田中トシエ

春ですね公園ベンチぬり替えて
春の庭クイズのような何の芽か
言い訳は建前論で化粧する
前向きに生きる古傷洗わない

鳥取県　平木公子

知り過ぎて自分の居場所見失う
先生に誉められた芽がよく伸びる
梅開き今年も母の忌は巡る
飼い犬に真の家長を見抜かれる

岸和田市　坂口英雄

校門の桜待ってる新入生
悪口も愚痴も消えてる花の中
マスクした美人にお辞儀されたけど
春一番今日のお客は杉花粉

尼崎市　小池幸子

この季節私のクギ煮待たれてる
お世辞でも貰うと嬉し褒め言葉
身の丈に合った余生を準備する
あの世まで一つや二つ胸の奥

雛を見る少女の貌が雛になる
美人医師問診のことふと忘れ
温暖化疑うような雪積る
算数の宿題親子悩ませる

横浜市　布山嘉信

別腹を告発しだす皮下脂肪
愛犬も面食いと知る散歩道
徳用の文字に誘われ手がのびる
平和へのあしおと聴いている大地

高岡市　青井はつえ

偶然ではない道端の小さい花
玄関のベルちょっぴり鳴らすランドセル
約束を果さず君は雲に乗る
枯葉舞うタンゴかワルツ軽やかに

静岡市　中西雅

さすまたで向かう教師の痛む胸
春爛漫出鼻をくじく花粉症
ぬくもりの土に根を張る新学期
朝ヨガでリセット春を翔んでみる

犬山市　吉田幸子

一年の計が二月に逃げました
攻める日はない老い守る日は守る
戦地での鬼軍曹は仏です
歳を言い当てられたなあ老いたなあ

大阪市　尾崎黄紅

蕗のとう春の足音ひたひたと
樹々渡る風にみどりの声がある
還らざる過去ふりむかず糧とする
子がくれた杖で世界が広がった

大阪市　吉田富美

連発のクシャミに乗って春が来る
玄関に一輪の花春の色
花よりもやはりグルメに人気あり
しっかりと離婚に備え貯めてます

大阪市　寺井弘子

菜の花のほのかな苦味舌生きる
増税で始末してますお饅頭
雨模様やっと笑顔の花粉症
とんでるね言われ子離れ出来ました

大阪市　平嶋美智子

それからは聞かいでわかる友の愚痴
八方に気をつかう孫しんどかろ
いなくなる衣料切符を知るお人
優待券嬉しく乗ってむなしゅうて

大阪市　中村れんげ

新世紀女帝皇位で蘇れ
ほんまにな生涯癖は治らない
へまばかり重ね未練の恋心
サイホンでコーヒー沸かす昼下り

大阪市　吉川弘泰

鰯食い寿司食いそして豆も食い
厨房も規制緩和で男立ち
安定剤のんで昌子の歌元気
暇やなー医者の取り分数えとり

大阪市　平井露芳

懐かしい仲間とともに旅日記
花冷えへ形見のマフラー暖かい
疲れより会えた喜び先にたつ
しあわせな笑顔で満たすわが余生

大阪市　吉内タカ子

早咲きの梅にホーケキョ言ったげる
お日様が春の心をくれました
ヨン様にマツケン様に主婦の山
生真面目が過疎の信号厳守して

池田市　多田契子

テレビ見て総理と喧嘩してる夫
てんこ盛りサービス受ける市職員
目一杯おしゃれしたいのクラス会
赤ちゃんの笑顔で心満たされる

泉大津市　助川和美

了承の声小さいが五寸釘
天罰が当るはずだと納得し
簡単に返答だして後悔す
裏をかきその裏かかれ悔いのこる

門真市　矢阪英雄

歳重ね趣味を楽しむ人生を
生臭い人間模様描いている
前頭葉柳で鍛えて驚ろかそ
磨いても拭い切れない胸の錆

岸和田市　森元ふみよ

ライバルがいるから闘志湧いてくる
くじ引けばいつも当番大当り
ゆっくりと学べる時はやる気なし
たぬき寝の耳がダンボで噂聞き

岸和田市　中岡香代

お似合いとほめたたえてる試着室
川底の石を磨いている野心
錆びついた右脳を磨く辞書を繰る
外は雪昔話のいろり端

岸和田市　林力子

驚いたままではすまぬ大津波
花よりは団子で月はもっと好き
言い出し兵衛後へは引かぬど根性
振り向けど振り向けど我が影法師

河内長野市　大西文次

恵比寿顔ジィジと呼ばれる孫達に
ぼけ防止孫のドリルに挑戦す
年いくとおしゃれしなさい言う娘
雛壇の前ちょこんと座る孫二人

河内長野市　内海綾乃

仏壇の御下がりだったチョコレート
様子して歩くよってに蹴つまずく
言い負けて悔いが渦巻く北枕
息弾むゴールへ容赦ないマイク

堺市　荻野像山

予定表書いた事すら忘れてる
日本語のピント外れに慣れてきた
夜の道足音ついて来る怖さ
二月堂騒がしかった沓の音

高槻市　安田忠子

嘘っぽい美談に世間涙する
地震津波天を仰いで嘆くのみ
来し方の苦楽しのばすクラス会
若きころ打てば響くの人でした

高槻市　大崎侑子

扱いの小さな記事にある珠玉
恋猫の静かになって桃の花
初対面でも血縁という不思議
顔見せぬネットの奥の陥し穴

豊中市　源田啓生

よく喋る鸚鵡が一羽おるす番
女よりたおやかに舞う玉三郎
防寒着よいのがあって冬楽し
四の五のと言いわけ哀しやめてほし

富田林市　古田千華

春一番梅の香さらって通り過ぎ
生かされて生きて七十路へ燃える初春
今年また魔法効いたかチョコがくる
歳ですねゆるんだ涙腺戻らない

寝屋川市　岡本勲

落し所　玉虫色の妥協案
俺の人生常に付き添う影ひとつ
道ひとつ出来て表情変えた街
遍路道巡礼の鈴春をよぶ

羽曳野市　永田章司

梅一輪春の余寒しみじみと
大阪に春の訪れ大相撲
大相撲外人ばかり国技です
縁側で春の月見るほたる族

羽曳野市　仲谷真一

幼子に教わりうたう雛まつり
縄のれん喋る男の本音聞く
赤い糸人間模様もつれ合う
咲き初める夫の残した八重椿

東大阪市　米田水昇

オープン戦春到来と賑賑し
道草で命洗濯しています
その内に効くと漢方信じ切る
さあ春だ小泉さんの真価問う

東大阪市　今岡貞人

木簡のメモが伝えた貢物
木簡のメモ食文化垣間見る
メモよりは便利なメール現代子
うっかりのメモが証拠で裁かれる

枚方市　小川良吉

もう最後梅見に母のひとりごと
若く見られて訂正しないまだおんな
約束に目覚まし時計二つ置く
誕生日一泊二日ドック入り

藤井寺市　吉田喜代子

遺影にはこの写真でと決めてある
五体皆老いてはいるが気は若い
思い残すことが無いとは羨まし
いい人になろう地獄は厭だから

藤井寺市　鈴木いさお

驚いたよくよく聞けば日本語だ
乗り過ごす化粧する娘に気を取られ
緩んだまま錆びつきそうでネジを巻く
長電話今夜もぐっすり眠れそう

藤井寺市　俣野登志子

新札とにせ札技術（わざ）のせめぎ合い
俺おれとだます身内のない孤独
クエ鍋を囲むぜいたく雪深深
顔顔顔　顔顔顔顔百面相

箕面市　寺井柳童

春ですよ忘れず鼻へ来た花粉
花咲くまではとても静かな桜道
子供の名もルビ付けてほし近頃は
子の料理おいしいわねと小さな嘘

八尾市　中島春江

角は丸く筋は細めに繋いどく
紅はもう買わぬと決めて見る鏡
色っぽい襟筋貂が独りじめ
靴の紐結び直して発つ門出

八尾市　赤木妙子

小山ほど大根おろしサンマ焼く
この辺がしお時母の助け舟
とり年で夜明けのラッパ吹く余生
対向車気合いに負けた目が譲る

八尾市　平川幸枝

春うららスーツケースが旅さそう
着れる服ないけどタンス満杯だ
何気ない自由　動作に日日感謝
病みて今家族の温み身にしみる

大阪府　畑中節子

猫の恋大きなくさめ一寸止み
クイズ出す歳は娘になり母になり
何と無くひらがなにする春の文
雑草が大地捉える力瘤

大阪府　高木道子

酔うほどに笑い上戸も困りもの
暖冬に冬物しまい春を売る
八十路越え日日喜びに手を合わす
年ふりて頭に角が生えてきた

大阪府　若月祐作

失敗の数だけ強くなる涙
明日と言う未知があるから生きられる
はいと言う返事うきうきうれしい日
効かないと次々替わる風邪薬

神戸市　山田婦美子

奥にある玉子が減っていく売り場
グラウンドヘヤングのパワー吸いに行く
椅子席に替えてお寺に若者も
あの人の裏のマナーを見てしまう

神戸市　木村忠義

母さんが居ると明るくなる茶の間
多国籍の味覚に慣れて旬がない
副作用という不意打ちは小さく書き
何色に今日は化けるか風見鶏

尼崎市　河津正治

公園の椿咲いてる気品あり
沈丁花ここに居ますと香りまく
紫陽花のいのちの新芽赤茶色
折鶴草寒中青くやっと春

尼崎市　古川正子

朝掘りと言う筍の土も買い
片減りになってようやく靴に慣れ
百圓の寄進の石碑肩が欠け
炊飯器水は多い目老夫婦

三田市　阪本藤朗

検査前三日間だけ酒を断ち
カルチャーから帰った妻にお茶を入れ
気が付けばライバルばかり趣味の会
百均で買った日記がまだ続く

三田市　福田好文

今日済ます明日の保証を誰がする
登山靴洗い次回の山を待つ
腹が立つ　それはあんさんまだ若い
バギー押す若妻神に見えてくる

宝塚市　丸山孔一

ただ一つくれた義理チョコ妻だった
解禁日夜の食事にくぎ煮くる
老いるほど妻の思いのままに生き
満たされてうとりうとりの日向ぼこ

兵庫県　安達厚

安楽往生誰しも願う吉田寺
春を告ぐ欄干走るおたいまつ
自転車借り奈良町巡り小半日
彩の冴え日延びの長さ嬉しがり

兵庫県　岩本美緒子

兵庫県　永井かほる

思い出のふき味噌作り先ず亡父
希望したひとりになれてなげく友
たえてこそやがて花咲く事を知り
人は無理毛糸もつれはすぐ解ける

生駒市　小西稔

人はみな笑顔の裏に悩みあり
人里を離れ味わう春の息
人々は食足りてこそ笑い顔
捨てるゴミ中には光る宝あり

和歌山市　坂部かずみ

おどり場で一息ついて春を見る
北風に梅一輪の芸術家
切り抜きがたまり事件が山積みに
ケセラセラ自己責任の煎じ詰め

和歌山県　木村徑子

さわやかな朝日に五感立ち上げる
私のメールも翔けるマイクロ波
ソプラノが出なくて意見届かない
内緒話　私の口は要注意

鳥取市　岡田信恵

春の彩つばき一輪夢くれる
一筋の専門馬鹿の過去の道
一歳児ごはんそろそろ仲間入り
バランスを取るもどかしい歳になる

鳥取市　河田のり代

粗大ゴミ一国一城持てあまし
旅に出る妻の留守の間天下取る
問うて行く一歩を迷う一人旅
強がりも旅に出て知る頼りなさ

鳥取市　谷岡清子

にこにこと悪魔もよせぬ笑い顔
愚痴を呑みハイハイ節でたそがれる
舌の先酸いも甘いも知りつくす
青い鳥来ぬまま季節すぎていく

鳥取市　横田春名

たびたびの愚痴にやさしい言葉添え
喜寿となり生かされている幸気付く
老いの胸句作続けて掃除する
五十年ずっと夫婦よ不思議だわ

鳥取市　近藤秋星

コハクチョウ北へ帰るやまた来いよ
悪い事は出来ない巣立つ日の涙
草木みなダンス緑の旋律で
春の野に出ればむんむん春匂う

倉吉市　前田喜美子

新生児ピンクの肌で泣く元気
一年生豪華な机与えられ
伐採に山は悲しい顔をする
引出ものカタログで来るおかしな世

門限を破り帰宅のしのび足
長雨に花の見ごろが過ぎちゃった
急所突かれしどろもどろで舌もつれ
不景気に物があふれて摩訶不思議

倉吉市　洒井芙美子

ホリエモン　ドアを開ければ時の人
合併で市となったけど字田舎
春の日を受けて白鳥北帰行
禁煙がきびしくなって軒蛍

境港市　中井虎尾

亡き母のブラウス羽おる春を待つ
ダイヤにも敗けぬ心をプレゼント
うず潮に巻き込まれゆく我が余生
毛糸巻く亡母の指先など想う

境港市　遠藤那珂子

薄氷踏んで慣れないサラリーマン
お互いに長生きしようクラス会
生と死ととなり合わせの運命線
異議なしと言った言葉に背かれる

米子市　池尾保子

刃向ってみたが父には歯がたたぬ
トランプは人の運命を知っている
新聞のにっこり記事に癒される
燃える火へ怒り憎しみ焼き捨てる

鳥取県　岡村孝明

何事もいわく因縁わけがある
顔見知り目を輝かす乗り合わせ
表向き男は主役背押され
旬でない花も花屋で目をひかれ

鳥取県　毎田信雄

言い勝って小骨がささる喉仏
いい知らせ寝耳に水のうれしい日
慰めの言葉もつまり酒を注ぐ
傷心に慰めもらう膝の猫

出雲市　川島和歌子

とんど焼き酉の書初め雲に舞う
世間の声に耳をすませてかたつむり
園児の声に元気貰った雪の朝
絵手紙のいちごに引かれ買う絵の具

出雲市　加藤スズコ

彼岸です熱燗すきな生きぼとけ
今少し同じ歩幅で歩みたい
春を知る雪にも負けぬ蕗の薹
医者通い二人で行ける　よしとする

雲南市　福間博利

ときめいた日もあり箱のハイヒール
人並みに生きて居ります物忘れ
付合いと言っていそいそ嬉しそう
後ろ向き花一輪が拗ねて咲き

雲南市　菅田かつ子

悉なく演じて今日の幕を閉じ
岡山県　矢谷冨士野

買う方が安い野菜の種を播く
浮きしずみ人生だった日向ぼこ
百までは生きるつもりの米を研ぐ
府中市　岩本雅代

菜の花が咲いて私も春うらら
挙式の日近付く胸が熱くなる
介護つかれ焼いも食べて深呼吸
ストレスを癒してくれるチワワちゃん
東かがわ市　向山治延

花に舞う蝶も道づれ春遍路
母の日も母の料理で食べて居る
鯉のぼり川面の上で勢揃い
のんびりと散歩が出来る過疎の道
松山市　山之内八重美

やんわりと妻の助言は急所つく
手ぶらでは通れぬ義理という重み
応援が寒さけちらす外野席
居眠りを見抜かれていた間の悪さ
北九州市　岡田幸生

晩酌の夫の顔が凪いでくる
腹立ちと安堵で妻のいびき聞く
補助席で両手に花のバスツアー
いい趣味と言われて送る川柳誌
シドニー　三谷たん吉

頼もしい大物逮捕さあ次だ
大物で逮捕されぬはばれぬだけ
わめかずに耐え忍ぶのも人の道
自作自演フジ最高の視聴率
メルボルン　藤原ポン吉

喧嘩では手段えらばず負けしらず
そのたびに迷惑かける恥しらず
世話になりそれも分からず恩しらず
バチあたり急に疼いた親不知

特別常任理事会

日　時　六月七日（火）十三時から
アウィーナ大阪　四階　マーガレット

案　件　一、同人・誌友の現状について
二、その他

○参与以上の方はご出席下さい

主幹　河内天笑
理事長　板尾岳人

川柳塔のぞみ　6月句会

日　時　6月28日（火）13時から

場　所　人形町区民館
（地下鉄人形町駅A1出口5分）

宿　題　「じゃがいも」「半分」「ユニーク」各題2句
「自由吟」1句　**欠席投句**　**6月25日**必着

〒193－0832
八王子市散田町2－31－3　播本充子　宛

愛染帖

波多野五楽庵選

人恋しうすい絆を身にまとい　西宮市　門谷たず子
生きるとは死ぬとは飯が炊けている　弘前市　斉藤　劦
おじぎ草だからストレスあるだろう
カットレタスの迷路で自分探しする　松江市　川本　畔
いいことがありそう紙を裏返す
どこか破けてやっと優しい顔になる　和歌山市　木本　朱夏
緑食べつくして地球温暖化
円周率どこまで続く不眠症　和歌山県　三宅　保州
散歩なのにまた近道をしてしまう
葬式が見えまへんがな棺の中　弘前市　高橋　岳水
北風の絶唱を聞く雪達磨
老いしかな人の名前が出て来ない

モノクロの影が伸びたり縮んだり　弘前市　福士　慕情
温かい風は音符にのってくる
控えめに居るからそっとして置いて　和歌山市　桜井　千秀
残り灯が溶けてこころを焼き尽くす
探しものこんなに時が過ぎている　西宮市　牧渕富喜子
如月やくぐもり声の自然治癒
毎日がドラマ新聞読んで伏せ　米子市　林　瑞枝
落丁のページを転げ出た喜劇　尼崎市　長浜　美籠
オブラートに包んだ秘密めく時間
ガラス細工の橋を渡った以後の雨　富田林市　池　森子
瞑想曲ロゼのグラスがよく光る　姫路市　古川　奮水
しんにゅうをかけたいほどの几帳面　和歌山市　武本　碧
いい人と言われ仮面を外せない　奈良市　矢野　良一
私を透かす花屋のウィンドウ　米子市　青戸　田鶴
ストレスが半解凍のままに春　八尾市　生嶋ますみ
聞く耳と忘れる耳の鬼ごっこ　和歌山市　楠見　章子
アトリエで反目しあう果実たち　八王子市　播本　充子

手のひらに握ったはずの風が無い　大洲市　中居　善信
天に詫び地に詫び父の七回忌　鳥取市　武田　帆雀
雪月花ご意見番の妻がいる　今治市　塩路よしみ
座りたく無い椅子ばかり寄ってくる　富田林市　大橋　鐘造
岬まで行けば答えが出るだろう　大阪市　神夏磯典子
会者定離みんな何処へ行ったやら　池田市　北出　北朗
老いし母居ませば夜の爪切らず　安来市　原　煩悩児
子よ孫よ俺を跨いでゆくがいい　尼崎市　田辺　鹿太
道草を食わぬと生きていけません　弘前市　髙瀬　霜石
明日こそ明日こそはと樹に登る　竹原市　正畑　半覚
縁あってこの世二人で生き抜こう　尼崎市　春城武庫坊
駆け足で生年月日が追って来る　八尾市　井尻　民
粗衣粗食ゆるりと人間やってます　大和郡山市　坊農　柳弘
熟年の枕ならべている砂漠　和歌山市　古久保和子
とりあえずやってみましょう僕の主義　大阪市　前　たもつ

琴線に触れたか涙溢れ出す　河内長野市　坂上　淳司
淋しさがくる頃ちがう花が咲く　大和高田市　鍛原　千里
粗大ゴミ僕も片付く時期が来た　熊本市　髙野　宵草
一目惚れした恋人でこの夫婦　岡山市　井上柳五郎
夢を盛る皿丁寧に拭いておく　東京都　清原　悦子
練り過ぎた嘘で自分を見失う　茨木市　藤井　正雄
乳母車がある軒下の午後三時　鳥取市　上田　俊路
風の音　賢治になって聞いている　吹田市　岩屋　美明
鍵穴の向こうも雨が降っている　寝屋川市　籠島　恵子
拝観料詫びてるような仏の目　奈良市　乾　春雄
春彼岸雪のはなしの香を焚く　弘前市　相馬　銀波
黙々とメールに励む四畳半　黒石市　相馬　一花
風邪をひくただちんまりと冬ごもり　弘前市　宮崎ヒサ子
目減りする命に気づかない鏡　京都市　都倉　求芽
裏の裏　さらにその裏読む処世　海南市　谷口　義男

つまずいてやっと身のほど知らされる　八尾市　吉村　一風
練り直す策に溺れていませんか　美祢市　安平次弘道
僕が蝶になればあの娘は風になる　鳥取市　近藤　秋星
燃え切らぬ愚痴がくすぶる火消壺　鳥取市　岸本　宏章
過ちを過去に残して生きている　弘前市　岡本　花匠
真実を告げて火中の栗拾う　海南市　堂上　泰女
回れ右前へ進めがあってもよい　富田林市　古田　千華
逆立ちをして人間度確かめる　大阪市　岩崎　公誠
苦楽の涙夫婦茶碗に滲みて渋　泉佐野市　備後三代子
泣かされた酒を供える一年忌　和歌山県　中後　清史
星になりました友達のともだち　藤井寺市　太田扶美代
葉が散って年輪一つ書き残す　和歌山県　村中　悦男
真夜中のベルに心臓つかまれる　松原市　玉置　重人
癌擊の靴に涙のアスリート　京都府　丹後屋　肇
あれこれの乱読僕が定まらぬ　唐津市　井上　勝視

老春賛歌駄馬にも春に酔う一句　唐津市　久保　正剣
遠雪崩　大地いよいよ春にする　日立市　加藤　権悟
容姿端麗　声も綺麗ですみません　和歌山市　田中　みね
別々の地図を握っている夫婦　寝屋川市　江口　度
横並び一歩抜け出す四股を踏む　松江市　三島　淞丘
妻に棹まかせ彼岸に着いた舟　唐津市　仁部　四郎
ホイッスル鬼を集めてみたくなる　寝屋川市　森　茜
反故にする勇気あの時あったなら　西宮市　片山　忠
ライバルの会釈にうっかり気を許す　羽曳野市　吉川　寿美
碁敵の方でもワシが憎かろう　藤井寺市　鈴木いさお
耳鳴りも音の世界にいる証　三田市　阪本　藤朗
収入に応じた穴を掘っている　倉吉市　野口　節子
正念場当たって砕けるしかないか　橿原市　安土　理恵
ため息が入り風船ゆがみ出す　藤井寺市　鴨谷瑠美子
風花はある日画像で見たっきり　尼崎市　春城　年代

躓いた時から予定狂いだす　和歌山市　玉置　当代
錆ついて別れられぬと諦める　唐津市　坂本　蜂朗
鳥獣戯画独りよがりに甘んじる　出雲市　園山多賀子
日が長くなると淋しさ紛れだす　鳥取市　夏目　一粋
もう一度表も裏も読んでみる　出雲市　石倉美佐子
孫がいて子がいて門扉錆びてくる　富田林市　中井　アキ
貝になる心が語りだすまでは　岸和田市　雪本　珠子
冬の星みたいに勘を研ぎすます　西予市　黒田　茂代
こうなった訳を職歴から探り　今治市　渡邊伊津志
じらされて出番待ってる春の服　鳥取市　岸本　孝子
満腹に催眠術をかけられる　三田市　石原　歳子
あの頃はとはもう言わぬ事にする　大阪市　星野きらり
抜け道を覚え男のかくれんぼ　大阪市　小泉ひさ乃
無為徒食して年金の不足言う　鳥取市　土橋　螢
ファックスに訃報まさかの文字に泣く　和歌山市　松尾　和香

虫の知らせか香典袋買って来た　河内長野市　植村　喜代
尻餅をまた搗いちゃったうふふだな　鳥取市　土橋はるお
しめやかなシーンに合わぬ濃いルージュ　松江市　安食　友子
意馬心猿　襟を正して桜見る　豊中市　水野　黒兎
独り行く黄泉路を照らす灯が欲しい　唐津市　市丸　晴翠
ポイントを溶かすヤカンのしたたかさ　弘前市　櫻庭　順風
アーモンドチョコ割るのも味のうちだった　大阪市　井丸　昌紀
オンオフで捌ききれない道にいる　四條畷市　吉岡　修
競わずにここまでこれたじゃりの道　境港市　遠藤那珂子
虹彩炎　名ほど嬉しくない眼病　和歌山市　福本　英子
一歩ひくだけで見えないものも見え　神戸市　山田婦美子
生き様の見本さらりと散る桜　高槻市　乙倉　武史
モデルハウス父がトボトボついてくる　和歌山市　坂部かずみ
飾らずに綺麗に生きた母だった　大阪市　小谷　集一
離乳食小鳥のように練ってやる　唐津市　山口　高明

たおやかに女を舞うた日の風よ　香芝市　大内　朝子
風の日は風の言い分聞いてやる　枚方市　海老池　洋
わたくしの鱗はきっとピンク色　藤井寺市　高田美代子
セピア色の手紙大事にとってある　和歌山県　森下　順子
ミニサイズの雛を飾って一人住む　倉敷市　撰　喜子
日めくりの折り目に妻のはかりごと　羽曳野市　森下　一知
結婚て何なんだろう渋茶飲む　箕面市　出口セツ子
肝機能働くうちは飲んでいる　鳥取市　春木圭一郎
申告のすんなり終わりそよぐ風　富田林市　片岡智恵子
遊びではないと言われて怖くなる　堺　市　奥　時雄
長居して猫と仲良くなりました　羽曳野市　洒井　一壺
居眠りの達人もいる浮世なり　鳥取県　谷口　次男
良心は売らぬと男席を蹴る　八尾市　西川　義明
元校長　楷書のような人格者　大阪市　板東　倫子
十階に花園咲かすプランター　大阪府　籾山　隆盛

誹風柳多留二四篇研究 78

橋本秀信・粕谷長生
伊吹和男・大野秀二
小栗清吾・山田昭夫
清博美・佐藤要人

618 **詩でハくわん音碁を出せば文殊也** 川長

橋本 吉備真備＝奈良時代の学者、政治家。霊亀二年(七一七)二三歳のとき留学生として入唐。唐では儒学のほか、天文学や兵学、音楽を学び、天平七年(七三五)帰国。真備は入唐のとき、諸道・諸芸に通じていたので、唐人はこれを妬んで、様々な策略を弄して殺そうとした逸話がある。そのうちの、①野馬台の詩の解読と②碁の勝負に関する逸話を詠んだ句。

①東海姫国から始まる一二〇字のパズル詩を出されたとき、長谷観音を念すると、天井から蜘蛛が下りてきて、その糸をたどって解読することができた。

②玄宗皇帝の前で、碁の名人玄東と碁を打ち、真備は白を取って一目の勝ちとなるところ、玄東の妻が白石一個を盗んで呑み下したが、知らぬ顔で許し、命が助かるという話。碁では文殊菩薩は出てこないが、彼の智謀を「文殊の知恵」に譬えたか。ちなみに俗説では、真備が日本に碁を伝えたことになっている。

碁にハ鬼四角な道ハ蜘が下り　宝11義1
長谷点ッてよんたを他人知らぬなり　二一6

黒ク白クに唐と日本の眼を配り　四八10

清 賛。

佐藤 賛。真備は一人でも文殊の知恵。

619 **右左リ水と艸とで名が高し** 和国

橋本 上野寛永寺鐘楼の高欄の龍の彫刻は、左甚五郎の作。これが夜な夜な不忍の池へ水を飲みに下りたという話。また浅草寺の本堂にある狩野元信作の絵馬の馬が夜ごとに近くの作物を荒らしたという二つの俗説を詠んだもの。右は左利きに対して（特に記述はないが）狩野元信は右利きとしたものと思われる。ちなみにこの絵馬に、左甚五郎が綱を書き添えたらピタリとやんだというおまけがある。

浅草てくへハ上野て水をのみ　三八35
呑喰て龍と馬とハ名かたかし　三六5
呑喰で大工と画師ハ名が高し　三四12

小栗 賛。「右」が少々苦しいが、そういうことか。

清 該当するものがわからぬ。礎稿でよいのかも知れぬがチト苦しいような気もする。「左右」を入れて詠んだ句が一二句あるが、主題句と同様の意の句はないようだ。

佐藤 礎稿賛。

620 **九躰そろふと一ト**やしき魚鳥留メ　洗路

橋本 九体は九体仏・九品仏で、極楽浄土になぞらえて作られた九体の阿弥陀仏の像。九品は、九種に分けた等級で、上中下の三を、さらに上中下に三分（上品上生～下品下生）

したもの。魚鳥留めは、①魚や鳥の捕獲を禁止すること。（以上「日国」）

今（一九九九年）話題の九品仏浄真寺（世田谷区）の縁起の句と解する。『川柳江戸名所図会』（国解鑑）の「世田谷区」に「吉良家が室町時代に築造したもので、後年、大平出羽守が居住した館跡を、延宝六年（一六七八）珂碩上人が開基したと伝えられる」（北出公則氏）とある。

また『江戸名所図会』には、中品堂、上品堂、下品堂にある各三体の阿弥陀像を記し、「以上九品の阿弥陀如来九体を安置す。（中略）何れも開山珂碩上人の彫造にして（略）寛文四年より同七年に至り、（略）つひに九品の弥陀像全く成就する事を得たり、この本尊、初め霊岸寺の地にありしが、洪波の為に破らる。後延宝六年戊午こと〴〵くこの地に移さるゝとなり」と記してある。

浄真寺にも確かめたところ、間違いはなかった。

句意は、九品仏が完成して、寺を開基するにあたり、大名屋敷を一つつぶして、殺生禁断の霊地にしたというのであるまいか。

古今武総の建立ハ九品仏　二六13
御建立五本開て九品出来　六九8
指折の霊地ハ九品浄土なり　七八31

伊吹　賛。細川刃傷事件かと思ったりもしたが。

小栗　賛。伊吹兄ご指摘の如く、「九曜星紋」「九曜巴紋」もあり、

名月だのに一ト やしき魚鳥どめ　天元宮2

という誠に似た構造の類句もあって、細川が匂うが、「九躰」の説明が難しい。九品仏は奥沢城址なので「屋敷」というと違和感がないではないが、他に解釈しようがないか。

清　礎稿でよいでしょう。細川は関係なし。

佐藤　礎稿賛。

621　**ひつかりと鳥かげのさす雪の下**　門柳

橋本　ひっかりは、（多く「と」を伴って用いる）光のひらめき輝くさまを表す語。鳥影さすは鳥の影が障子などに映る。来客のある前兆という。（以上「日国」）

雪の下は鎌倉の地名。鶴岡八幡宮の所在地。類句などから、源頼朝が鶴岡八幡宮の社頭で、放生会として、鶴千羽の脚に金色の短冊を付けて放ったという伝説に拠った句。その当日、八幡宮の上空は、鳥の影が金ピカにひらめいただろうとの想像句。この句は鳥影そのもので、「鳥影させば人が来る」のことわざは関係なさそう。しいてこじつければ、それを見物する人が多く集まったということになる。

きつい事天ひっかりの放生会　二七17
うら、かに稲妻のする鶴ヶ岡　四一11
千羽舞ふ時ハ黄色に日か当り　五八11

清・佐藤　賛。

622　**めのさめた人が名哥を丸くする**　窓梅

橋本　柿本人麿の歌とされる、当時の目覚ましの呪い歌

ほのぼのと明石の浦の朝霧に
島隠れ行く舟をしぞ思ふ

の句。

この歌によって首尾よく起きられた人は、万事順調で「丸く納まる」だろうと、人麿＝人丸に懸けて詠んだ句。

人丸を枕時計ニ奥てする　二九27
十四文字あしたに用にとって置キ　安六礼5
人丸をたのんだ事を下女わすれ　玉24

粕谷　寝る前に上句を読んで、翌朝起きた時残りの下句を読むことを「丸くする」といっている。

清　同。歌を完成させる。

佐藤　同。

女性コーナー

前香の雫

政岡日枝子選

ありがとうだけを葉書の真ん中に　藤井寺市　高田美代子
吸っただけ吐いてやましいことはない　松江市　川本　畔
ここからはかばい合うよりしかたない　米子市　青戸　田鶴
浄土とも思うおだやか花の下　香芝市　大内　朝子
それからを尋ねてくれる人がいる　富田林市　中井　アキ
ランドセル芽ばえるものをみんな詰め　米子市　白根　ふみ
自意識がときどき留守になるらしい　堺　市　山本　半銭
背伸びせず時にはポキッと折れてみる　大和高田市　鍛原　千里
背伸びとは思いたくない足の裏　羽曳野市　吉川　寿美
銀色の花芽は亡母の独り言　藤井寺市　太田扶美代
この町を長い月日が馴染ませる　尼崎市　春城　年代
辛夷咲く白いこころになっている　西宮市　牧渕富喜子
風の音聞き洩らさない丸い石　八王子市　播本　充子
生きるとやジグソーパズル埋めている　尼崎市　長浜　美籠
愛されていたなと思う蕎麦まくら　西宮市　門谷たず子
方円に従い水は演技する　今治市　塩路よしみ
森の中深い情けのつぼがある　倉吉市　野口　節子
当然の物差しのびてゆく怖さ　米子市　野坂　なみ
言わないでいると袋がパンクする　東かがわ市　池内かおり

疑問符のうふふに心乱れそう　鳥取市　福西　茶子
釘ひとつ抜いた穴から春の風　和歌山市　楠見　章子
さわやかな風に思わず深呼吸　米子市　中井　ゆき
温暖化もったいないが復活す　大阪市　古今堂蕉子
勿体ないそんな言葉が懐かしい　弘前市　宮崎ヒサ子
山女から鱒に旅には出すものだ　和歌山市　福本　英子
八掛けで良いの余生は二割引き　三田市　久保田千代
杖投げて母が突然走り出す　倉吉市　米田　幸子
飾り捨てると本当の愛が見えてくる　大洲市　花岡　順子
少しずつ苦味をまぜて生きている　神戸市　山田婦美子
つい釣られ話に乗って五十年　岡山県　福原　悦子
まさかとは思うが妻の部屋が空　東大阪市　北村　賢子
奥の手の逃げるが勝ちの足自慢　倉敷市　撰　喜子
ギシギシと隣近所の軋む音　和歌山市　森下　順子
まっすぐな意見を斜めから叩き　倉敷市　小野　克枝
脇役になって昨日と同じ舞　藤井寺市　鴨谷瑠美子
続編はこれから欲の芽が育つ　大阪市　三浦千津子
子供より本気でこどもニュース見る　三田市　石原　歳子
目覚し時計　中途半端な五月病　八尾市　髙杉　千歩
はんなりと生命の彩に春の画布　鳥取市　奥谷　彩子
逆上りとうとう出来ず六十路来る　岸和田市　土橋　房枝
よう来たと羅漢のお手ののびた寺　八尾市　宮崎シマ子
原点に戻ると何も怖くない　倉吉市　山中　康子
手の平の深い線路を走る貨車　米子市　林　瑞枝
人形になってついてくパスポート　兵庫県　中山千代子

生業に合うた暮らしを子にみせる　鳥取県　佐伯　やえ
不確かな未来やっぱり子は産めぬ　高知市　小川てるみ
覚悟した脱皮自分に辿り着く　大阪市　神夏磯典子
蝶々になれぬわたしは蛾でしょうか　東京都　岸野あやめ
冬籠りひとり遊びがうまくなる　和歌山市　坂部かずみ
抱き締めて良い子に育てられている　寝屋川市　平松かすみ
満天の星の一つが西へ行く　熊本県　岩切　康子
もうここまで来たのよ歳は忘れよう　シドニー　坂上のり子
りんご剥き二人芝居の間を埋める　和歌山市　榎原　公子
片袖の濡れがすべてを物語る　岡山県　山本　玉恵
矢印になっているのも疲れるな　寝屋川市　籠島　恵子
あいまいに笑って別れはて誰方　豊中市　安藤寿美子
バス旅行お土産買いに行くように　富田林市　片岡智恵子
老いてこそ女心を遊ばせる　東大阪市　中岡　妙
切れそうな縁をすくって千鳥掛け　橿原市　安土　理恵
人間の弱さクイズが弄ぶ　寝屋川市　坂上　高栄
いい夢があった若さをなつかしむ　大阪市　川久保睦子
花言葉に会うかも知れぬ回り道　熊本市　永田　俊子
長びいた風邪で三キロやせました　米子市　小塩智加恵
水もれを鬼の首取ったよな注意　大阪市　松尾柳右子
茶の間から視野を広げる旅のルポ　鳥取市　永原　昌鼓
別腹がたくさんあって元気です　神戸市　田中　章子
水仙を抱えんばかり活けて春　西宮市　緒方美津子
レンギョウに寄り添い咲いた雪柳　富田林市　古田　千華
巡る四季一番好きな花の春　鳥取市　岸本　孝子

ブラウスもうきうきしてる春の風　境港市　遠藤那珂子
開きゆく花の力は素晴らしい　東大阪市　佐伯　光枝
葉桜になっても想う花の時　大阪府　桑田ゆきの
散歩する頬撫でてゆく春の風　和歌山市　玉置　当代
この辺で妥協しようか風薫る　藤井寺市　若松　雅枝
盆ざるに盛ればこぼれる初夏の色　池田市　栗田　久子
いつも来る人が来ないと淋しいな　大阪府　小栢こずえ
御仏飯あげて一日動き出す　米子市　木村　春枝
今になり落とした恋を探してる　岸和田市　雪本　珠子
病む友に精一杯の笑み贈る　大阪市　西川　更紗
胸騒ぎいつもと違うことば尻　大阪市　大川　桃花
値下げした服に手が出る足が出る　河内長野市　植村　喜代
よいといえば百花繚乱お酢売り場　大阪市　渡部さと美
モデルルームローン忘れて夢見せる　横浜市　長島亜希子
趣味の会働くだけの母偲ぶ　尼崎市　小池　幸子
老父がいて家のにらみがきいている　米子市　門脇　晶子

美代子さんの句―人間を取り囲む無数のありがとうにある人生劇場。ハガキの真ん中にという表現にあるひたむきさ、優しさ、感謝の心が強く打ち出されている見事な作品である。と同時に有難うのひと言が言えぬ人々への問いかけの句でもあろう。**畔さんの句**―断定的に言い切ったところに作者の思いの広がりがあり、自分にも他人にも善根功徳を言いきかす作者の人柄がうかがえる。特有の個性を感じさせる句に仕上がっている。**田鶴さんの句**―未来のための現在を流れに逆らわず振りかえって詠む作者の心情がやさしく浮かんでくる。ふりかえりながら、他の一切のものを省略してあるところにまた連想が広がる。**朝子さんの句**―実感が湧いて出て句は生まれるものだとしたら、まさに作者の耳に、眼に浄土と思える何かが流れたにちがいない。穏やかな、幻想的な作者の詩眼が羨ましい。

葉

山崎　君子選

葉ぼたんの姿乱れたお水取り　　とし子
落葉焼き芋の匂いに輪が出来る　　志洋
葉隠れの恋里山をなつかしむ　　隆盛
とっておきの紅葉はさんだ愛読書　　(花)順子
間引きした葉にも言い分あるだろう　　雄々
木の葉よりもれる朝日で身を潔め　　稔
若葉萌え生命漲る音がする　　雅枝
これ葉っぱ一万円に化けてみろ　　(堀)正和
病葉が流れながれて行く別れ　　千里
華やかに歩いたこともある枯葉　　重人
落葉踏み六根清浄熊野ゆく　　郁子
子が四十不思議に思う花は葉に　　美津子
柿若葉この娘も近く母になる　　寿美
五十年前は若葉でいたわたし　　婦美子
薬だよ残さないでとパセリさん　　深雪
土の恩土に返して散る落ち葉　　強一
地に還る木の葉は風に舞い眠る　　武庫坊
駈け抜ける緑のオブジェ眩しくて　　孝一
相続税に泣く草笛の記憶　　充子
葉芽花芽個性を秘めたランドセル　　哲男
卒業へ青葉が歌う応援歌　　俊子
明日葉へ夢を托して万歩計　　(渡)富子

塀越しの落葉に簿話し込む　　勝巳
どの芽にも葉がでて花が咲く力　　螢
葉桜の下で同窓会をする　　霜石
サンドバッグを叩くひたむきな若葉　　(井)富子
葉桜の誘い眩しい鯉のぼり　　柳弘
無駄なのは一枚もない葉のいのち　　可住
逆光の撫葉脈に噎せ返る　　順風
古い葉が目立たぬように散ってゆく　　たもつ
柿若葉透ける緑にある精気　　あやめ
若葉マーク犬だけ乗ってくれた頃　　正雄
噂にはちゃんと根も葉も付いていた　　宏章
フレディの葉っぱあれからどうしたの　　ミツ子
桐一葉改革路線にもかげり　　恭昌
葉っぱにはっきりとある裏表　　(志)千代
孵化近し葉裏の日々が活気づく　　俶子

放す

門脇　晶子選

佳

季節の葉一枚敷いた旬の味　　あずき
踏み入れば森に若葉の息づかい　　淞丘
サボテンの刺はやっぱり葉っぱだろ　　玄也
葉桜になりさまになるランドセル　　克治
葉芽花芽びっくりさせた春の雪　　善信

人

捨てられた種に双葉のこころ意気　　一知

地

葉の落ちた巨木堂々歴史秘め　　獏沓

天

葉ざくらもまたよし逢いにゆくシューズ　　門谷たず子

軸

朝顔も南瓜も双葉絵手紙に　　泰女

放たれた都会に見えぬ蜘蛛の糸　　千華
放任の親子にもきっとある絆　　一粋
魂を放ちたくなる芽吹き山　　孝一
お父さん解放されて戸惑いを　　高明
空の果て飛んでゆきたい紙風船　　獏沓
放映で見るふる里はお茶の郷　　武史
ケイタイを持たせ野放しさす夫　　照子
託び合って互いに誤解とき放す　　隆盛
墨の衣山野に放つ山頭火　　清史
放たれた自由へ義務がつき纏う　　(南)正和
馬車馬の頃懐かしい放れ駒　　好文
突き放す時が分からず娘は三十路　　強一
千羽鶴イラクの空へ放したい　　可住
放ち飼いの卵いただく里の贅　　銀波
放牧をされて牛馬は群れになる　　(岩)康子
感覚の相違それぞれ言い放す　　妻子
冬籠りの小鳥を放す春の空　　遠野
人質解放動いた金は知らされず　　勝巳
放し飼い割れば卵が盛り上がる　　半覚
人間だけが地球破壊しています　　充子
放流の稚魚に慈愛のありったけ　　悦男
放たれて生命をかける伝書鳩

放たれて無力を悟る都市砂漠　徳三
放し飼いされる人生いきいきと　たん吉
見放した訳じゃない手が回らない　あやめ
手放した野心がひとり跳び歩く　公誠
成人の自覚つがえて矢を放す　英旺
地獄から出てきた熊を野に放す　螢
神様は地球見放しそうである　次男
放し飼い遠くへ翔べぬ老妻と棲む　勝視
ブーメラン家路忘れて戻らない　ヒサ子
人許す尻尾を放すときもある　雄々
手放して舞う風船へみな笑顔　淞丘
従順なドミノを試す矢を放す　花匠
放心という安らぎの認知症　俊子
絵画展異彩を放つゴッホの黄　三代子
左遷したはずが立派な虎になり　四郎

佳

自分史のサブタイトルは放浪記　克治
見放したつもりはないが子がそむく　倫子
風船の紐を放した日の記憶　霜石
手を放したら先に転んだ影法師　美代子
抱いた子だつき放す振りしか出来ぬ　哲男

人

いつでもおいで母の扉はあけ放つ　俶子

地

椅子少し引くと自由が放たれる　千里

天

公園に町の文化が放ってある　荻野像山

軸

放された森で自立を考える

アルファ

藤村　亜成選

寄り道でアルファ拾った人生路　あずま
改憲のプラスアルファが分からない　強一
アルファを付けて労使が手打ちする　尚士
アルファの魅力宇宙に満ちている　徳三
香たいてゆったり脳にアルファ波　俶子
五十年経てば見えないものも見え　婦美子
アルファの話題に疎い古希の坂　銀波
アルファの風が陽気を連れて来る　悦男
美人だが何かアルファ物足りぬ　武史
生活のアルファ求めボランティア　宗明
気分よし今日はアルファ湧いてきた　智加恵
アルファが出てきた頃から不登校　棲世
アルファを大事に生きる大病後　藤朗
アルファはもうない年金だけ頼り　可住
アルファはいらない値引きしてほしい　栄呼
約束へうれしい朝のアルファ波　朝子
アルファのこわい仕掛けにある奈落　弥生
アルファが付いて病名やこしい　和枝
外出着プラス小物で活きてくる　雅枝
うたた寝を誘う癒しのアルファ波　玄也
努力プラスアルファはきっと運だろう　茂代
アルファの不安地球の未来像　晴翠

平穏な暮らしにアルファ足りぬ日々　水笑
アルファがほしくて種を蒔いている　保州
天才はアルファでつかみどころない　一粋
不透明なプラスアルファから不信　ヒデコ
復活の陰にアルファのあぶら汗　一知
アルファの辺りで狂う匙加減　美代子
火傷せぬ距離でプラスアルファ考える　柳弘
プラスアルファそれがわたしの匙かげん　たず子
歳月から素直に貰うプラスアルファ　ヒサ子
アルファ波の出るまで修行した白衣　(井)富子
役人にばかりアルファある仕組み　次男
アルファを残し会社を去る不安　美義
挫折からやっとアルファの位置につく　(花)順子
人許すだけのアルファが僕にある　扶美代
ズームイン彼のアルファ見てしまう　(矢)五月

佳

プラスアルファに本性を試される　蜂朗
アルファの部分へ祈りがながくなる　充子
生き恥を残すアルファなら要らぬ　雄々
悠久のアルファを抱いた産の声　宵草
アルファの夢は日毎に萎んでる　勝視

人

みどりごは抱きしめられて人となる　深雪

地

蝸牛のそりと動く二十五時　慕情

天

カレンダーのアルファめくって日々好日　西岡洛酔

軸

恵まれただけ悩みが増えている

初歩の教室

題 ― 謝る

三宅保州

柳歴と経験を深めよう

柳歴何十年ということは何年も川柳を続けてきたことであり立派なことです。しかし、柳歴五十年の人は柳歴十年の人の川柳についての経験が五倍あるとは限りません。どれだけ多作、多読等をしてきたかが肝要です。例えば、月に百句作句する人は月に十句しか作句しない人の十倍の作句歴があることになります。さらに、佳句を多く読む、多く投句する、句会に多く出席する、川柳に関する資料等を多く読むことなどで経験を深めることができます。しかも、柳歴は自分の努力で増やすことは出来ませんが、多作、多読等は自分の努力でいくらでも充実できるものです。そして、川柳を続けることにより、柳歴も経験も深めていきたいものです。

【同想の多かった句】

謝れば済む一言を飲む沽券　英　旺

ゴメンネと一言いえば済むものを　正　和

謝って終えばそれで済むものを　信　雄

ごめんねと言えば済むのに意地を張る　好

原 謝れば済む事云えぬ意地ばあり　雅　代

添 謝れば済むこと言えぬ意地っ張り

原 謝って済む事済まぬ事があり　光　枝

「事」は形式的な用法の「何々のこと」というようなときは平仮名で書きます。

原 謝罪して済むこと済まぬこと　真　一

中四でリズムが悪い。中七にする工夫を

添 謝罪して済ませることと済まぬこと

謝ってくれても元に戻らない　像　山

原 謝りに行く母さんに手を引かれ　秋　星

添 母さんに手を引っ張られ詫びに行く

原 やんちゃ坊ごめんなさいを言える子に　信　子

添 やんちゃでも謝れる子に育てたい

原 謝るのが一番と子の処世術　喜　子

添 悪いことは謝ることを子に教え

原 ごめんねと素直に謝る人が好き　智加恵

中八ですから「素直に詫びる」等にしたい。

口喧嘩すぐに謝る人が好き　かずみ

原 わだかまり解ける一言ごめんねと　政　子

添 ごめんねと言ったら解けるわだかまり

ひとことが言えてすっきり仲なおり　典　子

謝って心の刺が取れました　きぬ子

幹部らの謝るポーズ皆同じ　智加恵

下げた頭に本心覗く謝罪劇　はじむ

【添削・批評句】

原 詫び上手生き上手で丸い輪に　映　子

中六音字はリズムが悪くなります。

添 詫び上手譲り上手で円い輪に

原 謝れば後々すっきり出来るはず　寿々女

添 謝れば直ぐにすっきり出来るはず

原 草むしりみみずも蛙も皆ごめん　道　子

添 みみずにも謝りながら草むしり

原 子育ての最中に逝った親に謝し　こずえ

添 子育ての苦労を知って亡母に詫び

右の三句は中八。中七にする習慣を

原 謝まって互に許す夫婦仲　弘　泰

送り仮名に注意を。辞書を引く習慣を

添 謝って互いに許す夫婦仲

原 謝りは誰にもあると言う他人　貞　子

この謝りは、誤りか過ちで意味が違います。

原 土下座でも誠意と見えぬアデランス　北　朗

かつらを着けている土下座に誠意が見えぬというのは、差別的ではないでしょうか。

原 ごめんねと素直になれぬ妻の意地　イ　セ

妻が作者でないようにも読めますので

添 夫への意地が素直に謝れぬ

原 空爆にゆずった壕の死にお詫び　清

添 空襲でかばってくれた墓に詫び

原 謝る時勇気いるけど後楽よ　綾　乃

添 思い切って詫びれば楽になれるのに　節子

原 嘘ついて謝りなさい許せない　千華

添 謝って下さい嘘は許せない

原 謝った後から嘘が出てしまう　婦美子

添 謝りの言い訳嘘が出てしまう

原 謝ろうタイミング失せ気の重い　れんげ

添 謝りのタイミング失せ気が重い

原 くい残る謝るだけですまされぬ　那珂子

添 謝っただけではすまぬ悔い残る

原 すみません先手打たれて自溢す　弘子

添 すみません先手打たれて仲直り

原 政治家は本音語ってすぐ謝罪　章司

添 政治家は本音語ったあと謝罪

原 弁解は無用謝れ男やろ　淳司

添 男なら弁解無用詫びなはれ

原 カメラアイ社長気にして詫び会見　好文

添 謝罪会見しつつ気にするカメラアイ

原 夢の中平謝りの前に妻　俊子

添 せめてもは妻に謝る夢の中

原 お互いに素直にごめん夫婦中　みね代

添 喧嘩しても直ぐに謝る夫婦仲

原 犬猿がずっと続いて謝れず　美恵子

添 犬猿の仲が続いて謝れず

原 くやしくて素直になれず猫をだく　宇乃子

添 素直には謝れなくて猫を抱く

原 「ごめんね」と尻尾ふること上手くなり　節子

添 ごめんねと尻尾振るのも処世術

原 愛冷えて文みで謝る青春だ　ミヨノ

添 青春の別れを詫びにくるメール

原 稲穂見て謝る姿ふと思う　稔

添 稲穂見て謝る覚悟できました

原 気に止めぬ行為の謝礼こそばゆい　孝明

添 気に留めぬ好意の謝礼面映ゆい

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 いい齢の子の誤ちに頭下げ　亜希子

添 いい歳の子の過ちに頭下げ

原 閉店の謝る文章痛ましい　タカ子

添 閉店を詫びる文章痛ましい

原 無理言うた今際の謝辞にうろたえる　徑子

添 すまなんだ今際の詫びにうろたえる

原 真剣に詫びている目を逸らさない　夕胡

添 目を逸らさない真剣な詫びである

原 謝ってばかりで解決策がない　准一

添 謝っただけで解決できますか

原 謝ってこれしか出来ず墓洗う　幸

添 墓洗うことしか出来ずすみません

原 土下座してくれたら許すつもりです　昇

添 土下座してくれるの待っているのです

原 許せない計算ずくで詫びる奴　たん吉

添 土下座する計算ずくが許せない

すみませんお猿のように謝ろう　水昇

【佳　句】

ごめんねと亡夫の服を捨てる春　宏子

謝ってやり直したい過去がある　洋子

朝帰り飼い犬にまで頭下げ　雅明

三歳児こぶし握って謝らず　藤朗

謝りに行った筈の子また喧嘩　孔一

あっさりとガキ大将が頭下げ　時雄

あかぎれの手をごめんねと温める　アヤ子

背を向ける妻にすまぬと手を合わせ　いさお

この辺が謝りどころ水仙花　千代子

とりあえずメロンを持って謝りに　満子

謝って一皮剥けたお付き合い　益子

足踏まれ謝ったのは私です　忠子

謝って済むことでなし原爆忌　つよし

天国で会えばやっぱり謝ろう　のり子

新聞の片隅にある免罪符　正和

【今月の推せん句】

正直に生きて謝ることがない　黒崎美紗子

まさに意表を衝かれた思いの秀句です。

金婚式謝ることがたんとある　土屋起世子

お互いのその謙虚さと健康がめでたく金婚式を迎えられた様を巧みに詠んでいます。

【私の句】

タクシーにワンメーターを詫びて乗る

問診に申し訳ないことばかり

秀句鑑賞

同人吟　宮崎シマ子
―4月号から

川柳、せんりゅう、センリュウ、寝ても覚めてもこればかり。夫を巻き込み娘達にも迷惑をかけ、孫の面倒もあまりみてやらずにやってきたのにあまり上手にもならず、恥ずかしい思いでいっぱいです。その私が皆様の玉句に対しての秀句鑑賞など誠におこがましい次第ですが、これも勉強と思って一生懸命にさせて頂きました。目性がよくないので白内障の手術後も涙目になり活字を読むことがつらいのですが、この度一八七九句を時間をかけてゆっくり腹に入るよう、一句一句を味わせて頂きました。軽くユーモアのある句が好きなものでついそちらへ目が移り、名句を沢山見落していることと思います。どうぞお許し下さい。いい勉強をさせて頂きました。

おじいさんは笑いおばあさんは怒り

谷口　義

私等夫婦もこの通り。これでこそ平和な姿です。何処のお家でも強いのはおばあさん、でもお嫁さんには負けています。

ふところのお金が懐炉より温い

木本朱夏

温くなるほどお金をもってみたい。年金は減る、介護保険、夫の医者代は上る、懐は寒くなるばかり。私もこのようになりたい。

ポケットへ頭の薬チョコ三つ

永浜加津子

作者は健康でとても頭のいいお方。いつもチョコを食べておられるのかな。これから私もチョコと仲よしになりましょう。

大根二本並べ何だか恥ずかしい

安土理恵

この句を見て思わず吹きだしました。大根足、いいじゃありませんか。色が白くて力があって、大地を踏みしめて。私も同様。

掃除機の口が老人に向いている

都倉求芽

粗大ゴミである老人にはとても怖い。覚悟はできている。中八の「口が老人に」とあるのでこの「が」が冗談ぽく優しい作り話のように思えて安心して居られる。

こんなええ妻いてへんでというてある

古今堂　蕉子

そうでしょう、そうでしょう、私自身も日本一の妻と思っています。己惚れだとしても、旦那様はきっと認めて下さってると思います。ますます良い奥様になって下さい。

両の手に持てるぐらいの欲はある

小谷集一

昔のおばあさんは大きいつづらを選りましたが、今の老人は割り切って、子供に残さず全部使うという考えが多いけど、まだ生きてるのだから欲も必要でしょう。

噂の輪　席外せない帰れない

大川桃花

輪から抜けてしまうと後で何を言われるか―。女の性がモロに出ていておもしろい。

お喋りに行く足どりは軽やかに

矢野梓

赤い靴で行くと、一層お喋りが楽しい。

嘘八百まだ半分もついてない

水谷正子

正直者は上手に嘘がつけない。ここで嘘をと思うのにすぐ顔に出てしまう。嘘にもいろいろあり和を保つための嘘、病人を慰めるため等は大いに結構。こんな嘘なら八百と言わずもっと沢山でも神は許してくれます。

すみっこが好き負け犬の血だろうか

和田　つづや

負け犬でなく隅っこで思慮深く飛び出す機会を待っているのです。句会に行っても前が好き、後が好き、すみっこが好きとそれぞれに席が決まっているのも、人間性が出ていて楽しいですね。

暇できたとたんに風邪を引いている

齋藤　さくら

実感句。私も役を降りたとたん引いてしまって、約一か月ぐずぐずしています。風邪の神様はちゃんと見ていて、この者に少しお休みをやろう、と言う優しい心遣いでしょう。

年かさに合った貫禄まだ持てぬ

神原　文

戦前の家庭には家長の存在がありました。お祖父さんか、お父さん、または本家の伯父さんなどが、デンと控えておりました。優しいけど恐い人が居たならこそ、人の道にはずれませんでした。今の私達に、その貫禄がないのです。

ヘルパーがあした来るので掃除する

西谷　治三郎

人情でしょうか常識でしょうか。うちもやっています。私は特に台所の布巾を漂白して、気持よく使って頂くようにしています。

福も鬼も歓迎します侘住居

吉田　あずき

いろいろの鬼に来てほしいですね。がっちり頑丈な鬼には蛍光灯のつけ替え、花好きな鬼には花壇の手入れを頼みます。おいしいお菓子を携えて福と一緒に入って来た鬼には、紅茶を入れていつまでもお喋り―。まさに至福の一刻。こうなると独り住居も明るく楽しくなります。

忍の字を千ほど書くと風が止む

江口　度

人間とに角辛抱が大切。十七歳も大検合格するだけの根性があるなら、忍の字を千も二千も書いて欲しかった。どんな風があの少年の胸に吹いていたかは知らないけれど、人の命を奪う事もなく、自分の人生を踏み外すこともなく、頭の良い子だけにバラ色の未来がきっとあったはずなのに。

達筆な人と同じ筆を買う

鴨谷　瑠美子

「弘法は筆を選ばず」これは嘘だと思う。達筆な人は良い筆を持っておられる。下手なものはどのような立派な筆を持っても上手にかけないが、持ってみたい。私は生れつきの悪筆で、その上稽古もしないが、出した便りはポストが読みとって帰ってきたことがない。

米を研ぐ死ぬまで米を研ぐこの手

生嶋　ますみ

夫婦のうちどちらがどうなっても、残った者は米を研ぐだけでなく、掃除、洗濯を生きる限りこの手でこなさなければならない。他人様になるべく迷惑をかけず自立される姿に頭が下る。

たこやきを食べてる顔のしあわせな

西口　いわゑ

大阪人はたこやきが大好きです。ご多分にもれず我が家のあるじも、これを食べるときは本当に嬉しそう。

三文を取るか朝寝を楽しむか

川崎　ひかり

夜行性の私は双手を上げて楽しむ方を取りたいところですが、今朝は早く眼覚めそのまま起床。家事がすいすいと片づいて気持がよく、これが三文の得なら毎日でもと思いましたがさて何日続くことやら。

次の句も大好きな句です。

あなたァと一度呼ばれてみたかった

森　茂美

不揃いでいいではないかわが家族

夏目　一粋

太陽に力を月にやすらぎを

松本　よしえ

秀句鑑賞

―4月号から

倉益一瑤

―水煙抄

道草を仰山食べた自負がある

坂上淳司

道草をするたびに、色々な人々と出会い、多くの経験をし、好奇心で胸をふくらませて、きっと器をでっかくされていったのだと思います。雑学もまた楽し。道草バンザイ。

無記名にすると本音がてんこ盛り

森下一知

同感。私も、無記名にして、言いたいことたくさん。でも世の中まならぬ。

娘の心盗んだ奴と酒を酌む

三浦強一

男親と言うのは淋しいのですね、哀愁が伝わってきます。親になってしみじみと亡父の心がわかりました。複雑な気持。

優しさは人の迷いを深くする

両川無限

そう、優しいから迷いの森に入っていくのです。そして眠りまでも妨げる。「悪い奴ほどよく眠る」と申しますから。

携帯で芽ばえた恋に足がない

神野千恵子

心のない恋。足がないとはいい表現ですね。地に足が着いてない恋。幽霊の恋。

噛みついただけで油が切れちゃった

花岡順子

噛みつくのは、エネルギーがとっても消耗しますよね。老いるごとにすぐ噛みつきたくなるけど、どっと疲れちゃう。

ワンテンポ待てばよいのに先走る

横田春名

私も何時もそう思うのです。体はついて来ないのに、気ばかり焦って失敗ばかり。

原因を聞かないままで出た結果

稲葉洋

何ともすっきりしませんねえ。どうして、どうしてと言っても、結果は出ているんですから、後の祭りの酒でも飲みますか?

えっさっさ何はなくてもえっさっさ

大西文次

人は生まれてから死に向かって走らねばならない。山河を越えて転んでも起き上がり、起き上がりして前進する。お金があろうが、なかろうが、それが宿命である。

脱皮したままのズボンがぬいである

矢谷冨士野

アハハハ、この光景見たことがあります。ジーパンだとそのまま足を入れたら履けそう。脱皮するたび足が長くなってゆく。

失った時を惜しむかてのひらよ

村木信子

失った時間は戻って来ない。ああすれば良かった。こうすれば良かった。神様が何かをプレゼントして下さるなら失った時間を下さい。若さを返して下さい。

悪い本読むとだんだん目がさえる

坂口英雄

お利口さんになる本は、だんだん眠くなってくるけれど、悪い本は面白い。そして目が輝きはじめる。そんなことありませんか?

母の背を曲がったとおり撫でている

土屋起世子

だんだん小さくなってゆく母。撫でて背中が伸びるなら、いくらでも撫でるけど、伸びてはくれない。母さん長生きしてね。

夕焼ける明日のヒント置いてゆく

馬場利子

美しい夕焼け、そこからヒントを貰い明日に向かってまた歩きはじめる。ほんわかと心休まる句に出会いました。

■句文集紹介

田中正坊句文集『赤えんぴつ』

奥田　みつ子

句文集『赤えんぴつ』二五〇ページ余の中一五〇ページ以上が文章である。序文を執筆された岩井三窓氏が述べておられるように、元大阪毎日新聞社会部記者、ペンで半生を過ごされたプロの正坊氏の文章を云々するのはおこがましい限りである。その句文集の紹介など私にはとても荷が重過ぎるとお断わりしたが、『白い梅』の句集紹介を僕が書いたのだから、今度はあなたが書く番だと押し切られてしまった。

平成十一年に『ペンシル』を刊行され、それ以後の句と文章をまとめられている。

川柳塔誌目次下の十五編「赤えんぴつ」には旅好き、本好き、映画好きの著者らしい文が並び楽しませてくれるが〝七月二十八日〟は趣が違う。新聞記者だった著者が編集主幹から「マッカーサー書簡の趣旨に基づき、本日、君を解雇する。ただちに退去されたい」と問答無用の通告を受けた。すなわち、レッドパージである。〝山頭火と「銃後」〟には自由律俳人の旗手としての山頭火の思わぬ一面が描かれている。日中戦争下の作品を掲載し「戦争に反対することはできないが、せめて戦死者の霊を慰め、銃後の悲しい風景をあるがままに表現したものとして、これらの作品は貴重である」の言葉に頷きながら読んだ。

「川柳こぼれ話」の川柳論はどれも川柳に対する的確な指摘で、初心者にもベテランにもとても参考になる。〝さまざまな表記法〟〝いろいろな定型〟〝音韻を考える〟〝リズムを大切に〟など、私も感じていることを分かりやすく説明されていて嬉しくなる。

「続ペンシル」には自選した上、高瀬霜石氏の選による二百四句が並ぶ。特に私から見た正坊さんらしい句を十句あげると…。

人生にシナリオはなし万華鏡
脇役でおわった父のベレー帽
自分史のところどころに火の匂い
辛口の批評エンピツ尖らせる
赤紙が来た日を今も夢に見る
百年の歴史の中に僕もいる（大毎社会部百周年）
梅日和　我が晩節を汚すまじ
タンポポの綿毛も僕も旅が好き
お月さま綺麗と妻が呼びに来る
人間以上人間以下でなく生きる

「閑人閑話」の〝季語と句語〟は具体的によく調べられてあり、一概に常套語・慣用語として軽視できない面もあると考えさせられる。また〝特攻隊の絶唱〟には胸が痛む。神風特攻隊の四名の海軍予備学生が出撃直前に詠んだ川柳が載せられている。

生きるのは良いものと気がつく三日前
後三日酔うて泣く者笑う者
今日もまた全機還らず月が冴え
父母恋し彼女恋しと雲に告げ
黙送の中を静かに特攻機

「レモネード」にはサークル棒樣の会報に寄せた十六編が収められている。

〝文章について〟〝花と私と川柳〟は一般的には理論派と見られている著者のかくれた一面が垣間見られて興味深い。特に中学時代の国語の先生の心中事件を「このカップルは死を以て愛を貫かれたと思ったし、今もそう信じている」の言葉。そして、木の花、野の花が好きで男性には珍しく花の句が多い。

最後にペンが生き甲斐の著者らしい一句。

一隅を照らして生きた父のペン

なお、この本の発行日四月二十三日は「本の日」で本好きの著者のこだわりが窺える。

本社四月句会

四月七日（木）午後五時半
アウィーナ大阪

桜満開、夜の句会ということで、お花見帰りの人も交え四月句会は109名の参加で開催された。

まずは訃報があり松原市の小池しげお氏、東かがわ市の工藤吟笑氏、青森県の西谷大吾氏の三氏を偲び一分間の黙祷をささげた。

通り抜けへ投句参加の呼びかけの後、おはなしは交野市の森本弘風氏。

前回は主に色々な粉の種類や用途についてのアレコレであったが、今回はその測定の仕方にしぼった内容で、百万分の一ミリ、ナノメートルという電子顕微鏡の世界である。

化粧品、ペニシリン、携帯電話、うなぎの餌にいたるまで、数えあげればきりがないほど人間は粉の恩恵を受けているという。

粉の測定の仕方の進歩はすなわち科学の進歩に繋がる、という観点に立って熱く語った。

月間賞は八尾市の吉村一風氏に輝く。

（司会―朝子・玄也）（記名―月子・恵子）
（受付―睦子・倫子）（清記―直樹）

席題「レモン」　米澤　俶子選

レモンより牛乳にします午後のお茶　千枝子
レモンイエロー孫の若さを妬いている　希久子
レモンティー今日はOKするつもり　重人
薄切りのレモン存在感のあるお人　寿美
好意でもレモン百個はちと多い　公誠
共稼ぎホットレモンとトーストと　舞夢
失恋へたっぷりレモンしぼり切る　寿子
みよちゃんが半分くれたレモン水　蕉子
おくさまをリッチにさせてレモン風呂　月子
再会へレモンの味は忘れない　鹿太
このジュース何か足りないレモン味　れんげ
脇役でレモン主役をひきたてる　菜月
再出発胸に溢れるレモンの黄　みつ子
休日のレモンゆっくり絞られる　房子
レモネード青い思い出よみがえる　(久)千代
レモンティーすすり女は二の矢つぐ　一風
ビールでしょいいわ私はレモンティー　哲男
青レモン齧る少年期を齧る　恵子
値打ちでっせ純国産のレモンです　修
古希にまだときめきがあるレモンティー　希久子
マンネリの夫婦にたらすレモン汁　千里
薄切りのレモンすかすか二度の役　公誠
青春賛歌恋さわやかにレモンの黄　寿美
リハビリの汗をレモンに励まされ　昭洋
レモンかけ鮮度を上げて見る私　朱夏
一雫レモンを落とし中和する　和香
ためらいをレモンが癒すティータイム　一風
名水にレモンを冷やす過疎にすみ　天笑
おばちゃんの勢いレモン丸かぶり　正雄
嫁にパン食洗脳されてレモネード　潤子
二男坊レモンの様な娘を連れて　美籠
未知数の明日を信じる青レモン　佳
レモン切るぱっと空気を若くする　いわゑ
さわやかなレモンの木にも棘がある　みつ子
おにぎりはレモンの丸さほどがよい　かすみ
別れ話に顔をしかめているレモン　鹿太
食卓のレモンは笑い声が好き　いわゑ
一滴のレモンの如き感嘆詞　人
レモンかじったようなお顔の仁王様　地
受付けは青いレモンに似た少女　天
レモン色足して私を春にする　軸

兼題「象」　田辺　鹿太選

パソコンが象牙の塔の鍵あける　雅明
赤い眼になってしまった白い象　螢
酔っぱらい足の動きは象の鼻　孝一
夕方になると私も象の足　恵子
人間を見る象さんのつぶらな目　ルイ子
休日のわが家パジャマの象がいる　寿美
象さんが麦踏みすれば凄かろう　たもつ
巨象にも美人のせたい夢がある　一風

象ほどのやさしい目にはなり切れず　ひさ乃
象の鼻神の慈悲なのかも知れぬ　昭
春おぼろ象も甘えてみたい宵　冨美子
花束を受けた日もある象の鼻　瑠美子
象さんのスリム時代が来ぬように　かすみ
戦時下の繰り返すまい象の悲話　恭昌
目くばせに象さんが鼻ゆらしたよ　(志)千代
見詰めれば仏が宿る象の目よ　みつ子
象飼える家に住みたい孫の夢　楓楽
潰される手前で覚めた象の夢　愛論
人間を象はやさしい目で見てる　いわゑ
地に足を着けてどっしり象の足　光久
象の背中でお山の大将の気分　天笑
人間の知恵に曳かれてゆく巨象　とし子
象飼える日までペットは我慢する　哲男
百頭の象が踊れば凄かろう　夕胡
奥の間に象が一匹眠ってる　睦子
象老いてふるさとの夢ばかり見る　千枝子
アフリカの大地を駈けてみたい象　文
動物園の象に憂国論がある　扶美代
地球とや蟻と象とが同居する　直樹
象の目に癒しをもらう哀しい日　朝子
餓死をした象を偲んでいる平和　倫子
哀しげな瞳よサーカスの老いた象　いつふみ
　佳
花街の裏を見て来た象牙撥　(志)千代
象の鼻神を恨んだことはない　弘一
ターザンの夢にまどろむ老いた象　和夫
サーカスの象は面子を捨てている　

にんげんを見ている象の目は確か　アキ
　人
印鑑にされて象牙は修羅を見る　真理子
　地
象つかい象の悩みを聞いてやる　天笑
　天
サバンナを知らない象の土踏まず　保州
　軸
象の目はいつも何かを訴える

兼題「前向き」　高田博泉選

何もなかった顔を前に向けている　螢
前向きは自然な姿勢と信じてる　満津子
前向きに生きると決めてから笑顔　能子
雨の日も明日は晴れると信じてる　直樹
可能性見つけて進むカタツムリ　千里
前進しか考えてないかたつむり　理恵
前向きに生きる笑顔が美しい　三郎
余命表どんどん足してまだ足りず　妙
前向きの背なに追い風味方する　隆盛
前向きに生きて絶えない向こう傷　尚士
前向きで借りたお金が焦げ臭い　つづや
前向きの人で直球投げすぎる　楓楽
前向きな女が燃やす好奇心　ひさ乃
闘病記ベストセラーを狙ってる　真理子
前向きの生き様映す肌の色　則彦
前向きに完走果たす父の靴　隆盛
もうひと花咲かそうのびてきた寿命　かりん
前向きに歩こう風が軽くなる　能子
前向きの妻に預けた命綱　鐘造
前向きへ天も味方をしてくれる　いわゑ
前向きへいつかは風も味方する　たもつ
前向きに生きると決めたダイエット　朱夏
丸刈りにして鍋底を抜け出した　天笑
前向きに生きると金が掛かります　利昭
前向きになる人参をぶらさげる　千枝子
老人ホーム作る気力を持ち続け　ルイ子
前向きに生きて冥土が遠くなり　則彦
前向きに整列をするネギ坊主　朱夏
身の錆も鎧兜にする男　理恵
前向きの意見をつぶすお年寄り　朋月
うじうじと考えないで先ず参加　天笑
前向きへ桜がエールくれている　月子
　佳
生きようと朝の卵を割っている　美代子
失敗も前に行かせる道標　菜月
前向きの嫁は笑顔で農を継ぐ　シマ子
酒の量少し減らしてくれました　恵子
杖ついても心はいつも桜いろ　たもつ
　人
前向きに生きた誇りを捨てぬ父　瑠美子
　地
俺だけでないどん底で手をつなぐ　一風
　天
前向きに生きれば解けてくるパズル　扶美代
　軸
年金のくらしに慣れてボランティア

兼題「透明」　山本希久子選

透明な家計簿別に付けている　満津子
仲の良い夫婦の海は透き通り　文
透明な空気汚しているヒト科　ますみ
透き通るような若さが妬ましい　尚士
こだわりを捨てて空まで透き通る　みつ子
透明な空気が裂けるシンフォニー　隆盛
告白をするなら透明な部屋で　美代子
愛一途私の気持ち翳りない　孝一
透明人間と会話しているひとり言　三喜夫
納得が出来たら胸が透けてきた　天笑
可愛くてガラスの箱に囲われる　いわゑ
追伸を透かして赤い糸探す　アキ
透明になりたくて行く座禅堂　楓楽
透明に生きていますとゴミ袋　千里
敗北を認め目の前透き通る　昭
錯覚のまま透明に生きてきた　ひさ乃
赤ちゃんを抱くと心が透きとおる　俶子
ガラス窓口づけ一つ残します　愛論
つつましく生きる不透明な年金で　求芽
透明な生き方なんてつまらない　公誠
透きとおる声で存在感があり　千恵子
透明にする気の首は洗ってる　重人
ゆっくりと川の澄むのを待つ女　公誠
透明なワインに恋の夢浮かす　文
無色透明好みの彩に染まります　睦子
ベジタリアンだんだん透けていくようだ　恵子
まる見えの心自慢に生きている　菜月
透明な時間を遊ぶ二度童子　朱夏
無色透明わたしを染める人を待つ　弘一
石仏に打ちあけ透明になった　天笑
花冷えの日は透明な人といる　和夫
男の目あなた裸にしています　耕治
佳
和解してグラスの酒も透きとおる　鹿太
愛してごらんだんだん澄んでくるよ　睦子
携帯は透明人間の住処　千恵子
透明な鉛筆ならば本音書く　つづや
友達に透明人間がひとり　昌紀
人
透明な袋で良心を捨てる　朱夏
地
透明になってこの世の幕を引く　鐘造
天
許すと決め朝の空気の透きとおり　一風
軸
透明な絆と思う古稀夫婦

兼題「吹く」　三宅保州選

たんぽぽの吹く風のまま旅をする　照子
新芽吹く森とろとろと春のいろ　公誠
ベランダも春だ春だと芽吹いてる　千恵子
美容院行った帰りは花吹雪　則彦
いい風を信じてひたむきに進む　重人
大ぼらを吹いているなと聞いてやる　美智子
心配をかけぬ程度の法螺を吹く　(久)千代
ごり押しの後には隙間風が吹く　光久
先輩風吹かして奢らされる羽目　玄也
母さんは赤チンつけて吹いてくれ　孝一
春一番吹いて院外処方箋　義
吹く風が無いのも困る風見鶏　弘一
吹く風もなく旗たれている野心　修
ゆびさきの火種へそっと風が吹く　朱夏
夢抱いた時から明日の風が吹く　民
吊り橋の真ん中へんで風が吹く　千里
春風に吹かれて旅の人となる　能子
花の風吹いてきたので逢いにゆく　月子
春風に吹かれてウソが転げ落ち　月子
花咲けば花風吹けば風の詩　集一
吹きようで風は鬼にも仏にも　鹿太
吹きだまりのっぺらぼうで生きている　(志)千代
吹き溜まり人も落ち葉も地に還る　朱夏
口笛が吹けて主役にされている　妙
口笛を吹いて歩くとふりむかれ　恵子
口笛を吹き少年の顔になる　瑠美子
口笛を吹く気になった病み上がり　文
笛を吹く少し音程ずれたまま　三喜夫
仏様へわびてローソク吹いて消す　ますみ
吹けば飛ぶ僕にも売れぬものがある　一歩
計の風が骨の髄まで吹き刺さる　隆盛
吹っ切れてノラに変わってから達者　文
佳
フルートを吹くと美人になれるかも　孝一
息を吹き込めば心臓動きだし　天笑
ゆきひらに妻の命の粥が吹く　愛論
お粥さん吹いて食べだす恢復期　見清

快適な風が吹いてる向こう岸　　(久)千代
　人
よく笑う人にいい風吹いてくる　　楓楽
　地
裏通り昔のままの風が吹く　　千里
　天
花吹雪みんな忘れることにする　　重人
　軸
逆らいたいときもあろうに吹き流し

兼題「思う」　河内　天笑選

抽象画見ても感想浮かばない　　孝一
花吹雪思いちがいの恋でした　　理恵
我思うゆえに悩みの種尽きず　　昌紀
思い遣り荒い言葉で戒める　　はじめ
思いがけぬ人に会うたと午前様　　蕉子
波田陽区ひとの思いを斬り捨てる　　昭
思う半分もがらくた捨てられず　　満州
妻だけは思うようには動かせぬ　　弘一
思ったとおり歳を当てたら嫌われる　　保州
幸せの時は生き方考えず　　文
言い勝って虚ろな思い抱いている　　寿美
想定外子等から春の旅行券　　直樹
思い通りに生きて見たくて深呼吸　　昭子
ダーリンがうざいと思うときがある　　重人
思い出の嫌な部分を消去する　　千恵子
妻おもう心は歳と比例する　　博泉
寒かったなあと桜も思うてる　　美代子
思いっきり歌う楽しいなと思う　　潤子
思い思いの生き方で手をつなぐ　　能子
あの時の間抜けさ思えば思うほど　　求芽
朕オモフニすらすら言えて認知症　　楓楽
叛くかも知れぬと思うカスミ草　　アキ
思うほど誰も私を買うてない　　美籠
まだ若い若いと思う七十歳　　弘風
紙一重だったと思うかすり傷　　隆盛
思うこと言えなくなった恋かしら　　いわゑ
わたしよりずっと下かと思ってた　　耕治
結果聞く待合室で思考ゼロ　　千恵子
何かしら思ったけれどすぐ忘れ　　尚士
思うところあって泥水飲んでおく　　見晴
第二希望悪くはないと思う春　　楓楽
妻の留守思わずぐっと背伸びした　　昌紀
有難い勿体無いと生きている　　たもつ
　佳
思うことあって欠席致します　　恵子
何遍も思い直して生きている　　義
こだわらぬ笑顔に負けたなと思う　　冨美子
これ以上煩悩消せず飯にする　　和夫
春を着て思い思いの老いふたり　　いつふみ
　人
もっと夫を大事にしよう通夜帰り　　一風
　地
見舞客増えてはてなとつい思う　　則彦
　天
ふと思う女房なしでやれるかな　　一風
　軸
思い出し笑いを風に盗まれる

予　告

第十一回川柳塔まつり

とき　十月十日（月・祝）
ところ　アウィーナ大阪
○詳細は後日お知らせします。
同人・誌友の皆さんのご参加をお待ちしています。

京都塔の会　春の吟行句会案内

日時　5月30日（月）午前10時30分
JR（嵯峨野線）花園駅前集合
行程　花園→（約100米）法金剛院→（約700米）阿じろ別館
昼食・句会　阿じろ別館
電話075―463―8173
京都市右京区花園寺の前町7
兼題「苗」「縫う」「当日雑感」各3句
会費　4000円（当日いただきます）
申込　5月20日まで
都倉求芽　TEL075-351-4109
〒600-8428　京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町
法金剛院　王朝貴族遊楽の地。阿弥陀如来像・香炉等の重文があり、池を中心として四季の花・青女の滝・待賢門院陵など。付近案内　妙心寺・仁和寺に近く、双が丘二の丘東麓には兼好法師の墓と歌碑がある。

エッセー

詠史川柳

井上桂作

古川柳は、江戸中期の文学として大きな意義を持っています。当時の一般民衆に最も親しまれた特殊な文芸として、独自の価値を有しているからです。詠史川柳とは、歴史上の人物や出来事を素材として川柳を作ることで、詠史吟とも言います。神代の昔からの歴史的事件が詠われており、その作家名は柳多留二十六篇以降、大部分その名が明記されています。

江戸時代は、徳川幕府の統治下でもあり、時事川柳などの数は極めて少ない。封建社会の中での政道批判は、もちろんご法度でした。ところがよく調べてみると、愉快な詠史川柳は数多く作られていました。

川柳が俳諧から派生したのは、江戸中期以降で『摺物』が出たのもこの頃です。その後詠史川柳は人気のジャンルだったようです。この時代に詠まれた詠史句で、現存するものは約三千句と言われます。

古川柳の『古』は古典の古であり、川柳は川柳点の略称です。この文芸は、江戸中期に雑俳前句附の点者であった『柄井川柳』によって創始されたものです。万句会・柳多留・末摘花など、他にも多くの柳書がみられます。歴史を題材に用いた川柳は、題材が良く知られているため親しみやすく、誰にでも理解しやすい。

それらの中には正確な史実によって書かれたものもあり、伝説を伝えているものもあります。また歴史に託して何かを語りたい社会風刺らしい句も入っています。しかし、古川柳はもともと生活の歌ですので、庶民の日常生活の間にも随所に名句をみることができます。

江戸川柳の中から『頼朝』の句を三句拾ってみます。

頼朝の兜拝領してこまり

俗説では頼朝は異常なまでの大頭で、烏帽子の縫い子があまりの大きさに舌をまいたといわれる。

佐殿がすればしびれるひざ枕

佐殿は頼朝の通称で、愛する政子も名代の大頭ゆえに膝がしびれて、幻滅の悲哀を感じたという。

大頭ふって舎弟をよせつけず

平家との戦に功のあった義経を、腰越から追い返した。冷酷無比な大頭の頼朝、これは判官びいきの川柳です。

このように詠史川柳は、謎解きの要素を多分に含んでいます。娯楽のすくない江戸の庶民の唯一の知的遊戯の文芸として楽しんでいたからです。

神話の時代からの貴人・武将・英雄らの虚飾・仮面を剥ぎ取り、そうして仮面を脱がせ過去と現在を結び付け真の人間を表出している。表現の自由のないこの時代、このような伝説歴史を詠んで、自分たち庶民と同じ人間ではないかと、細くほほ笑んでいたかもしれません。詠史川柳の楽しさは、人間臭さを詠うことにあったともいえます。

言論の自由は認められなかった当時の数多い選者は、選句そのものを慎重に、政道批判など絶対に採らなかった。歴史句と遊里句が優先的に選ばれたのは彼らにとっても、一種の安全策であったと考えられます。

こうして江戸時代の後期、川柳の方は『下半身』のネタが主流となり、当時の狂歌になぞらえて狂句と呼ばれるようになる。格を失った川柳は次第に衰退していき、詠史川柳においても、江戸時代後期にはめぼしい句もなくなってしまう。

エッセー

来た。見た。走った。

木本朱夏

昨年十二月、エジプトを旅した。日本から直行便で十四時間、ルクソールに着く。ルクソールエアーポートは、砂漠に張ったサーカスの大きなテントのようだ。

早朝ホテルの外からアザーン（イスラムのお祈り）が聞こえる。エジプト人は信仰心が篤い。一日五回、どこにいても時間になるとその場でメッカの方を向いてお祈りを捧げる。高速道路の脇にトラックを止めて、お祈りをしている人を見掛けた。またホテルの天井にはメッカの方角を示す矢印が、さりげなく書かれている。

エジプトの大地は緑豊かである。なつめ椰子、バナナの木、サトウキビ、キャベツをはじめ数々の野菜は、ナイルの賜物である。

エジプトでは、ロバも山羊も大切な家族である。朝、ロバに乗り畑へ行く。夕方ロバにサトウキビを積んで、また二人乗りして帰る。ロバ一頭は日本円で二五〇〇〇円、自転車は二〇〇〇〇円である。

パリのコンコルド広場のオベリスクはエジプトから贈られたものである。そのオベリスクを切り出した石切り場に立つ。道具も機械もない時代、一本を切り出すのに十二年かかったという。そこに未完のオベリスクがあった。八年目にして切り出すことを諦めた石工の歎きが、風にのって聞えたような気がした。

ピラミッドも謎めいたスフィンクスも、アブシンベルの神殿も、アスワンハイダムも、王家の谷もツタンカーメンも、カタコンベもリビア砂漠もサハラ砂漠も、エジプトは圧倒する。不思議に満ちている。魅了する。

エジプトは喧しくて埃っぽくって元気だ。ほとんど信号のない道路を廃車同然の車が走る。クラクションを鳴らしづめである。道路を横断するのは命懸けだろうと思うが、歩行者は車の奔流の中を悠然と縫って行く。

日本のスズキに八人くらい鮨詰めである。乗り合いのタクシーのようだ。乗客と目が合うと手を振る。バスは鈴生りの人でいっぱい。ドアは開けっ放し、というよりドアのない車も走っているのだ。朝、ラクダをたくさん乗せたトラックを見た。多分、ピラミッドへ出稼ぎに行くラクダであろうか。

エジプトの子供も大人も人なつっこい。必ず手を振ってくれる。にこっと笑う。小学生が片言の英語で話しかけてくる。

ナセルの時代からエジプトでは教育に力をいれ、ちいさな粗末な集落にも立派な学校が建てられている。子供たちは習った英語を試したくて仕方がないらしい。

課外授業の小学生の団体に取り囲まれ、珍獣を見るように騒がれ、握手ぜめに合い、担任らしき先生に子供たちと一緒に写真を撮られ、エジプトの印象は……と聞かれたりもした。よほど日本人が珍しかったようだ。

外国にいると日本がよく見える。日本の子供たちはこんなに生き生きしているだろうか。この子供たちが十年、二十年後には社会に出てエジプトは大きく変わっていることだろう。

エジプトは子供の頃からの夢であった。北はアレキサンドリアから南はアスワンまで、わずかに一週間ばかりの駆け足のエジプト。「来た。見た。走った！」慌ただしくハードな旅であったが、夢は叶った。

アレキサンドリアでは、クレオパトラのいた頃の遺跡を、そのまま海中で保存する博物館を建設中で、二年後オープンの予定という。体力があればもう一度、この地を訪ねたい。クレオパトラに逢うために……。

小池しげおさんを悼む

都倉求芽

このところ本社句会では必ずといっていいほど黙祷からはじまる。それが二月句会では珍しくなくて、久しぶりにほっとした気分だったのが翌八日になって小池しげおさんが亡くなられた、と楓楽さんから電話が入った。以前からお悪いとは聞いていたが、まあ寝たり起きたりの程度だと思っていたのに…。

そういえば今年は年賀状が来なかった。それで昨年の分を取り出してみると、あるのはあったが、表裏ともパソコンで、やはりその頃からだったのかも知れぬ。しかし、内容的にはそんな感じはなくて何時もの冗談っぽい言葉が並んでいた。

美味いもの食うとき猿の顔になる（申歳）

〝煙草は値上りしたので止めましたが酒はちょっぴり安くなったので続けます〟

冗談と言えば昨年の暮れに金一封と一緒にメモのような一文が届いた。

〝いつも句報をありがとう。すばらしい句やそうでない句を見て楽しんでいます〟

しげおさんとのお付合いは、ただあちこちの句会でご一緒し、また京都塔の会『千社札』に永らく投句いただき、吟行にも来てもらった、という程度。したがって追悼文を書けと電話の時も正直うろたえた。「阪急」育ちとなると最適任者は紫香先生。しかし、折悪しく入院中。それなら求芽、との論法でもう決まっているとの事。それで無駄な抵抗は諦めて西宮北口句会の帰りに、入院中の先生にお話を伺いに参上した。けれど先生も阪急といっても職場、役職、時代も違うのでそんなに詳しくはない、とおっしゃりながらも次のようなお話を聞くことが出来た。

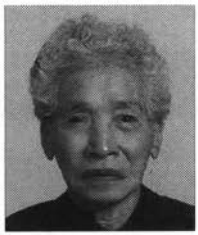
「○現役では土木方面の課長　○西宮北口駅工事の責任者　○柳歴は古く紫香、水客、潮花の三羽烏とも親交があった　○住まいは広大な土地を持った古い農家で立派なお屋敷　○お酒が好きで多分それが原因で病気になられたのでは…」

句報を取り出して在りし日を偲ぶ。

下駄箱が溢れて通夜が終らない
納得をしてから溶ける角砂糖
両腕を伸ばして父の樹を測る
何時までも嘘が気になる雨模様
ライバルに弔電を打つながらと
歯が抜けて明かるい顔になりました
蹟いた石に喧嘩を売っておく
悪知恵を風が拾って行きました
酒好きの医者にかかってから達者
来年のことが気になる彼岸花
金無くて浅い流れで生きている
台湾で道を聞かれたことがある
作戦ができたらずるい事ばかり
手拭いで嘘をふいたらまっ黒け
ご葬儀にも参列出来ず弔電だけの不義理になって大変申訳なく、せめてこの追悼文にもならぬ一文でお許しいただき心からご冥福をお祈りします。

浄土まで流れは哀し酒の川　求芽
五臓六腑さけで洗って送りたし　天笑

享年八十歳　合掌



盟友工藤吟笑氏の長逝を悼む

川柳塔おっぱこ吟社
木村　あきら

去る三月十日再入院先の県立白鳥病院四階の病室にお見舞した折、すこぶるお元気で退院の日も近いと喜んで居られた矢先に肺炎を併発され、突然の訃報となった。

十数年前脳梗塞で倒れ二か月余りの入院生活を経て退院され好きな万葉集、百人一首の墨絵描きに没頭されていた。その作品が福祉施設「サンパール白鳥」の園内に展示（毎週一回取替え展示）入居者の心を和ませてきた。

吟笑さんは徳島県名西郡石井町諏訪の素封家久米川家に生を受け、長じて川柳の他に義太夫・踊り・三味線・ゲートボール・御詠歌（大教導）・万葉集の墨絵描き等々多芸多能の方であった。その後縁あって工藤家と養子縁組で現在に至って居られる。

昭和六十一年四月川柳塔おっぱこ吟社に入会、吟社の中心的な存在でおられた。平成四年七月一日『工藤吟笑川柳句集』を発刊、同年十一月川柳塔社同人に承認された。

平成五年に生家の檀那寺に当る性福寺へ川柳句碑「古里に梵鐘ひびく性福寺」を壱基寄進された。また、平成六年十一月二十日町立白鳥中央公園遊歩道に川柳句碑「余命など考えなしに種を播く」を建立、除幕式直前に脳梗塞で倒れ県立白鳥病院に入院されたのであった。退院後通院加療の傍ら趣味の川柳と万葉集の墨絵描きの充実した晩年であった。

平成十二年六月には全日本川柳協会会長より長寿表彰を受け、十三年度文芸部門で白鳥町長表彰の栄に輝いた。平成十一年一月から『川柳塔』の自選句（五句）掲載が許され栄光の晩年であった。生前愛して止まなかった愛猫数匹を残して、亡き奥様の待つ極楽の世界へ彼岸のよき日に旅立って行かれた。

『楽歓院圓明吟笑居士』九十四歳。心より御冥福をお祈り申しあげ拙文ながら追悼の辞と致します。

合掌

故工藤吟笑遺句の中より

神風が吹かずしまいの敗戦忌（大戦従軍）
石垣の島で鉄帽もぎ取られ（敗戦武装解除）
戦地への妻の手紙を持ち続け
海苔を干す島に淋しい母の詩（石垣島）
金婚の道遠かった近かった
鍋釜を持たずに暮らす渡り鳥
貧乏クジ引いたと夫婦仲が良い
老人ツアー　ガイドのマイク丈頼り
大海を知らず養殖魚は太る
俎板の鯉はいっぺん跳ねてみる

第20回 国民文化祭
ふくい2005

川柳 作品募集要項

～実りゆたかに 出会い ふれあい～

一、**応募受付期間** 応募受付期間 平成十七年四月一日(金)～六月三十日(木)(当日消印有効)

二、**応募規定**

(1) **作品** 一人各題二句詠(未発表作品に限る)

(2) **応募料** 一人につき一、〇〇〇円(但し、海外投稿者及び小・中・高校生は無料とします。)

(3) **応募方法** 福井県実行委員会作成の「作品募集要項」をご覧いただき、所定の応募用紙を使用してご応募ください。

(4) **応募先** 〒919-0592 福井県坂井郡坂井町下新庄一―一 第20回国民文化祭坂井町実行委員会事務局へ郵送

三、**宿題・選者** (事前投句) 高校生・一般の部

握手＝墨崎 洋介(福井) メガネ＝小松原爽介(兵庫) 着る＝永石 珠子(長崎) 温泉＝大木俊秀(神奈川)

(事前投句) 小・中学生の部

握手＝熊谷 岳朗(岩手) メガネ＝川路 泰山(静岡) 恐竜＝井原みつ子(愛媛)

(当日投句)

たくましい＝斎藤 大雄(北海道) 恐竜＝菅原孝之助(新潟) 電気＝梶川雄次郎(大阪)

第二次選者

今川乱魚(千葉) 大野風柳(新潟) 河内天笑(大阪) 西來みわ(東京) 森中惠美子(大阪)

四、**賞**(予定) **文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・福井県知事賞・第20回国民文化祭福井県実行委員会会長賞 福井県教育委員会賞・坂井町長賞・第20回国民文化祭坂井町実行委員会会長賞・坂井町教育委員会賞・㈳全日本川柳協会会長賞・福井県川柳作家連盟会長賞**

五、**発表会場** 川柳大会(当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)

平成十七年十月二十九日(土) 10時30分～15時40分(予定) 坂井中学校体育館

合同大会(上位賞表彰、記念講演会)

平成十七年十月三十日(日) 10時～12時 敦賀市民文化センター

入選作品は、「作品集」として発刊し、応募された方(小・中・高校生は入賞者)に無料配布します。

六、**問い合わせ先と募集要項の依頼先**

〒919-0592 福井県坂井郡坂井町下新庄一―一 第20回国民文化祭坂井町実行委員会事務局宛

TEL ○七七六―六七―七五〇七 FAX ○七七六―六六―四八三七

七、**主催者** 文化庁・福井県・福井県教育委員会・坂井町・坂井町教育委員会・㈳全日本川柳協会・福井県川柳作家連盟

第20回国民文化祭福井県実行委員会・第20回国民文化祭坂井町実行委員会

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

川柳塔みぞくち　小西　雄々報

縁談は降るほどあった夢の跡　公美枝
鏡には女心を曝してる　信雄
降る雪に耐えて鍬振る春を待つ　久子
真心の映る鏡を持っている　鈴枝
ほめられてそっと鏡を覗き見る　和代
傷付いた心鏡にうつらない　智恵子
正直な鏡へすこし拗ねてみる　豊枝
ほどほどに降って欲しいと種をまく　弘子
雨三日野外の花が気にかかる　静江
氷雨降るふと思い出す亡妻のこと　正光
枯れた絵を元気に見せる鏡もつ　雄々

川柳塔打吹（前月分）　大森　孝恵報

雪が降るロマンチストになる時間　睦子
雪背負い春の花芽も耐えている　龍枝
雪肌のような美人は夢の夢　芙美子
灘雪が溶けて流れて春を呼ぶ　照彦
老体に膏薬貼って雪をかく　清
豪雪で内から扉開かぬバー　玲坊
雪解けの光明日への道標　三津子
走っても走っても来る波の夢　和子
熟女が走る超イケメンの男ぶり　セツ子
出稼ぎで倦の走った地図がある　重忠
全国駅伝かにのお汁で盛り上げる　善江
電話口義理人情が走り出す　紀美恵
心臓がバンクするほど走ろうか　禎元
ジグザグに走って逃げて煙に巻く　石花菜
走らねば天国行きの船が出る　幸子
神様は超能力の持ち主だ　かつみ
心技体試練を超えた技光る　たけ代
超音波わたしの病気つかまえた　久芽代
超美人戸籍はごっつい男の名　美知江
超美技で銀盤を舞う十七歳　泰山
勝敗を超えて握った手が温い　博丈
超気持いいともらった金メダル　螢
何一つ文句言わない石の意地　順子
ポツダム宣言日本の辞書に意地はなし　克枝
食い意地に負けて何でも手が伸びる　京子
意地の悪い人はだいたい長生きだ　完司
意地だけで登った高い山がある　節子
食い意地は張っても食い溜めはできぬ　玲子
焼いて割るまた焼いて割る陶芸家　芳光
剛情と頑固と意地が三つ巴　孝恵

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

逢いにゆく母には涙など見せぬ　ひかり
天からの命さずかり陽が昇る　初恵
栄光の長寿表彰頭が下がる　(故)吟笑
永久に愛を誓って五十年　放任
天職の土に捧げた深いシワ　賢
胸の内マグマも抱いた長い夜　八重子
天守閣聳えて鳩の舞う長閑　あきら
長い道時には石になってます　文仙
一人一個長蛇の列に二度並ぶ　かおり
ご無沙汰の話尽きない同窓会　よしみ
初笑い天衣無縫の孫の舞い　貞月
自然界怒って地球危機を告げ　寿々女
長生きをしたくて夫婦よく動く　いさむ
一喜一憂スマトラ地震悔い残る　輝夫
長生きは何時まで生きて良いのやら　治延

東大阪市川柳同好会　森下　愛論報

春うらうつかり忘れ物をする　萬的
草花も言葉がわかる春日差し　章久
最初からやり直します春の旅　度
喜びも辛い別れもあった駅　和子
五体満足分娩室のシンフォニー　ばっは
喜びに傾く風に波がない　弥生
喜びの主役母さん隅に居る　ダン吉
大臣の椅子には裏がありそうだ　太郎
晩節を汚さぬうちに譲る椅子　柳弘
ガンでない診断家族の祝い酒　信治
安住の椅子は景色に融けて居る　良子
定年の椅子に人間らしい顔　美弥子
ネクタイをとると自由な風に合う　克己
ネクタイも草臥れている終電車　湖風
初犯とはいえど悪い芽つんでおく　高尚

後悔も希望も詰める初日記　あや子
ニセ札の出来ばえ試す初詣で　美子
初夢は紙飛行機で月へ飛ぶ　愛論

あかつき川柳会　山本柳昌報

ひとことを信じて風の中を起つ　いわゑ
奮い起つ男の顔にある生気　朝子
八十にして起つ僕のでかい夢　良知
君が代に起つも座るも自由です　正
九条の改悪世界へ恥晒す　東吉
老骨を晒して九条守ります　敏
腹の底さらしてからのお付き合い　朋月
晒木綿お米に変えて生きぬいた　千歩
窓際の椅子頼りない首晒す　紀乃
コンビニの弁当知らず征ったきり　英子
梅一つ日の丸弁当思い出す　タカ子
新聞紙にお芋あの日のお弁当　扶美代
資料館弁当箱の叫び声　ゆうこ
シャケ一切れ見せびらかした遠き日よ　美智子
定年に腰弁当と離縁する　光久
バッジ付けるまでは低い腰だった　重人
無差別に襲う十七歳の闇　ひさ乃
九条にヴェール被せたのは誰だ　保州
京都発病める地球へエコ暮し　和香
焼跡に生れた憲法黄金色　富美
六十年敗戦の日を忘れない　正坊
プリンスがこけて裸の王様に　守彦
裏金を作った奴から出世する　半蔵門
風邪見舞下戸に奨める玉子酒　シマ子
時間外取引政財界の慌てよう　みつ子
風邪引きのように蔓延する自殺　左代子
ガスマスクつけても恋し三宅島　一歩
ハンセン病僕も加害者かも知れぬ　利昭
ブザー鈴つけて重たいランドセル　たもつ
磨きなさい北風どっと吹いてくる　ダン吉

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

生きてきた喜怒哀楽のストーリー　恵美子
生きていた証しのこして蝉のから　好栄
合併という名のもとに小さく生き　伸子
コンピューターつながっている生きている　はるみ
笑ったり腹を立てたり生きている　かつ子
振り返る生きる証がほしいから　聖子
九条で背中の背嚢想い出す　博利
たんぽぽが舗装の襞にひそと咲き　清泉

竹原川柳会　時広一路報

犬の耳ボクを愛してくれている　蘭幸
聞こえないのよと笑顔をよせてくる　栄恵
大仏の耳に話をしたくなり　寿枝
つねられた耳が覚えている父よ　笑子
いい耳だ悪口だけは良く聞こえ　節夫
ウサギの耳が聞こえぬ振りをして困る　半覚
今出来る孝行母に耳をかす　慶子
天に運ゆだねてからのマイペース　菁居
すみれ草小鉢に咲いて愛されて　孝枝
何もかも忘れて眠るだけ眠る　正宏
あたたかいコタツで春を待っている　千枝

佳句地十選（4月号から）

市丸晴翠

挫折した愛を樹海でひとり吐く　愛論
答どう出ようと今日の米洗う　ひさ乃
余命表覗いてからの立ち眩み　紫泉
転ぶまで笑顔は見せぬ独楽の芯　春雄
年金を八つざきにしてお年玉　功
胃袋でくすり同士が揉めている　(欠)千代
百度石人のねがいで丸くなる　宏至
能率給あれから僕の値が下がる　ダン吉
棟梁の腕は節目に逆らわず　重人
手作りのチョコでもダメなものはダメ　見清
春が来たよとサイン出してる花粉症　史子
廃屋になっても里の鬼瓦　淑子
ときどきは私を叱る鬼もいる　厚子
鬼が住む山まで人間手を伸ばし　輝恵
阿呆にも鬼にもなれず喜寿に生き　力
母なれどときどき鬼も棲み和む　汎美
少年A見事に決めた志望校　規代
ピンチにも母は見事に舵をとる　幸子
三代を見事に生きる鉢の松　笹舟
千年を見事に桜咲いてみせ　不朽
大安吉日見事な鯛のしっぽ跳ね　比呂子
幼虫も見事に脱皮して生きる　房子
紙一杯に父の顔を描く園児　貞子
千年の大樹は見事神になる　静風
耳よりな話を運ぶ春の蝶　一路

川柳塔唐津　仁部　四郎報

曼陀羅華教えて欲しい万華鏡　晴翠
小柄だが老妻の重しは効いている　勝視
仕立て妻家から出ずに賃かせぎ　實
音持たぬ亡母が来る日のボタン雪　正剣
我が道を歩く子供にやや不満　蜂朗
慶弔を見分ける幕の赤と黒　水笑
特売も種切れ老舗落城す　四郎
ほとけの名借りて説教する親父　輝夫
病弱の妻を残してまだ逝けず　高明
叶うても叶わなくても朝詣り　虹汀

尼崎尾浜川柳会　山田　耕治報

諍いの後の星月夜がきれい　晴美
知られざる達人も住む裏長屋　五月
初恋のおさげの写真持っている　朋月
昼さがりすることもなく人恋し　信子
純金よりダイヤが好きとねだられる　きよし
冷たかろう涙ホロホロ流し雛　亀与子
心配をうっとうしいと反抗期　よし子
うっかりと純なお方をおこらせる　耕治
生憎のみぞれまじりに流し雛　昭三
病院の廊下をいやす飾り雛　勝巳
相愛のバラはトゲなど気にしない　正治
ラブレターぎこちない字の純な詩　孝一
雛の日の父は手酌でひとり酒　鹿太
あつあつの甘酒夜寒いやされる　まさ
温泉の純度が妙に気にかかる　義芳
春風を曽採の靴が待っている　江美
投げ出した足の先にはお雛さま　全彦
私を枯らさぬように恋をする　美籠

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

始めから勝負ついてるにらめっこ　柳童
笑顔しか見せない母の胸のうち　昭子
どんな顔しても絵になる美人です　桂子
のれんの字老舗の顔でにっこりと　雪子
神神がおわして戦なぜ止めぬ　見清
朝は戦争弁当つくる子沢山　春代
交番のポスター俺に似てるかも　禄骨
欠かせない早春の顔梅一輪　契子
顔づくり中途半端ですべり込み　信男
あの顔が笑えば可愛い好々爺　正三郎
六十年平和守った第九条　禮子
心良き時を過せば顔もよし　長一
亡妻に顔も似てるが気も強い　いさむ
名人の手順に無駄も無理もない　久子
身の内の欲と戦いよく負ける　黒兎
やな戦やられる方はやりきれぬ　勝

高槻川柳サークル卯の花　瀧本きよし報

逆らえず運の赴くまま生きる　活恵
風船も運もふわりと逃げたがる　比ろ志
恥一つ解凍してから開く運　美義
寒椿ぽとりそれまでした運　萬的
運命線また書き足してみる余生　昭
胸に灯を点けた男がふり向かず　宵草
なにくそを灯し続けている拳　重人
五十年灯しつづけた愛ふたり　秀夫
大損の覚悟で通す一本気　照子
追っかけをやめぬお婆の一本気　稲子
ぼんと胸叩いた父の一本気　庸佑
自分史を汚さぬ父の一本気　美籠
わてこそといばる奴ほどたよりない　佳一
優先席わてを無視していまへんか　典子
わてかって泣いた日もある頭陀袋　とし子
昔はわてもてましたえと遠い耳　スミ子
あんたはんわてに歳聞き何だんね　義一
人間はピンチ来たときためされる　治三郎
ピンチなど茶飯事雑草の美学　求芽
身内から吹き矢が飛んでくるピンチ　諷云児
雑兵の首が救うた社のピンチ　尚士
寝過ごした朝は息つくひまもない　かおり
八十歳現役主婦で独居です　あやめ
五分五分の勝負で負けたなと思う　宏章
金のない父に散骨すすめられ　晴美
黄梅が咲いて立春日向ぼこ　祐作
過去のベール外すときっと涙色　孝一
血圧が上がると下る記憶力　泰雄
殻破り小さな自我が芽生え出す　きよし
切り札は持たず凡愚で世を渡る　武史

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

茶柱がどっこい上げる重い腰　寛之
少年法重い罪でも軽い罰　幸子
重い荷をDNAが担いでる　昭三

空白の過去から届く鈍い音　久子
四季巡る妻の変らぬ音がする　武庫坊
にわか雨のら猫走る公園で　正子
轟と鳴るビル風相手に押し相撲　宏一
花の芽をついばむ鳥の名を知らず　年代
華やかな過去は語らぬ流し雛　勝巳
振り向けばいつも誰かが消えている　薫
淋しさをくわえ直して冬の風鈴　芳子

川柳塔のぞみ　播本　充子報

子は親を選べぬいい親になろう　シマ子
色即是空人生進むも退くも　棲世
介護されいつも優しい手を握る　和香
パンの耳残す甘えているように　文子
人間不信ロボットを買ってみる　遠野
人形の部屋一人では怖いです　利昭
塩胡椒振りたい男増えてきた　楓楽
服従の揉み手しながら爪を研ぐ　尚士
いい仲間一味ちがう酒になる　いわゑ
誰彼にも容姿変えないバラの花　孝一
選ばれておんなは嘘をつく果実　珠美
横を向く蟹も前進忘れない　恭昌
無意識に父に似た人好きになり　賀世子
峰打ちの情けにすがる深い恩　朝子
いつもの店でいつものランチ食っている　朋月
ぬいぐるみ私の癖がのり移る　扶美代
落ちこむと花屋へ走るくせがある　義子
風を抱き火を抱き愛は深い謎　美籠
被災地にいつもをくれたボランティア　方子
我が夢の未完の部分子に託す　光久
減塩に慣らされ折れた鬼の牙　朱夏
アメリカへ忠義はポーズだけでよい　あやめ
ひらがなのポーズで女詫びている　希久子
三十世紀青い地球のまま光れ　みつ子
冬晴れに人形になり母は逝き　育子
引き返す勇気を前進と思う　充子
さしすせそ手順を妻に仕込まれる　昭
黄信号でもおばちゃんが渡り出し　なぎさ
終章はガッツポーズと決めている　たもつ
一体の土偶太古の風が抜け　権悟

川柳ふうもん吟社　夏目　一粋報

復興のエースはボランティアだろう　洋々
天と地のはざまおっちら生きている　雅女
もう一度締めたい帯の手入れする　春名
天狗になったエースの鼻が欠けている　一瑶
もう二度とエースにさせぬ核である　金祥
作業着を脱ぐと優しい父になる　無限
遺言状喧嘩するなと書いておく　節子
おっちらの人がどえらい事をする　一京
脱皮するサナギを風が迎えてる　寿子
おっちらと見えるが鼓動数えてる　善夫
紅をさし婆も春への支度する　昌鼓
政界のエース金には目がくらみ　信子
アンタアナタずっと昔のことでした　蟹郎
脱落したページに秘密隠れてた　美雪
華やかなエースの裏にある孤独　悦子
コーヒーが脳の縺れをときほぐす　裕子
家出した妻は脱皮であったのか　茂登子
脱サラへ村に帰れと土が呼ぶ　暢夫
人生の暮らしおっちら背を伸ばす　益子
エースという肩書重荷負わされる　はつ江
いつ帰る我が子の姿ずっと待つ　衛
仮面脱ぎ妻が待ってる灯に急ぐ　秀夫
鬼の面脱いでとろりと酔ってくる　重忠
大老舗ずっとこの味守り抜く　由美子
招かざる客に限ってずっとおる　宗明
乳房手にずっと見ているママの顔　義徳
不束な娘にずっと居坐られ　志げ緒
おっちらとしとれん青い鳥探す　圭一郎
脱税のスリルはきっと付けがくる　孝男
非常袋にずっとお酒を入れてきた　一粋

川柳塔なら　坊農　柳弘報

シルクロード虫吐く糸の長い路　博一
一年もかびの生えないこわい餅　蘭香
プレイボーイ振られる術を心得る　ふりこ
イエスノーはっきりと振る細い首　登美子
無い袖は振れぬ袂に重い義理　とし子
不景気の底で卒業してニート　あやめ
老人の孤独とやらをひとなみに　千梢
子育ての愛ひと振りの塩を足す　孝子
絹を着てこころに闇を抱いている　冬葉
お下がりの餅いただいて今日も無事　絹子
飽きたのにまだ今日も出る残り餅　章久
また来いと老母が手を振る過疎の駅　春雄
俺が振る旗はだーれも見てくれぬ　弘風

リストラという人柱での景気　修
振り下ろす力を抜いた愛の鞭　茂雄
被災地を励ます杵の音響く　富子
上向いた景気見上げる首がない　真理子
餅を焼くこの温もりにある絆　恵美子
振り切った母さん遠く遠くなる　ダン吉
いささかの理由は話さぬ絹袱紗　洋子
ぬかみそを混ぜる景気はさておいて　理恵
親友のひとり倒した不況風　隆盛
振り出しで気付いた風の通り道　朝子
餅焼いて浮気ごころも裏返す　一風
ないろの絹慶びを織り上げる　美千子
絹袖の中に女を見てしまう　秋雄
今日までを赦して母は首を振る　國治
重ね餅いつか重たい愛になる　俊彦
正絹の袱紗が仕切る静と動　柳弘
不景気な街で拾った人間味　道子

川柳エスポ（前月分）　山本　三郎報

川千鳥川面にもやる波しぶき　昭一朗
年賀状いろんな鳥が飛んできた　恵美子
鳥のごと自由に空をとびたいな　みさと
仏堂の屋根の雀も拝まれる　さとし
白鳥が水面にうかぶ凛として　文好
子に餌という親鳥の一本気　とよ子
コケコッコ昼刻告げてのどかなり　団地
ケッコーなことだと酉にさとされる　とし子
野の鴉ねぐらに急ぐ酉の時　任宥
躍進の夜明けを告げる酉の年　一歩
酉年の妹共に羽ばたこう　ルイ子
はがき絵の鶏が遠近よろしくと　はつよ
東天紅声ながながと幸を呼ぶ　高栄
天災をさけて下さい風見鶏　ゆき子
一番鶏勇躍羽ばたけ幸の明け　三枝
今年こそ平和と思う鳩の群れ　れい子
ひよどりの初音めでたく年明ける　一炊
幸せを刻む我が家の鳩時計　一幸
酉年は平和であれと祈るのみ　さち子
雷鳥の住む立山に春の音　星花
酉の年はばたく気力持って生き　ゆき子
椋鳥が群がる大樹騒がしい　三郎

川柳ささやま　遠山　可住報

春うらら入所の姑の笑顔にも　恵美
一寸した便り恋しい冬籠り　純子
大胆が好きでじいちゃんの肩ぐるま　美智子
タイミング仲よく合わし嫁と姑　文子
一発に賭けるこころのプレーボール　美緒子
大胆に老いを忘れた設計図　靖子
大胆で危なかしくて気がもめる　美紗子
鍋煮えて招かざる客顔を出す　多美子
大胆なヘソ出しルック目が迷う　開子
取入れもタイミングよくゑびす顔　かほる
イヤリング女の見栄を光らせる　つや子
賞味期限切れた夫婦が光り出す　八重子
失敗が輝いている体験談　冨美
これ以上小さく出来ぬ水着つけ　哲男
へそくりが満期になったタイミング　可住

長柳会　村上　直樹報

情念を断つ決心の鐘を撞く　直樹
男達どっちにつくか母と妻　輝子
地味な人じっくり見れば洒落た人　明信
空蟬の空の抜けがらこの香り　靖博
地味な柄色街育ち粋に着る　武男
仲が良い地味と派手との夫婦仲　マサ
抱きぐせがつくから駄目と孫抱けぬ　もこ
地味と派手その中間の暮しぶり　靖子
里がえりすれば爺ちゃん餅を搗く　ひろし
見え見えの嘘つきながらすまし顔　たけし
君が好きと酔いにまかせてうそをつく　明子
言い訳を思いつくまで喫茶店　芳野
くすぶった焼けボックイに火がついた　よしお
夫婦道鼻につきますサロンパス　三和子
燃え上る恋を包んだ地味な服　一慧
地味なのになぜか気になる女のあり　幸雄
渋好み心得ている器量よし　淳司
身についた遊び心が役に立ち　敬二
洋服は紺系統が性に合い　正一
どの道を行っても浄土たどりつく　けい子
暮し振り地味だがゴミはよく溜まる　正美
清貧の暮し支える妻の汗　正子
虫付いた野菜が消えて病む体　史
疑問符をつけてボツ句をいとおしむ　和子
老いの画布地味な絵皿に朱を溶かす　冨美子
正直で地味で無口な男下駄　英美
ひと言が心に明かりを点けてくれ　和代

川柳塔みちのく　小寺花峯報

種時きをしてる姿を鳩が追う　誠子
毒舌の裏から本音透けてくる　あすなろ
居酒屋のグラスに置いてきた本音　きよし
新種と言う種が明るい未来指す　ヒサ子
泥船に乗って本音を吐きました　順風
一本の銚子本音のスタートに　銀波
豪雪も天与の恵み流す汗　花匠
合理化の波がさらってゆく本音　愁女
鯉のぼり風いっぱいによく流れ　井蛙
無器用な本音を薄目あけて聞き　黙人
流氷が春の便りを乗せてくる　慕情
終止符の後から本音顔を出す　花峯
いい汗をたっぷり流すスキー場　劦
さくらさくら風の流れに逆らえぬ　五楽庵

京都塔の会　都倉求芽報

春一番吹いたぶらりを始めよう　和友
生き抜くぞ気が源と病んで知る　ますお
離婚劇元をただせば嫉妬から　久留美
源平はともに名残りの火を灯す　信哉
湯治客源泉までも見て回り　高栄
源泉は涸れても宿の名は残り　福子
お小言を栄養源にして生きる　典子
着メロに振り向く電源OFF車両　則彦
騒動のもと不機嫌の連鎖から　輝美
源泉を静かに守る雪の精　葉子
良妻のモデルだなんて笑わせる　克治
子のモデルにはなれぬが自分らしく生き　宏子
小説のモデル剃髪して寡黙　啓子
デッサンの紙いっぱいにEカップ　満子
モデル都市ゴミに知能を試される　求芽
モデルハウスの旗くたびれる不況風　益子
かの国の首領は多分子供だろ　英旺
ふる里は多分無口な春迎え　きよし
誘い水彼なら多分乗ってくる　庸佑
楽天家多分多分ですませとく　正坊
予想して多分に高くつくはめに　英子
お浄土で多分待つだろ亡母おもう　百合子
俯けば多分敗者になる空気　欣之
責任のない多分と交わす燗ざまし　藤重
性教育およそのことは知る子供　恭昌

かわはら川柳会　上田俊路報

欲が居て極楽準備邪魔に来る　寿子
母さんの財テク技術壺の中　静子
猫だましつぼにはまって電車道　好道
蔵の隅居座る壺に見る時代　かず恵
母米寿大壺に花盛りきれず　悦子
つぼ押え母の背中の灸の跡　余吏子
低金利銀行よりも壺の中　雅予
介護にもつぼわきまえば笑顔出る　登生
孝行壺のカケラで知るロマン　泰良
汗ばんでいるのが偽の壺だろう　俊路

三幸川柳教室　古久保和子報

終章を飾る名句がまだ出ない　義男
生きてきた歴史で晩年を飾る　桂香
余生なお飾る物あり趣味ひとつ　幸
弾まない話へ飾り糸を繰る　幹子
よそゆきの言葉で見合いした昔　みね
一日を飾る夕日に明日がある　起世子
マネキンが袖ひき寄せる飾り窓　八重子
飾り物何にも要らぬ健康美　徑子
ブランドを買ってひとりの世界観　次根
着飾ってみても所詮は花電車　保州
玉砂利へパパ似ママ似の七五三　光男
一番の成績がまた黙らせる　かずみ
かみさんの味が一番のろけてる　一歩
五十音先に呼ばれるだけのこと　孝義
叱られて一番目立つことになり　靖子
一番に母へ見せます通信簿　信子
大根煮るいちばん安堵した顔で　登美代
無器用な男いちばん役に立ち　章子
てこずった子が一番の親思い　イセ
一番の辛さビリには通じない　千秀
一番はしかと覚えていた校歌　智三
野次馬の一番前に妻がいる　和子
見回して一番あとで手を挙げる　武碧
翔びすぎてここ一番を踏み外す　当代
一番の旗揚げたのは亀である　准一
成績が一番だから不安な子　朱夏
一番鶏鳴いた覚悟の靴を履く　町子
一番はいらぬ人生アンダンテ　昇
義務教育首席で通し鍬を振る　公子
野に住んで一番好きなみどり色

岸和田川柳会　原　さよ子報

焼餅もうすこげ黒く焼く嫉妬　あい子
焼餅を程よく焦がす苦労人　寿海
雲水の流れに磨く石ひとつ　基
車より自分磨けと言う親父　東吉
磨いたら差し歯が抜けた今朝の鬱　仁緑
磨いたら長いぞながい鉋屑　野添
急に来てあちこち磨き義母帰る　清
騒がれた昔小町も皺だらけ　錬太
色香消え昔小町と噂され　ふみよ
その昔俺にもあった毛と青春　岩夫
昔のこと水に流して姑介護　房枝
その昔仕事の鬼も好々爺　笑司
初恋の昔懐かしおぼろ月　弘子
その昔地球にヒト科いたらしい　ダン吉
昔なら二行半で済んだのに　蛙城
一徹の昔かたぎの太い指　狸村
オレオレと急かす電話の金目当て　幸子
ライバルと狙い所がマッチする　珠子
下心あって小指をからませる　力子
しめ縄の稲穂目当てにくる雀　みね代
幸せと解る窓辺に干す毛布　守
うたた寝へそっと毛布をかける母　さよ子
ベビー毛布残して子等は皆巣立ち　ゆい
あと五分温い毛布を抜け出せず　和美
ベッドにも電気毛布のある時代　香代
友のテレにわかに昔よみがえる　一脩
女房の焼餅荒れて猫竦む　呂万

むらくも川柳会　毛利　幸報

大欠伸昨日の疲れよしとする　彰
受験生終って吐き出す大欠伸　定子
ほほつねり欠伸殺して話聞く　信夫
少子化で欠伸している老夫婦　幸
湯の香宿心身癒して大欠伸　美恵子
思い切り大きな欠伸薬効か　安男
聞いてるよ答えるそばで生欠伸　美保
ポストまで誰にも会わぬゆきかえり　秀子
祝う喜寿新たな心春の筆　恵美子
八十路坂何を急ぐか落ち着かず　寿
出雲弁忘れぬ古老語り口　ます美
友を待つ笑顔がうれし花見酒　明朗
しつけ糸つかない子供ふえている　喜美
助けられ歩んでこられ初句会　ふさえ
全員の顔が揃うた新年会　昭子
老夫婦土鍋でぐつぐつ雪の夜　伊千子
満ち足りぬ心を除夜の鐘が消す　かずこ
古時計左回りが好きになる　秀夫

川柳大阪　高木　信酔報

新風のすさぶ楽しみ野球界　タカ子
神仏を騙す偽札罰当り　東吉
不意に来る妻から怖い変化球　孝一
霜柱琴の音冴える春の海　章久
はんなりと急所を突いてくる女　朝子
硝煙の世に九条が冴え渡る　ダン吉
おっとりと冴えた意見で座をしめる　五月
まっさらな気持で朝の紅を引く　美籠
見て聴いてやはりまっさら良い女　宏
負け犬と藤で言われて急がない　修
面接へさらの背広は汗をかき　一風
罪いくつ背負いザンゲの道急ぐ　民
賽銭はなんぼにしようと鳥居前　照月
大空に舞い上がる凧景気付け　功
おせちよりおでんをこのむ孫の口　司
初日の出地球の安泰願かける　喜楽
孫の顔もっとやりたいお年玉　斎秀
退職金妻とローンになき別れ　彦太
大津波地球の姿変えていく　珠生
まっさらな明日にかけて生きている　美花
急用はお金を貸せと言う話　柳昌
戦友が不意に出てきた午前二時　笑風
気ははずみ急げどままにならぬ足　叭笑
まっさらな気持になった今朝の雪　青道
変化球投げるすべ無き喜寿の坂　洛酔
不景気に負けじ職人冴える技　善純
冬空に気高く冴えるオリオン座　かよこ
解きほぐす笑顔素っぴんのナース　柳弘
発車ベル立食いソバを急がせる　まつお
焦るなよ金はないけど知恵はかす　信酔

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

欲入れる袋に穴が空いている　夕胡
三面鏡魔法が少しずつかかる　緑良
秘密から大きな山が崩れ出す　泰女
オーダーストップ明かりがひとつずつ消える　輝子

魔法だと思った二日酔いの靴　准一
満場一致まるで魔法を見る如く　保州
魔法解け父は銀河の星である　あき子
弱点を魔法で包む子育て記　和子
鉛筆に魔法をかける午前二時　和香
病人の魔法に家族巻き込まれ　美子
魔法瓶長寿のエキス溜めて飲み　佐一
そして春笑い袋が締まらない　さち子
笑い袋ピエロのような声を出す　よしこ
お袋の指図で運が向いてくる　豊太
美しい秘密を春が呼び戻す　寿子
男の秘密女の秘密あのねのね　大輪
お医者には内緒内緒で飲むお酒　良一
隠し子が葬儀の時にどっと来る　東吉
互いに秘密一つや二つあり夫婦　三男
大切な話しっかり袋縫い　和代
共通の秘密があって腐れ縁　紀久子
秘密ごとあってたまるか枠の中　怜
通帳の秘密盗まれ空財布　あつむ
人生のラストオーダー急がねば　朱夏
オーダーの無い生き方も良しとする　精子
スペシャルランチオーダーします春だもの　順子
オーダーを拒否して園児みな主役　英子
折角のオーダー縞が気に入らぬ　三喜夫
あるものでいいと機嫌の良いお酒　克子
連勝へオーダー不変で突っ走る　正博

川柳塔きゃらぼく　福代　天雀報

マイホーム駅から五分頑張ろう　雪江
もう一つ私の箱にいれるもの　田鶴
この道を辿ればきっといい出会い　てい子
ぎくしゃくが解けてほのぼのするお茶　すみゑ
想いめぐらす孫たちの未来像　玲子
トンネルを抜けるとそこは春でした　やえ
指きりもしないで別れ淡い恋　那珂子
どこまでも生きたし二人分の飯　日枝子
音みんな呑み込んで降りボタン雪　繭
これからは風に任せてどこまでも　恵子
猫の真似してなるべく冬を避けている　千代
未完の絵終章までに仕上げねば　紫泉
息づかいたしかそこまで猫柳　ふみ
サッカーの応援日本わくだろう　亜弥
年老いてなぜか生けないボケの花　章江
神様も地球の疵にお手あげだ　春枝
錦公園の松が誇っている長寿　瑞枝
のせられて西南向けて寿しを食い　寿々子
つっかい棒心がほしいと言いだした　ゆき
スーパーを出れば雪舞う道続く　天雀
人生の残り火絶やさず夢を追う　初枝

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

過去ばかり話し上手でいる古着　八重
怖くって着地なかなか定まらぬ　みどり
撫で肩の女は着こなしがいいな　はるお
着実に歩いているが間に合わぬ　汲香
明日着るかたち鏡に視てもらう　かおる
祝言着箪笥の底に入れたまま　野草
荷が着いた電話受けるの忙しい　きみゑ
故郷のたより字体ですぐわかり　武子
過剰気味老いに気付かぬ行動派　弘子
ちょっと待て消印日付たしかめる　かつ乃
うふふふ今朝も家族と飯を食う　八重子
うふふのふ春待ちきれぬ姥桜　睦子
寒卵敬いながらひとつ割る　小鹿
敬っています乳房のあるかぎり　くに子
敬慕の念いま結界の香を焚く　美ッ千
戦死した夫を敬い老いる今　菊乃
陽と月を崇めて今日も生きている　永子
両親を敬う心　胸に持つ　久枝
赤い蹴出しよあなたに辿りつくドラマ　宣子
着色の誤魔化し剥げる正念場　実満
籾時きをたのまれピクニック気分　孔美子
春の雪着々春が寄ってくる　和子
着席はしたがうろちょろ落ちつかぬ　きみ子
執着はすまい生きてるうちの金　茶子
はかなさを着た魂が忙しい　富久江
一着でテープ切りたいから走る　公子
どんぐりは大樹目指して着地する　節子
土着の血ゆるがぬ父の鍬と鎌　彩子
着駅で幸福だなを張り上げよ　諷人
野良衣着て出てゆく母に水温む　螢

西宮北口川柳会　黒田　能子報

ベランダへ一日の鬱つり下げる　富喜子
ベランダの陽だまり猫の指定席　房子
孫が来てベランダに出る煙草好き　奮水
三寒四温ベランダの花慌てない　求芽

桜前線春がそのまま花になる　比ろ志
幸せがそのまま顔で踊ってる　光久
針小棒大うわさそのまま伝わらぬ　キク子
夢だけはあの日そのまま老いの春　絹
逆風を抜けると青い天がある　いわゑ
逆風に神の試練と立ち向かう　松煙
逆風に吹かれて散った恋もある　たず子
逆風もあって人生面白い　千代
風に逆らう頑固が時に見え隠れ　孝一
波風は立てぬそのままにしておく　能子
押し売りは買ってもらえぬ音で去に　春蘭
振り向けば貧乏神が後を押す　鹿太
ポケットの中で押しあう善と悪　嘉彦
核兵器飛ばすボタンは押さないで　哲子
押し通す気迫娘の瞳に負ける　てる
春風に押されて重い腰あげる　朋月
蛇口から出て還らない水の過去　折杭
下心あるのできれい嘘もまぜ　萬的
土筆摘むはじける笑顔子にかえる　歳子
いろいろと噂を積んだ口車　一之
熱帯魚ちらちら横目睨んでる　いたる
菜の花の黄色に心癒される　トミヱ
中天を彷う霊へ手を合わせ　文
世渡りの下手なじいちゃん憎めない　五月
あの人を想い出させる名残り雪　美籠
定年後鵜匠のように見える妻　石舟

南大阪川柳会　吉川　寿美報

中内も堤も消える平成に　直子
子供には他人は怪物だと教え　叡子
あくびの句考え中にあくびする　日出子
昔ばなしが流れているあくび　アキラ
ポケットの穴からあくびついぽろり　柳弘
遠慮せずあくびの出来る嫁となり　(吉)修
あくびをしたら天に届くか象の鼻　度
病名を隠す笑顔がつらすぎる　寿美
ガラスにもひとつだけある隠し事　昌紀
生かされてしっかり歩く万歩計　ひさ乃
逃げないでしっかり現実見ておこう　千里
しっかりと技術を担う宮大工　清成
しっかりね送り出したらさあ化粧　初太郎
歓異抄しっかり読んで姑の座　千梢
再会にしっかり絆締め直す　更紗
しっかりと被災地が知る人の愛　章久
動物園しっかり握る子のちから　なぎさ
しっかりと自分史書いて遺書にする　弘泰
しっかりとした嫁姑に逆らわず　庸佑
たて皺の眉間の怖い父の顔　タカ子
眉寄せることなく春はすぐそこに　きらり
リストラをされた眉間の深いしわ　憲太郎
善人の眉間みじんもないかげり　朝子
苦労した証眉間のしわの数　弘子
イエスノー眉間の皺が返事する　柳伸
仏像は眉間に皺を刻まない　(棚)修
眉間にしわ寄せたぐらいで知れた知恵　たもつ
思慮深き男の眉間動かない　集一
反抗期の眉間へ悪がしのび寄る　雅文
蕗の薹しっかり春の香り告げ　欣子

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

タクシーで深夜に帰るアルコール　吐来
大物ぶって出席遅い男です　敏
死んでからいい人でしたでは遅い　一壺
遅い足ひたすらゴールだけ目指す　ダン吉
内定の通知が来ない雪もよう　重人
戦降りた初日テンポが遅すぎる　恵勇
遅咲きの花も確かな実を結ぶ　泰子
新雪に私の足跡第一歩　フジ
一番よりビリが気楽と決めている　桂子
トップの座いつも狙える位置に居る　遠野
すぐそこに一番好きな春がある　アヤ子
一番茶実家から来る定期便　章司
ここ一番不思議な力湧いてくる　志洋
ここ一番心を鬼にして叱る　いさお
一番に起きて味噌汁つくる幸　みつこ
かたくなに正義は曲げずくい下がる　庸佑
会議室火照る男の正義感　たけし
それぞれの正義掲げた殺し合い　かつみ
大会社正義をいえばつぶされる　喜久子
反対ペンの正義が仁王立ち　一知
人間の森で正義が立ち枯れる　美代子
墓のこと今のところは口にせず　昭平
わが夫は私をおいて今は墓　静子
よう来たな亡父の嬉しい声がする　悦子
大海原をわたくしの墓地にする　扶美代
大の字でゆっくり寝たい墓の下　りつえ
油断してくれますようにシッポ振る　六点

おっとりと構え油断のない男　洞庵
油断したふりして勝ちを子にゆずる　久仁雄

川柳クラブわたの花　井尻　民報

足元に用心し過ぎ頭打ち　はじむ
好きだとは言えず嫌味ばかり言う　宏至
孫を抱くこともないまま黄昏れる　ミツ子
抱く孫に飴と鞭とを使い分け　君枝
目をそらし顔を伏せたが指名され　宏
一病息災医者とは仲のよい命　一風
妥協する平凡と言う物差しで　きらり
用心を詰めすぎ重くなるリュック　欣子
にこやかに若者らしい家の音　幸枝
春風に抱かれ心の扉あく　晴美
お見合はにこやか装う跳ね返り　俊子
不摂生重ねながらも乞う長寿　浩三
常識の縁を歩いてよくこける　正純
逆切れに特効薬はないですか　(本)たえ子
にこやかに薬一本の救世主　(赤)妙子
百までは生きると言っている背筋　ますみ
白髪増え抱いた夢も遠くなり　敏男
幸せの重さと思う子を抱く　いつふみ
浮き沈み開き直って運まかせ　たか子
鍋つつく幸せそうな友の愚痴　義明
火の舞が災払うお水取り　ふり子
春うらら水琴窟に耳あずけ　春枝
とちっても拍手喝采遊戯会　知佐子
悪口を言えばチクリと痛む胸　美代子
喝采の主役にあった裏の顔　民

病室に真心のうそ置いて来る　八寿子

川柳塔まつえ吟社　三島　淞丘報

昨日より明日へ期待の傘を干す　桂子
待つことに慣れてる母のおでん鍋　知恵子
ポケットの切札出番待っている　多賀子
ばあちゃんになるまで待った玉手箱　たけし
ふる里の風が待ってる春彼岸　房子
道化師の仮面をつけて出番待つ　淞丘
裏切らぬ花を心で育ててる　雪代
さくらさくら優しくなれる花の下　治代
はらはらと散ればはらはら落ちるもの　きみえ
生かされて心の花に水をやる　玲子
花好きと知って喜ぶ花の芯　長吉
少し汚れて路のとう咲きました　畔
落書きを残して去った無人駅　昭二
落書きにうなずいているお父さん　茂美
いたずらか本音か無人駅の壁　繭
思うさま落書きしたい今日の空　邦代
落書きが私の命もてあそぶ　義良
山肌に落書きですか残り雪　芳山
愛犬が家族の顔で和んでる　幸子
和やかな集いに幹事胸撫でる　政子
合格が決まり皆んなの和む顔　宏
よどみなく流れる川に和む朝　民子
美人ではないが心の和む妻　ちえこ
その中の一人の機転座が和む　静恵
いろいろの苦労を越えて丸くなる　喜美子
いろいろの舞台支える足の裏　幾子

湯の香り療養体を身なおした　小生
いろいろな個性をくらべ合っている　螢
銀婚式いろいろあった夫婦の間　注湖
惚け方もいろいろ笑ってはおれぬ　叮紅

富柳会　池森子報

飽食の世に梅干しの処方箋　和子
湯豆腐の湯気の向こうに毛糸玉　英子
方弁の嘘が横丁で坐り込む　冬虹
補聴器をつければ春はリズミカル　紅紫朗
また影を許してしまう朧月　鐘造
早春賦母が唄えば香る梅　あかり
バリュウムを飲んでのたうつ検査台　隆彦
青春は売り切れましたいま紅葉　富美子
相槌がずれて夫婦がきしみ出す　小枝子
何時何処で逝くかも知れず下着日　淳司
君の影感じた日から乱調に　一慧
たましいの半分ほどがまだ未熟　欣之
昨日より心模様もわかる手話　淳子
快心を隅の悪魔が邪魔をする　満子
私の中に歌えぬカナリヤが　奏子
心地よく心音を聞く母の海　初太郎
梅林の真ん中辺にある余韻　アキ
リサイクル売り切れ願う濡れ落葉　一太
かんにんな梅に心をうばわれて　伸雄
失礼ね松竹梅というランク　深雪
梅干しというブランドが母になる　順子
身の丈に合わすくらしのいいリズム　巳代一
売り切れた売れ残ったと店じまい　浩

焦点は合った引き金見つからぬ　奈保美
直角に問われ魚の顔をする　夕子
悪人が売り切れ紙芝居終る　アキラ
先に逝く一言残し友召され　高鶯
春の戸を梅一輪がノックする　宏至
鬼は外二月の鬼の吹き溜まり　浩子
笑ったら明日の風が吹いてくる　森子

倉吉川柳会　竹信照彦報

放送は時の氏神いざ救援　玲子
テレビジョンでも真実を映さない　螢
テレビにラジオ視野を広めて脳も生き　龍枝
放送に我が子ではないかと案じ　康子
掘りごたつ寄れば放送談義する　睦子
町内の放送局が姦しい　泰輔
出刃包丁漁師が研ぐとよく切れる　石花菜
手刀は右手で切れと書いてある　玲坊
延命措置をふり切って逝った母　重忠
家系図が私までは切れてない　芳光
頭から切ってほしいと尻尾言い　鬼一
四つ切りの南瓜一つを持て余す　よしえ
人を切り人生断った十七歳　次男
暮らしてる切り捨てないで過疎地でも　風露
振り出しへ女覚悟の髪を切る　悠子
小抽出しわたしの微罪眠らせる　和枝
幾滴の涙吸ったか古机　(前)喜美子
机上には思い出数多積まれてる　和子
ひとひらの想いが消える経机　きみ子
青すぎる企画倒れの机上論　節子
テーブルに並べきれない母の味　茶子
お下りの机に知恵も貰い受け　秋草
自分史を綴る机上のからまわり　京子
ピンクの空へ飛び出た毬は遠く遠く　克枝
しあわせをくれるピンクの紅を引く　勝誉
打吹山ピンクボンボリ足が向き　日出子
白髪になったらピンクにすげ変える　萩江
ゆであげたタコがピンクで膳にのる　賀寿恵
真心をピンクに染める初の恋　十三男
赤ピンク最期は白になる女　照彦

高知川柳社　川竹松風報

一生の不覚女房の尻の下　ただし
一生を棒に振ったはこの小指　孝雄
自分史の最期は棺の中で書く　圭二
口喧嘩しばし無口の時がすぎ　幸
一生が短か過ぎたよ竜馬像　かず子
一生を恩に着ますと借りたまま　愛宏
葬列が父の一生物語る　功
一生を根のない竹にすがる菊　快風
伝統の威風を保つ尾長鶏　典雄
私の一部始終を知る鏡　美々
待ちかねた春へはばたく鳥の数　哲史
渡り鳥国境消してフリーパス　則子
争いに負けてお鍋にされたシャモ　佳風
鴛鴦と言われた夫婦離婚する　良雄
一番鶏平和の夜明け告げたまま　和江
鶴が舞い皇居に遅い春がくる　てるみ
鶴が舞う軸の座敷に通される　松風
引越しへ後を濁さぬ鳥になる　京子

川柳さんだ　北野哲男報

呱呱の声パパの自覚が背に重い　朝子
溝前に背に一押しの風を待つ　章子
ちびっ子はパパの背中に隠れんぼ　歳子
人形屋の人形たちの無表情　朋月
医療ミス陳謝で終る深いなぞ　一之
女子ゴルフ顔見てへそ見て球を見る　好文
呑めぬから他人の二倍も食う料理　忠
冬の旅温泉の町で背を流す　雅司
常識の枠をはずせる力溜め　千代
二三日家計助かる二月行く　開子
料亭の味は知らぬと妻が拗ね　利昭
深海の魚になって目をつむる　婦美子
妻の留守電子レンジが忙しい　正和
飛行機で祝辞を五分述べに往く　哲男

岩美川柳会　石谷美恵子報

頑固爺死ぬまで譲る気配なし　稔
譲ること覚えて友が増えてきた　圭一郎
濱物石姑が譲った財産だ　一瑶
譲られた席ヒューヒューと隙間風　完司
七癖があってきっぱり生きられず　一京
甘い夢きっぱり忘れ立ち直る　一粋
きっぱりと好きだと言えずひとり酒　きみ子
胸の傷きっぱり言えぬ過去がある　よしえ
きっぱりと言えばいいのにじれったい　公乃
きっぱりと言えず悩みの淵にいる　たぬ

挨拶はきっぱり笑顔添えておく　裕子
好き嫌いきっぱり言って青い空　和子
きっぱりとまとめる声が柔らかい　幸枝
被災地を見舞う燕も早や飛来　はるお
越冬燕地震と雪に耐えました　忠良
親ばなれ子離れ燕教えてる　雅女
震度六燕返しの身のこなし　茶子
どれほどに降っても減らぬ雲ばかり　螢
おらが春奇跡が起こる気配なし　石花菜
歳月に奇跡の花がいま開く　睦子
末期がん医学の奇跡信じたい　孝男
奇跡かな傷つけられた金庫無事　重忠
賽銭が足りぬ奇跡は望めない　蟹郎
偶然が奇跡起こしている不思議　節子
センサーを学び燕のビル住い　公子
小春日に燕の古巣見つめてる　菖子
きっぱりと言って来ましたお月さま　美恵子

城北川柳会　吉岡　修報

扉越し妻と話をする羽目に　利昭
別れにも自動ドアーは軽く開く　千里
青春の扉開くと未知の国　集一
ロボットが人間以上になる怖さ　高栄
感情のないロボットは寂しそう　桂作
リモコンの届く範囲の自由です　あやめ
リモコンで空を飛びたい車椅子　朝子
ロボットに家事を任せて暮したい　倫子
難聴が母子の絆強くする　トヨ子
坂道で帽子を取った春の風　政子

自分史に苦い出来事書いてない　弘風
深爪の痛さで知った苦い恋　和夫
ほろ苦い言葉をそえて金を貸す　順三
おほほほほ箸が転んだだけなのに　志華子
八起きめの顔プライドを捨てている　重人
転びくせついて明日を丸く生き　睦子
忙しく回る間は転ばない　正
転び方上手で生きてきた達磨　ひさ乃
やがてやがて生命線をころげゆく　修
病める子に扉を開ける手になろう　求芽
今日のページへ栞をはさみ以下余白　春蘭
創業の遺訓が今はあだになり　柳一
苦いこと言うけど友は温かい　達子
サスマタを横に教えるアイウエオ　史風
豪勢な扉もローンの音がする　はじめ
いい人と思いがけないことで知る　ルイ子
私にはどっちゃでもいい株騒ぎ　とし子
肉まんを包むが如き手の温さ　昭子
仲直りふっくらパンが焼けました　典子
不平など言えぬ五体がみな動く　千歩

川柳ねやがわ　森　茜報

内定の会社倒産する噂　勇太朗
アバウトな恋よ二人の永い春　柳弘
閻魔さんの内定リスト気にかかる　修
神様が内定してる赤い糸　かすみ
個人情報クイズ応募に罠がある　恵子
寒気耐え心を磨く修行僧　栄二
寒気にも寄りそうふたりはあったかい　亜成

出て行くと言うて行く先ない寒気　とし子
失恋の悪寒に悟るシャイな僕　寿子
寒気ぐらいで休んでいたら椅子がない　たもつ
じんじんと寒い言葉にある別れ　朝子
アラジンのランプが欲しくなる総理　九好
魔法でも奇蹟でもない匠わざ　頂留子
ぽっくりと死ねる魔法にかかりたい　忠央
マジックのような答弁誰かさん　一炊
マネキンの魔法にかかり高い服　弘風
開けゴマ呪文で開かぬ午前二時　利昭
喋るなとポチに魔法をかけておく　れい子
名投手魔法の球を持っている　さち子
母さんの魔法の一つ隠し味　洋
今年また魔法効いたかチョコがくる　勲
祭りの魔法五臓六腑のはや踊り　一風
ねこやなぎ春を奏でる四分音符　高栄
里帰り座が決まってる囲炉裏端　日出子
負けん気の強さを買われている異動　庸佑
いい汗をかくと優しい風に逢う　弘一
かと言うて酒もたばこも止められず　仁清
優しさの謎は苦労のせいだろう　ルイ子
ワンマンが通ると酸素うすくなる　茜
嫁に行く昔の妻のかおをして　度

サークル欅様　吉田あずき報

心眼で選んだ女という安堵　遠野
宿題が重くて人の背は曲る　楓楽
宿題の方程式が解けてきた　房子
省略が過ぎて溜息だけ残る　扶美代

昆虫採集得意だったよ夏休み　美籠
振り向けば宿題たんとし残した　みつ子
終らない宿題子への送り物　光久
菜の花漬　蝶の舞うてる皿に盛る　義子
歳の差を忘れて笑い合うビール　あずき
磨いてからの鏡はっきりものをいう　いわゑ
消化不良の宿題が胃に溜まる　希久子
愕然と子がみな五十過ぎていた　棲世
賽銭で今年一年よろしうに　節子
天才に宿題出して叱られる　たもつ
ほめ言葉お通夜の席と披露宴　哲夫

川柳エスポ　山本三郎報

清しさや梅一輪が凛と咲く　三郎
悲しみを脱ぎさるようによく笑う　文好
平凡という二文字のむずかしさ　昭一朗
もういいよ耐えて我を張るガンの母　任宥
心の闇卒業生が師を殺傷　三枝
魔法にはかからぬ阿呆が風邪をひく　とし子
酉の春焼き鳥ちょっと遠慮する　一炊
誕生日何は無くとも冬苺　さち子
歌を聞きよみがえる歳ハタチ代　星花
おいと呼びお前と言いつ五十年　晩翔
地を割って春の息吹きを覗かせる　髙栄
みがこうよこころの鏡ピカピカに　はつよ
年の瀬に我が子と別れ春もなし　あや子
本集めゴミふやすかと妻がいう　よねぞう
親は子に似るなとも言い似よとも言い　ただよし
十七歳の自分で切った臍糸　れい子

あっさりとしてるお方で話しよい　ルイ子
何か変生きてるうちに建てた墓　恵美子
何もかも可笑しな日本目を覚せ　一歩
ひとり言見れば携帯歩行中　ゆき子
命継ぎ家族の絆身に沁みる　みさと
年金でミミズのような我が暮し　とよ子
校門で親を証明させられる　さとし
泣かされる覚えないのに花粉症　一幸

岬川柳会　八十田洞庵報

ポケットに嘘と真が絡み合う　和香
ふわふわと風に乗りたい妥協癖　俶子
ふわふわと波間揺られる流し雛　悦子
倦怠期やっとトンネル先が見え　四郎
もの忘れポケットメモが出番待つ　みやこ
ふわふわの椅子でテレビと小半日　年子
ポケットの隅へこっそり母の愛　令子
無駄話にしないようにメモを取る　扶美代
ふわふわと噂の種が風に乗る　富美子
顔よりも心美人で若くなり　茂平
辛抱の棒を折らずに渡る橋　野添
ふわふわをぶくぶくにした皮下脂肪　蛙城
脛かじりふわふわ旅の豪華版　里子
交番へ夫婦ゲンカを持ち込まれ　洞庵

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

母独り小さく結ぶゴミ袋　ますみ
真一文字に結んだ口を信じよう　喜美子
結び目のゆるさが丁度よい二人　能子

結び目がゆるむ老いたる隙間から　あずき
青春の夢のドラマが動きだす　民
ゆるせないわたしOSAKAの一市民　香住
ニートの子も確かな希望あるはずだ　シマ子
ひとつふたつ山越えてきた涅槃かな　弘直
何事も希望を持てばよい知らせ　慶子
希なこと良くも悪くも生きてこそ　加津子
ホリエモン小憎らしいが希望の灯　欣史子

堺川柳会　河内　月子報

急がずに熟成させた愛確か　五月
ママのおなか宇宙遊泳しています　千代
安心のシナリオなどはない老後　順子
味噌汁がずいぶん旨くなったわね　小雪
三日月がずっと見ていた仲違い　かりん
無事な顔見たら途端に腹が立ち　八千代
とりあえず帰るコールを入れておく　深雪
悪いこと出来ませんわと言う世間　天笑
話してる内に縁者になってきた　像山
食べるのも寝るのも同じ四畳半　朋月
予定表埋めて不安を消している　和夫
隅っこの狭いところが落ちつける　さくら
急ぐのに馬鹿丁寧なご挨拶　玄也
幸せを探して春は急ぎ足　扶美代
急いでもほほえみだけは忘れない　篤子
母さんへ焼芋持って駆けてくる　楓
狭いから今夜のおかず直ぐ分かる　潤子
病む友の笑顔にほっとして帰り　梓
鳩尾にずっしり重い内緒事　りつえ

蘭の芽が日増しに伸びて気忙しい　文好
メモせぬと安心できぬ歳になり　仲直りせずにおれないワンルーム
安心が出来なくなった国に住む　にぎやかに楽しく暮す兎小屋
狭い門抜けてニートの仲間入り　急がなきゃ先の見えない待ち時間
急いだらあかんほらまた転けちゃった　マイペース乗り遅れても急がない
陽当りのいい丘に墓地買いましたガン保険かけております不摂生　なぎさ

豊中もくせい川柳会　江見　見清報

お水取りすんで暖か桜餅　英子
春一番耳に予報は雪便り　知香子
さし迫る核でも鰯群れている　啓生
現世の地獄極楽肌で知る　庸佑
味気ない昼食たべる妻の留守　正坊
花便り御破算にする雪便り　高栄
お花見の席とり先に赤くなる　巴子
あの口が会の運営決めてゆく　玲子
団欒の席にも順があるらしい　禄骨
火傷せぬ程度で軽いおつき合い　萬的
快調の時は時間を止めておく　満寿巳
決めてから夫の意見聞いてみる　宇乃子
母さんが決めた文句がありますか　寿美子
五線譜に軽い口笛乗せてみる　隆
昼寝後に食べるオヤツをかくしとく　蛙
尋ね人四天王寺もボランティア　春

夫婦げんか思い出してる三回忌　千津子
躓いた敷居に文句言うてみる　都代子
寝たきりの母を抱いて春の庭　尚士
じっくりと決意かためて待つマグマ　幸雀
車椅子なのに首席卒業えらいねえ　郁子
将来のためを思えば軽い怪我　求芽
噛みしめた奥歯が我慢しろと言う　石舟
あの席にいつもの人がいる安堵　重人
躓いてはじめて見えるほんまもの　則彦
年金を枕に昼寝しています　見清

川柳藤井寺　髙田美代子報

朝帰り家には恐い鬼が住み　龍一
文明が進めば鬼も増えてくる　かつみ
前途洋々鬼がいっぱいいる会社　重人
豆まけば鬼もいっしょに拾ってる　アヤ子
鬼の子が人間不信なやんでる　光男
友達ができて優しくなった鬼　扶美代
節分に追い出しきれぬ鬼といる　婦美枝
だまされてみようか鬼の傘の中　昭子
血圧に悪いニュースを聞いている　六点
怒鳴らないでまた血圧が上がるから　志洋
ひと言が言えて血圧正常値　絹歌
血圧を下げる薬を酒で飲む　いさお
いのち紅血圧上がったり下がったり　弥生
血圧がなんだ塩鮭塩こんぶ　みつこ
おみくじは吉血圧は百二十　一筒
風刺犯残した落書きから足　喜代子
過去形になった落書き置いてくる　終一

栄転の椅子へゴマスリめと張られ　栄一
相合傘まだあるかしら路地の塀　登志子
壁ふすま問わぬ我が家の豆画伯　悦子
落書きの相合傘に気になる名　耕策
公園で落書き遊びする天使　ヨシ枝
ピカソよりうまい落書きほめてやる　井竿
落書きも時代移れば壁画にも　武義
落書きに世相が映るガード下　惠勇
私の胸に落書きしたいけず　鐘造
落書きは敗者の居場所だと思う　元紀
落書きは僕の心のメッセージ　桂子
サクラサクそんな落書きなら許す　瑠美子
論破したもののむなしい独り酒　史郎

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

打てば響く友と弾んで春の宵　加津子
メル友が増えた分だけ若くなる　あかり
病む友へ精一杯の笑み贈る　更紗
都合いい時だけ友と呼びに来る　はじむ
レンタルで日本縦断青春記　弥生
キッチンへレンタルしますお父さん　きらり
レンタルで借りたカバンに旅をつめ　レイ子
レンタルの心臓つけと医者がいう　芳香
レンタカー乗り捨てられて無表情　幸生
幻になってる父は二等兵　ますみ
幻の遺構脚光浴びてくる　政義
幻にしてはならない平和論　頂留子
母が逝きふる里幻のように　ダン吉
栄光は幻だった青テント　シマ子

細波も津波も同じ海の顔　浩三
百円もたまには財産だと思う　春蘭
ひくことを知って一皮むけてくる　宏至
シャラポワの声がコートをひきしめる　とみを
仏様も忘れるふりがうまくなる　たもつ
満天の星に忘れていく憂き世　欣之
うっかりが続いて肩身せまくなる　柳伸
そんな事記憶にないと言う忘れ　欣子
引き出しに忘れかけてた夢があり　まつお
妻の愚痴忘れ上手な両の耳　義明
くやしさを忘れずいつもバネにする　一風

川柳塔打吹　大森　孝恵報

骨折ったほどには痩せぬダイエット　義人
手折りした椿かすかに罪の色　三津子
鶴を折り平和の風を待っている　貴恵
折り紙で遊んだ日々の万華鏡　和子
大木も折れて新芽が吹いてくる　たけ代
故事来歴破る若者志向主義　玲子
春の陽がひよこの殻を破らせる　善江
罪と罰破れかぶれの地獄行き　蛍
オーイお茶静寂破る頑固爺　美知江
煙草やめるたてた誓いをまた破る　公恵
約束を破った後の孤独感　順子
破られるのが宿命の新記録　玲坊
夢破れ充電します冬ごもり　清
破天荒に生きてみろよと春一番　克枝
五七五壁に当って四苦八苦　芙美子
村雀壁の向うではしゃいでる　禎元
熟年の冷戦期には壁欲しい　セツ子
完璧の言葉など捨てのんびりと　紀美恵
あの壁を越えたらきっと運が向く　泰山
嫁姑孫の笑顔が壁溶かす　龍枝
天井が観ている壁が聞いている　石花菜
カルチャーが部屋をいきいき壁飾る　京子
栄華みた跡の白壁土蔵群　重忠
平凡と非凡不思議にうまが合う　博丈
平凡を抜け出る汗をかいている　節子
春柳桜の花の芽はつけぬ　照彦
平凡な男に七味とうがらし　幸子
寝て起きて食べて元気にどっこいしょ　久芽代
梅茶漬このまま歳をとっていく　芳光
厚い壁破り平和の鐘が鳴る　孝恵

平成17年北海道川柳大会

兼 岩見沢柳の芽川柳会創立40周年記念

日時　**7月24日**(日)10時開場　締切11時
ホテルサンプラザ（0126-23-7788）

宿題（事前投句・2句・千円・6月5日迄）
「鳴る」斎藤大雄選「実る」佐藤富子選
「洗う」岡　嘉彦選

投句先〒068-0814岩見沢市美園四条2-3-9
北海道川柳大会事務局　桜岡不二子宛
TEL・FAX 0126-23-0055

宿題「増える」高橋みっちょ選「包む」熊谷美智子選
（当日）「称える」新井笑葉選「笑う」浜中道子選

会費　二千円　**主催**　北海道川柳連盟

大阪川柳人クラブ　第6回　吟行案内

催行日　**5月26日**（木）8時集合
JR大阪駅ビル西側　大阪中央郵便局正面

行程　大阪発→龍野公園→文学の小径→露風生家→雨情歌碑→武家屋敷→そうめんの里（昼食・句会・資料館見学）→大阪駅着16時30分頃

参加費　7000円
取消し　催行日3日～2日　半額負担
催行日前日～当日　全額負担

宿題「吟行雑感」「誘う」各題2句連記

申し込み　**5月10日**（火）までに左記へ
大堀正明　06-6305-4536
長浜美籠　06-6422-8675
坂本晴美　06-6384-2466

第88回大阪川柳の会

日時　**6月3日**（金）17時開場
会場　サンケイビル本館322号
宿題「ゆっくり」柏原幻四郎選
（各2句）「西　瓜」竹森　雀舎選
「予　定」木本　朱夏選
「若　い」磯野いさむ選
会費　千円　締切　18時
欠席投句（会員のみ）6月2日迄

《最新刊》 田口 麦彦 著

楽しみながら上手くなる
穴埋め 川柳練習帳
クイズを解いてきみも達人

現在活躍中の川柳作家の秀句を例題に、キーワードを埋め字することで自然と川柳が上達する本。クイズを解く楽しみと川柳が上達する喜びを同時に手に入れることができます。例句はテーマに分けて出題してあるので体系的に学ぶことができます。また原句の答えだけを紹介するのでなく詳細な鑑賞も掲載してあるので充分に納得することができます。

三章からは各句を埋める問題で捉え方や適切な措辞の方法まで理解することができます。四章の添削コーナーでは段階的に推敲添削を紹介、実作に役立つように配慮しました。

四六版並製　２４０頁　定価:税込１６８０円送料210円

《好評発売中》

川柳表現辞典
田口麦彦　46上製箱入
税込三五七〇円送210円

現代川柳の秀句六九二七句、見出し語一五四二語をあげて語の意味等説明。表現の方法と技術を示した

現代川柳入門
田口麦彦46上製カバー
税込一九八〇円送210円

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を現代の言葉で例句をあげて説明。実作者への入門書

川柳技法入門
田口麦彦46上製カバー
税込一九八〇円送210円

川柳上達の技法を九二五句の引例で説明。一句の完成までの推敲添削他　風刺・ユーモア・比喩等の方法

時事川柳入門
田口麦彦46上製カバー
税込一八三五円送210円

現在を17音で切りとる諧謔精神の表現方法やサラリーマン川柳の即興性など、九五三句の例句で解明

【ご購入はお近くの書店か直接小社まで・各書の内容見本進呈】

〒112-0002 東京都文京区小石川1-16-1 飯塚書店 TEL 03-3815-3805 FAX 03-3815-3810 www.iizukabooks.com 振替 00130-6-13014

柳界展望

○第1回身近な「怒り」コンクールは木津川計氏選で885句の投句があり、大賞に堀正和氏が選ばれた。

○第11回兵庫高齢・退職者川柳祭典受賞者の本社関係者は次のとおり。

〈兵庫県労働者福祉協議会会長賞〉

年金の底を覗いて生きている　中塚　礎石

〈佳作〉

古川奮水・中塚礎石

○平成16年度紋太賞（ふあうすと川柳社）を㊚小池しげお氏が受賞。

シーソーに乗る売り言葉　買い言葉　ほか9句

○中国新聞社1月柳壇賞を正畑半覚氏（同人・竹原市）が獲得

私を剪定したくなってくる

○尼崎川柳協会役員

会長―長浜美籠　副会長―田辺鹿太・岩城義芳・南全彦

○政岡日枝子さん（理事・米子市）は4月から公民館活動の一環として「すみよし川柳会」を発足する。

▽出　版△

■田中正坊氏（豊中市・参与）は、4月23日付で川柳句文集『赤えんぴつ』（B6判・254頁・頒価二千円）を刊行。作品とエッセー66編を収録。序文　岩井三窓　番傘川柳本社参与。

▽訃　報△

■小池しげお氏（参与・松原市）は、3月8日前立腺癌のため逝去。松原丹南総合会館で行われた通夜・葬儀には柳友多数が参列した。80歳（100頁に追悼記事掲載）

■工藤吟笑氏（同人・東かがわ市）は、3月21日肺炎により逝去。松本葬祭場での通夜・葬儀には柳友多数が参列した。94歳（追悼記事101頁）

▽訂正と削除お詫び△

□**3月号**＝18頁下段10行目、有頂点→有頂**天**　99頁下段21行目、塔句先→**投**句先

□**4月号**＝27頁下段8行目の句、本人の申し出により削除　59頁上段7行目、水田→水**団**　97頁中段26行目、笑い皺→笑い**顔**

常任理事会＝4月7日㈭出席者18名　①川柳塔まつりについて、料理・記念品等　②特別常任理事会の件―同人・誌友の現状報告他　③選者交替（愛染帖・二賞他）　④各地大会出席者申出・祝電・祝儀　⑤番傘交換換者　⑥同人承認2名　他

次回常任理事会＝5月10日㈫13時30分～　アウィーナ

新同人紹介

（前月承認）**鈴木一弘**（すずきかずひろ）

―岳人・由多香・雄々推薦

富田美義（とみたよしみ）

―諷云児・美籠・尚士推薦

坂上淳司（さかがみじゅんじ）

―岳人・直樹・正子・冨美子推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	14日(土)午後4時から 愉快・揺れる・軽い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
川柳 藤井寺	15日(日)午後1時から 漬物・さわやか	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子
岬川柳会	15日(日)午後1時半から 背広・温もり・ブーム	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 ねやがわ	15日(日)午後1時半締切り ブランド・忘れる・折る 自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9 高田博泉
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から 余白・グループ・いっぱい 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4 江見見清
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)正午から 折れる・不自由・おまへん フルムーン・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2—8—9 上砂真笑
岸和田 川柳会	21日(土)午後1時半から みかん・報いる・名刺・文字	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
はびきの 市民 川柳会	22日(日)午後1時から 大型・地方・ペン・「歴史」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	22日(日)午後1時から ちぐはぐ・コンビニ・図星	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2 植田一京
川柳塔 みぞくち	23日(月)午後7時半から 怒る・いじわる・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪 川柳会	25日(水)午後6時から 迂回・言い分・怠ける マンネリ	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前9時半から 川・安心・訴える・うっとり	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	28日(土)午後6時から シナリオ・文句・届く・美	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21 片岡湖風
京都 塔の会	30日(月) **吟行** **5月号97頁参照**	お問い合せ先 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

5月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	6日(金)午後1時から したたか・匠・思惑	奈良市立中央公民館4F（近鉄奈良④出口歩5分） 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62—6 渡辺富子
尼崎 いくしま	6日(金)午後1時から 弾む・男・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
城北 川柳会	7日(土)午後1時締切り 撫でる・杖・ホテル・自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣り 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
富柳会	7日(土)午後1時から 意外・そっと・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	7日(土)午後1時から 希望・石・寂しい	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	8日(日)午後1時から モラル・床・燃える・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	8日(日)午後1時から 板・値打ち・クイーン (か・よう「助動詞」)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 脚光・求める・ひょっと 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2—82—308 西口いわゑ
川柳塔 唐津	9日(月)午後1時半から 蝿・かび・銀河	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13 宗 水笑
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時から 箱・取る・さて	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1 水野黒兎
尼崎 尾浜 川柳会	10日(火)午後1時から 空気・若い・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太
堺川柳会	14日(土)午後1時から 包む(共選)・数 ご・ぼ・う(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3 河内天笑
川柳塔 打吹	14日(土)午後1時から 注文・手・遊ぶ	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川柳塔 まつえ	14日(土)午後1時半から 冗談・苦手・純・光る	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22 三島凇丘

編集後記

☆昨年10月24日の新潟中越地震の復旧が、やっと始まったばかりというのに、また3月20日に福岡県西方沖地震。幸い九州在住の同人・誌友の方には被害がなかったとの事で、ほっと安堵の胸をなでおろしている。☆こう矢継ぎ早に大地震が起きるとは、単なる偶然なのだろうか。ひょっとして日本沈没――などと恐いことを考えてしまう。

☆〝ゆとり教育〟のせいかどうかは疑問だが、子供の学力低下が案じられている。藤原正彦教授の説によると、特に国語力の低下は、知的活動、論理思考力、情緒、祖国愛の低下を引き起こすという。文芸はいうに及ばず、まさに亡国の危機である。☆子供は9歳までに母国語を持たないと、物事を深く考えられなくなると聞く。わが子を国際人にするために、日本語より英語教育をと、幼いうちから躍起となっている親があると聞くが如何なものだろう。

☆この歳になれば、外国語が出来なくても海外旅行へ行く時に、いささか不自由を感じる程度のもの。日本語で川柳に親しんでいる方がずっと楽しい老後が送れるよ、日本語をしっかり学ばせなさい、と教えて上げたい。

☆現在、編集要員は義子・希久子・朱夏さん・私と、扶美代さんにアシスタントをお願いしている。本社句会の清記は毎月交替で、義・恵子さんの他に、4月から村上直樹さんに加わっていただいた。編集部一同よろしくお願いします。(ふ)

ひとこと

川柳でノーベル賞を

内外強い閉塞感だ。せめて初夢でも、でかい思いをしてみよう。

おのおのがた、川柳でノーベル文学賞を狙おうではござらぬか。格好の例がある。詩歌ではインドのタゴールが、イギリス・ロマン派の流れの中に、独自の詩境を打ち立て、一九一三年にアジア人初のノーベル賞を得ている。この賞は「文学の分野において理想的な傾向のなか最も優れた作品を創作した人」に与えられる。タゴールは自詩集「ギタンギャリ」を英訳して世界に認められたが、川端康成や大江健三郎など日本的文学観も国際的に評価されるようになった。川柳にも望みがある。

彼の作例「嬰児はみんな　神がまだ人間に絶望してはいないというメッセージを持って生れる」

(早川　棲世)

○相変わらずの日本語ブーム。「どこがおかしい？何がおかしい?」をキャッチコピーに『問題な日本語』(北原保雄編・大修館書店)が売れている。「こちら～になります」「なにげに」「わたし的にはＯＫです」ｅｔｃの問題な日本語を俎上にあげる。

○「単に使ってはいけない」「この用法は間違っている」と指摘するだけの本ではない。「誤用の論理」は何なのかを究明している。「諸国を巡って仏道を「修行・修業」する」使うのはどっち?といった質問の数々に教えられる。

○卒寿の詩人・杉山平一氏が詩集『青をめざして』(発行・編集工房ノア)を出版された。その中の一編「わが国の生の読み方」を紹介したい。「生まれる　生きる　生いたち　生える　生意気　生一本　生産　一生　往生　芝生」ウーン日本語はややこしい。

○木曜日夜10時25分ペンとメモを用意してテレビの前へ。ＮＨＫ教育テレビ「知るを楽しむ、日本語なるほど塾」が始まる。さまざまな角度から日本語を考える講座である。僅か25分の番組だが流砂の中にキラリと光る砂金のように、存在感のある番組である。(朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**7月号**）地名

県
市　姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

栞忌 本社5月句会

とき　5月10日(火) 午後5時半開場・6時半締切り
―開催時間にご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし　板尾岳人

兼題　「母」　寺川弘一選
「洗う」　川端一歩選
「我慢」　木本朱夏選
「切る」　藤田泰子選
「良心」　河内天笑選

席題　1題　当日発表（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円

本社6月句会　7日(火) 午後5時半から

兼題　「畳む」「相手」「ひかる」
「女」「便り」

作品募集

7月号発表（5月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　奥田みつ子選
愛染帖（3句）　波多野五楽庵選
茴香の花（3句）　政岡日枝子選
「蝿」　森本弘風選
「かび」　古今堂蕉子選
「銀河」　渡辺富子選
課題吟（3句）
初歩教室　「ほいほい」（3句）　三宅保州担当

8月号
課題吟　「水着」「溺れる」「水平線」
初歩教室　「線」

第23年度 夜市川柳募集

第12回「童」　小島蘭幸選
ハガキに3句　5月20日締切
投句先　〒593-8305　堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2) 愛染帖・茴香の花・一路集（課題吟）への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇五年（平成十七年）五月一日発行
編集兼発行人　河内權治
印刷所　美研アート
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六六一九―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成十七年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九三六号　川柳塔　五月号
定価　八百円（送料　八十四円）

第29回 全日本川柳2005年広島大会

日時　六月十二日(日)　午前十時開場

会場　広島郵便貯金ホール（大ホール）
〒七三〇―〇〇〇一　広島市中区白島北町一九―一
TEL〇八二(二一三)六三六七

宿題　第一部　締切りました
第二部（当日投句・十一時二十分締切）
「世　界」田中八洲志　選
「事　件」大場　可公　選
「　貝　」高梨　宗路　選
各題二句　当日配布の句箋に記入

第二次選者　磯野いさむ・泉　比呂史・藤沢　岳豊
成田　孤舟・佐藤　良子

会費　四、〇〇〇円（昼食・記念品含む）

表彰　文部科学大臣奨励賞
参議院議長賞
川柳大賞
大会賞
ジュニア部門は賞状とメダルを予定

問い合わせ先
〒七三九―〇二四　東広島市西条町御薗宇六四七―七一
白井孝司方　TEL・FAX〇八二(四二三)六六六六
＊
㈳全日本川柳協会大会委員長　磯野いさむ
全日本川柳広島大会実行委員長　定本　広文

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保健取扱　看護2A・緩和ケア病棟
・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター
診療時間
月～金　8:30～16:00
土　8:30～11:00
JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp
電話 大阪(06) 6771-4861(代)

雑誌　05703―5